関西大学
東西学術研究所々報
第九十一号

二〇一六年（平成二十八年）五月一日発行
編集発行人　中谷伸生
発行所　関西大学東西学術研究所
吹田市山手町三丁目三番三五号
電話　〇六・六三六八・〇六五三
FAX　〇六・六三三九・七七二一

洋の「東西」をめぐって

中谷　伸生

関西大学東西学術研究所は、「東西両洋文化の比較研究」を目標に掲げて歩んできた。「東」と「西」という概念は、もともとギリシア・ローマ世界が、地中海を中心に考えたものだという。「アジア」という概念も同様である。ヨーロッパの他者としてのアジア、そして、「東方（Orient）」という言葉は、地中海の東の地方を指し、いわゆるイスラム教を信奉する地域を指す概念に他ならない。一九七八年に出版された『オリエンタリズム（Orientalism）』の著者エドワード＝W・サイード（Edward W. Said 一九三五～二〇〇三）が、「東方」という概念について、ヨーロッパの人間が、非ヨーロッパ世界を総称する言葉だと指摘したことは記憶に新しい。

一方、「東洋」という言葉は、もともとは中国を中心にして、それより東、あるいは西という意味で用いられ、日本などは東の海という意味で東洋にあたる。翻って、日本で「東洋」を「アジア」と同じ意味で使い出したのは、幕末明治期の近代化に沿ってであった。加えて、「東洋」という言葉は、幕末明治期に佐久間象山（一八一一～六四）らが、「東洋」と「西洋」とを対照的に捉える用語として登場した。以後、日本の大学の講義名でも、「西洋史」や「東洋美術史」という名称が用いられ、洋の東西という言葉が定着していくことになる。

奇妙なことに、「東洋史」という科目名称は、中国を中心としたアジア史のことを指し、そこからは日本が除かれている。一九九〇年頃まで、「日本及び東洋美術史」という名称が、全国の大学で講義科目に用いられていたが、要するに、日本美術はアジア美術と区別されていたわけである。近年は、日本を含む「東アジア美術史」研究の構想も浮上してきたことから、「日本及び東洋美術史」の科目名称は、明治維新以来の役目を終えようとしている。そのことは、とりもなおさず、「東洋」という言葉の終焉をも意味している。つまり、使用言語としては、「東洋」（East）から「アジア」（Asia）へという流れが決定的である。

明治の思想家の岡倉天心（一八六三～一九一三）は、西洋（ヨーロッパ列強）社会に対する対抗意識を抱き、「いつになったら西洋（West）が東洋（East）を理解するのであろうか。いや、理解しようと努めるのであろうか」と、一九〇六年刊の『茶の本』（The Book of Tea）において歎きつつ呟いた。西洋に対しての東洋、つまり、アジアをめぐって天心は、その地理的、文化的範囲を決めるのに腐心したようで、イスラム圏の中近東地域をアジアに入れるか、それとも除外するかで揺れ動いた。すなわち、一八九〇年（明治二十三年）から三年間にわたって行われた東京美術学校講義では、泰西（西洋）美術史の中にエジプト、アッシリア、ペルシア美術を含めていたが、一九〇三年に刊行された『東洋の理想』（The Ideals of the East）においては、東洋の中にアラブ、ペルシアを組み入れている。ところが、中国を中心とした「東アジア」にペルシアなどのイスラム圏を含める広大な東洋（アジア）を想定した場合、果たしてそれらが文化的統一体と言えるのかどうかという疑問が生じてくる。また、天心は、中国の漢民族の豊かな文化を破壊したとして、モンゴルを嫌い、東アジアという枠組からモンゴルを除外しようとしたことから、そのアジア概念はいよいよ複雑なものとなっている。結局、天心のアジアは、西洋に対峙するやり方で、中国、日本、韓国、そしてインドを核として収斂されていくようになる。こうして「アジアは一つ（Asia is one.）」という言葉の謎がいよいよ深まった。

「東西」という言葉が、いささか古びてみえるようになってきた今日、東西学術研究所も、新時代に向けて、清新な組織として甦らねばならない時代を迎えたのではなかろうか。

目次

巻頭言　中谷伸生　1頁
研究例会報告　2～12頁
平成二十五～二十七年度　東西学術研究所研究報告書　13～44頁
彙報　45～71頁

研究例会報告

◇第一回　二〇一五年五月十五日

近世近代日中文化交渉（日中移動伝播）研究班（一）

主幹　井上克人

概要

この例会では、まず準研究員である呂超氏が日頃の研究成果を発表し、論旨の明快な内容で好評であった。その後、復旦大学教授・日本研究センター副所長の徐静波氏により、堀田善衛を中心に近代日本人と上海の繋がりについて啓発的で刺激に富むご講演が行われた。

「宮崎市定における近隣地域史像の変遷――東洋史からアジア史へ――」呂超（近世近代日中文化交渉研究班・準研究員）

「近代日本の文化人と上海（一九二三～一九四六）――堀田善衛を中心に――」徐静波（復旦大学教授・日本研究センター副所長）

研究要旨

呂　超　準研究員

「宮崎市定における近隣地域史像の変遷――東洋史からアジア史へ――」

本発表は宮崎市定の東洋史に対する認識の変化を検討したものである。宮崎の東洋史に対しての認識には、中国史を主な研究対象とした東洋史はアジア全域に及ぶべきであるという学術的転換が伺える。では、どうやってそのような学術的転換をとらえるべきでしょう。まず、宮崎の最初の東洋史に対する認識を考察し、そして、『大東亜史概説』編纂事業への宮崎の関与を考察したうえ、そのような転換の原因と実質を当時の社会的イデオロギーと結びついて検討した。

◇　◇

◇第二回　二〇一五年五月二十九日　アジア文化研究センター共催

非典籍出土資料研究班（一）

主幹　玄　幸子

概要

森部・篠原両研究員および影山アジア文化研究センター非常勤研究員により各テーマで研究発表が行われ、会場では質疑応答と意見交換がなされた。

森部豊研究員：「唐代契丹人墓誌に関する一考察――遼寧省朝陽市博物館所蔵新出墓誌の紹介を兼ねて――」

篠原啓方研究員：「五～六世紀　新羅の教と法」

影山悦子アジア文化研究センター非常勤研究員：「中国北部に移住したソグド人の葬具について：欧米の博物館が分蔵する石棺床囲屏のCGによる復元」

発表要旨

森部　豊　研究員

「唐代契丹人墓誌に関する一考察――遼寧省朝陽市博物館所蔵新出墓誌の紹介を兼ねて――」

二〇一四年十一月に遼寧省朝陽市博物館が所蔵する唐代の墓誌の調査に関する報告と、その墓誌の内容、唐代研究における有用性を述べたものである。朝陽からは唐代の墓誌がまとまって出土しているものの、部分的な利用にとどまっているのと、それらが唐代の当該地域で活動していた契丹人の墓誌の可能性があることが、ほとんど注意されていない。本発表は、その点を強調し、今後の唐代契丹史研究における本墓誌群の史料的価値を明らかにした。

篠原啓方　研究員

「六世紀の新羅の教と法」

六世紀における新羅の法は、いわゆる律令であるとする説（実在論）と、律令の体裁を伴わない成文法であるという説（不在論）に分かれる。前者は韓国の研究者に、後者は日本の研究者に多く見られるが、そのいずれもが日本古代史における律令国家論の影響を少なからず受けている。しかし資料の質や量の相違から見れば、日本古代史が新羅のモデルとはなり得ず、新羅独自の史的展開を中心とする新たな検討が必要である。六世紀における金石文資料を検討すると、『三国史記』に見える頒示律令（五二〇年）の記事は、新羅における成文法典の成立を指すものとして評価できるが、律と令という体系とは見なし難い。またこの法典は、王命（教）が蓄積された「教令集」ともいうべきものを篇目別に編纂したものである。新羅最初の法典は、中国や日本の律令との類似性よりも、その独自の編纂の意義を高く評価すべきである。

◇　◇

◇第三回　二〇一五年六月六日
中国近世語学会共催

言語接触研究班（一）・非典籍出土資料研究班（二）

主幹　内田慶市

概要

非典籍出土資料研究班との合同研究例会として、研究員（二名）、外部発表者（二名）の発表の他、北京大学の蔣紹愚先生をお招きし近代漢語に関わる内容での特別講演をお願いした。参加者は百名近く盛会であった。

主幹　玄　幸子

概要

中国語歴史研究の最重鎮である蔣紹愚先生（北京大学／清華大学）をお招きして講演会を開催した。テーマは「关于汉语古今差异的一些思考」である。併せて玄幸子研究員が「太田辰夫「兼語動詞」と認知言語学」と題して研究発表をおこなった。例会の概要及び蔣紹愚先生ご講演原稿は下記URLに公開されているのでここでは再掲しない。

概　　要：http://kinseigo.chu.jp/?p=233
レジュメ：http://kinseigo.chu.jp/wp-content/uploads/20150606.pdf

発表要旨

奥村佳代子　研究員

「近世日本人による白話文――創作白話文の題材と語彙語法――」

「譯阿州孝子文」は、江戸時代中後期に活躍した文人である大田南畝（一七四九～一八二三）が古今の文章を集めた『鑽故紙』の巻二所収の写本資料である。『鑽故紙』の目録の頁には、「譯阿州孝子文」の下に「譯司」という記述があるが、唐通事の作であることが確実ならば、『忠臣蔵演義』や『国姓爺合戦』第三回などと同じく唐通事の白話知識が現れた資料であるということになるだろう。

本発表は、本資料を江戸時代の白話資料として扱うために前提として必要となる基礎的な作業を行い、一、「譯阿州孝子文」は『孝子鑑』（元禄九年（一六九六年）刊）に収録された「矢嶋屋忠兵衛事」を訳したものであること。二、語彙と語法の整理、三、その他の資料との語彙比較。以上三点に関して報告した。

玄　幸子　研究員

「太田辰夫「兼語動詞」と認知言語学」

「がんらい使役と被動との區別は客觀的な事實そのものにあるのではなく、主觀的な判斷にもとづく」とする太田辰夫一九五八の見解を別の角度からどのように説明できるか、という点を出発点として近年の研究状況を概観しつつ次の結論を得た。

（1）　太田辰夫一九五八「兼語動詞」で取り上げられている使役・受動の二種の機能が認める《教》（交）（叫）《讓》は本来授与の意味を持つ。

（2）　授与動詞の典型である「給」「與」には当然使役・受動の二種の兼語動詞の機能用法を認めうる。

（3）　授与動詞の《授与》から《受動》への移行過程は、〈使役〉を介在させる場合が多数を占めるが、時に北京語タイプ：〈授与〉――〈受益〉――〈受動〉、あるいは〈使役〉――〈再帰的事態〉――〈受動〉のパターンを認めうる。

さらに、上記三点を確認後、「與」の兼語動詞の機能が口語の用法であることを確認し、従来語彙の多音節化や文白異同の線上でとらえられる口語判定法について新たにプロトタイプ遷移（prototype shift）の概念が応用できる可能性を指摘した。つまり、動詞としての実義（授与）から使役・受動用法の語法意義へ、言い換えれば授与動詞から兼語動詞への文法化のプロセスは一つの典型（プロトタイプ）として口語をはかるマーカーに適用できる。ある時期には「與」で実現され、ある時期には「給」で実現される、いわば語法化のメカニズムの一つの典型が異なる語彙上に遷移することを表すものである。

◇　　◇

◇第四回　二〇一五年六月十七日

比較信仰文化研究班（一）「祈りの場」の諸相――聖と俗の間で――　その一

主幹　新谷英治

概要

三人の報告者を立て、各人の問題意識や研究の進捗状況に応じて、全体テーマにしたがう研究報

告や議論をおこなった。今回の報告では、日本を含めた東アジア・仏教文化圏の問題から、森　隆男研究員が、「聖地をもつ集落空間の秩序」をテーマに論じた。また、ヨーロッパ・キリスト教文化圏の問題から、恵崎麻美非常勤研究員が「小磯良平における西洋受容　―戦中期西洋美術受容と宗教の関係を中心に―」を、蜷川順子研究員が「十九世紀のパリ外国宣教会　―大浦天主堂のルーツを求めて：上海編―」を報告した。キリスト教信仰文化に関しても日本における受容面が扱われたので、比較研究的な議論が深まり、会場からも活発に質問が寄せられた。

発表要旨

森　隆男　研究員

「聖地をもつ集落空間の秩序」

発表では中世後期に山中から山麓に祭場が移動した事例を取りあげ、創建された神社が集落内に創出した秩序をさぐった。取り上げた事例では、集落の入り口付近に三重のケガレや災いの侵入を防ぐ装置を設け、墓地はこれらの装置がつくる結界の外につくられている。災いの侵入を防ぐ年頭の行事の目的も集落内に発生したケガレの排除に変更されている。これらの景観や習俗は、生活空間の中に常設の祭場が設置されることでケガレに対する意識が高まった結果生じたと考えられる。

また集落の入り口に対し集落の奥の位置に神社が鎮座することで、奥を上位とする秩序が創出されており、家の配置や間取りにも影響を与えている。ここには方位とは関係なく成立している「クチーオク」の秩序の存在が認められる。

恵崎麻美　非常勤研究員

「小磯良平における西洋受容
―戦中期西洋美術受容と宗教の関係を中心に―」

画家小磯良平（一九〇三～一九八八）は神戸出身で、旧三田九鬼藩のキリスト教文化のうちに育てられた。また、キリスト教を主題とした、ステンドグラス《幼子イエスとヨハネ》（一九五九年）や『聖書』（日本聖書協会、一九七一年）の挿絵を手掛けたことも確認されている。

本発表では、発表者が書籍、雑誌、新聞等の調査の結果得た資料をもとに、小磯とキリスト教との関わりを時系列順にとりあげ整理をした。その上で《幼子イエスとヨハネ》について、画面の具体的分析を行い、その表現の解釈を行ったのである。また、戦時下に描かれた《斉唱》（一九四一年）は、直接主題としていないものの、キリスト教との関連が指摘される作品であるが、ここでは発表当時の批評や、他の作品との関連について、西洋美術受容の観点から検証し、その位置づけの読み直しを試みた。

蜷川順子　研究員

「十九世紀のパリ外国宣教会
―大浦天主堂のルーツを求めて：上海編―」

大浦天主堂（長崎市）が、信徒数の増加に伴い明治十二（一八七九）年に拡張されて現在の外観になったとき、パリ外国宣教会のプチ・ジャン神父は、旧聖堂を破壊して新築するのではなく、これをすっぽりと包み込む形で信徒発見につながった記念すべき聖堂を残した。彼とポアリエ神父による設計指導の下、天草出身の丸山佐吉と浦上村信徒の溝口一造が大工の棟梁となって建設がすすめられたが、そのルーツに関して、藤森照信は、長崎と密な交流があった上海にある、一八六四年にルイ神父によって献堂された四川南路若瑟堂（聖ヨセフ教会、上海四川南路三六号）がその一つではないかと指摘した。上海での調査を踏まえて、この聖堂建設に関係したイエズス会と、日本での建設に関わったパリ外国宣教会との歴史的関係を考察した。

◇　◇

◇第五回　二〇一五年六月二十六日

近世近代日中文化交渉（日中移動伝播）研究班（二）　アジアの海域をめぐる文化交渉

主幹　井上克人

概要

この例会では、松浦章研究員の一九三〇年代日本郵船会社の上海航路案内に関する貴重で新鮮な発表のあと、李慶新氏（廣東省社会科学院孫中山與歴史研究所長）を招聘して講演を依頼した。李氏の報告「広東から嘉定へ―中国・ベトナムの海上「書籍の路」」は、近年東アジアにおける文化交渉研究で注目を集め始めたベトナムでの漢籍流通に関する重要な新知見を提出するもので、大変貴重で刺激に富む内容であった。

「一九三〇年代日本郵船会社の上海航路案内」
松浦章（研究員）

「広東から嘉定へ―中国・ベトナムの海上「書籍の路」」
李慶新（廣東省社会科学院孫中山與歴史研究

所長）

発表要旨

松浦　章　研究員

「一九三〇年代日本郵船会社の上海航路案内」

一八八五年の日本郵船会社が成立以来、一八七五年に開設された三菱郵便汽船会社の横濱上海航路を継承し、日中の幹線航路として運航していたのであるが、その際に顧客に配布された一九三〇年、一九三三年、一九三六年に発行された三種類の「上海航路案内」について考証を加えたものである。これらの航路案内は冊子体であり、図書館等での所蔵は皆無であり、忘却された資料であるが、この冊子から、一九三〇年代の日中航路の幹線航路の状況について報告した。

◇　◇

◇第六回　二〇一五年九月二十五日

比較信仰文化研究班（二）
「祈りの場」の諸相
―聖と俗の間で―　その二

主幹　蜷川順子

概要

三人の報告者を立てて、各人の問題意識や研究の進捗状況に応じて、全体テーマにしたがう研究報告や議論をおこなった。今回の報告では、日本を含めた東アジア・仏教文化圏の問題から、松井幸一研究員が、「那覇市湧水調査報告書からみる湧水拝所の分布と利用」を、南アジア・ヒンドゥー文化圏の問題から、野間晴雄研究員が、「ヒンドゥー教における聖地の場―バラナシを中心に―」を、西アジア・イスラーム文化圏の問題から、吉田雄介非常勤研究員が、「ズィールー（綿製絨毯）の用途の変容―祈りの場での敷物から用途の多様化―」を報告した。地域的にも信仰的にも多彩な問題が、多角的に扱われたので、全体としての研究の広がりが確認された。会場からも活発に質問が寄せられた。

発表要旨

松井幸一　研究員

「那覇市湧水調査報告書からみる
湧水拝所の分布と利用」

本報告では那覇市湧水調査報告書および現地調査から作成中の聖地データベースの現状について報告をおこなった。那覇市ではかつて生活用水として利用されていた湧水（井戸や樋川など）が今も存在している。それらは観光地化されたり、埋められたりしているが、祭祀空間としては今なお機能している事が多い。本報告ではそれらがいかに保存・整備されているのかを現地調査の様子とともに報告し、そのデータベース化作業の一端を示しつつ今後の課題について述べた。

野間晴雄　研究員

「ヒンドゥー教における聖地の場
―バラナシを中心に―」

バラナシはガンジス川中流左岸、UP（ウッタル・プラデシュ州）にあるインド最大のヒンドゥー教聖地のひとつである。標高八一mで、市の人口は一二〇万一八一五人（二〇一一年、市センサス、国内三〇位）を数える。聖地のプランとしては、カールムカ（Karmuka）といわれる弓形の都市類型であり、ベナレス・ヒンドゥー大学がそのタイプを再現している。自然堤防に沿って市場、ガートが六・四km連続している。

八十四のガート（沐浴場）は、①沐浴の場　朝日に向かって身を清める、②プジャ、祝祭の場の場、③火葬場（マニカルニカガート、ハリシュチャンドラガート）で死者を荼毘にふす、④広場としての機能、⑤生活の場として洗濯や洗い物がここでなされ、ヨガ、レスリングなどもおこなわれた。

このガートのうちで重要な五つ（アッシガート、ダシャシュワメガート、アディーケシュワガート、パンチャガンガーガート、マニカルニカガート）をまわることが、巡礼者の基本ルートとなっている。

域内に約二三〇〇〇もの大小の寺院（多くはヒンドゥー寺院だが、モスク、ほかにジャイナ教の寺院も多い）があり、シバ信仰（Siva＝梵、湿婆、仏教での大自在天）の中心として崇敬をあつめている。Kashi Vishwanath寺院がその中心となっている。この各宗教の混淆した状況での信仰の場のあり方はたいへん興味深い。

吉田雄介　非常勤研究員

「ズィールー（綿製絨毯）の用途の変容
―祈りの場での敷物から用途の多様化―」

祈りの場で使われてきた敷物は、社会・経済の変化とともにどう変化したのか。ここではズィールーという信仰の場で使用されることの多い綿製の敷物を事例に検討した。現地のマスジェドでは、①ズィールーの使用は減少し、数十年前から②機械織りのカーペット使用が増えた。さらに最近は、複雑な柄や文字を機械で織ることが可能になり、③機械織りカーペットでも柄がメヘラービー（ミ

フラービー）という柄に変化している。なお、メヘラーブ（ミフラーブ）とは、礼拝の方向であるマッカの方角を示すマスジェドの窪みのことであり、この形状を模した柄が「メヘラービー」という柄である。また、こうした機械織りのカーペットでも施設名や寄進した旨を織り込む場合が多くなっている。なお、敷物用途が減ったズィールーは、車のシートカバーやペン立てといった新しい用途や、敷物であっても小型の敷物に転換しつつある。

◇　◇

◇第七回　二〇一五年十二月十一日

比較信仰文化研究班（三）
「祈りの場」の諸相
―聖と俗の間で―　その三

主幹　蜷川順子

概要

三人の報告者を立てて、各人の問題意識や研究の進捗状況に応じて、全体テーマにしたがう研究報告や議論をおこなった。今回の報告では、日本を含めた東アジア・仏教文化圏の問題から、茶谷まりえ非常勤研究員が、「クジラとイルカをめぐる祈りのかたち―日本の事例から―」を、齋藤鮎子準研究員が、「富士宮市における富士山と祈り―世界文化遺産「富士山」の構成資産を手掛かりに―」を報告し、西アジア・イスラーム文化圏の問題から、新谷英治研究員が、「日本のムスリムの祈りの場」を報告した。日本の信仰文化の中でも、捕鯨や富士山といった特殊な切り口から信仰文化が扱われ、イスラーム信仰文化に関しても日本における受容面が中心に報告されたので、比較研究的な議論が深まり、会場からも活発に質問が寄せられた。

発表要旨

齋藤鮎子　準研究員

「富士宮市における富士山と祈り
―世界文化遺産「富士山」の構成資産を手掛かりに―」

本研究は、世界文化遺産である富士山の構成資産のうち、富士宮市に点在する六ヶ所を対象にし、それらと「祈り」との関連を調査することにより、富士山と信仰について考察したものである。

それぞれの構成資産には、御神体、祭事場、水垢離場、護摩、富士登山のための修練・修行場としての役割があると確認できた。

研究対象の中心は、全国に約一三〇〇社ある浅間神社の総本社である富士山本宮浅間大社である。浅間大社は山宮に鎮座したのち現在の地へ遷座したが、その名残である里宮と山宮を往復し神が渡御する祭礼「山宮神幸」が明治六年まで行われていた。その行路「神幸道」には「丁目石」が五〇基ほどあったとされているが、現在では数基しかその場所が断定されておらず、「神幸道」のルートは未だに明らかとなっていない。今後の研究課題として、このルートを解明することにより、「神が来た道」を断定することができると期待している。

茶谷まりえ　非常勤研究員

「クジラとイルカをめぐる祈りのかたち
―日本の事例から―」

これまでの佐賀県・山口県をはじめとした日本各地での鯨食および「捕鯨遺産」に関するフィールドワークで得たデータに加え、静岡県・安良里でのイルカ漁に関する調査成果を通して、捕鯨とそこから生まれた信仰の多様性について考察。ひとまとめに語られがちなクジラ漁とイルカ漁の漁法や特徴の違いに着目し、その中で育まれた文化や信仰の違いを洗い出した。そこからそれぞれの「祈りのかたち」を分類・分析し、その背景や形成過程、変遷を追いながらクジラ漁・イルカ漁の現状と課題に迫った。そこから、クジラ・イルカにまつわる信仰がいかに流動的なものかということを明らかにし、「文化遺産」としてのこれからの展望や可能性について考察していった。

新谷英治　研究員

「日本のムスリムの祈りの場　その二
―各地の事例から―」

前年度例会で日本のイスラーム受容史を概略的に述べ、あわせていくつかのマスジドの紹介を行った。それ以後さらにいくつかのマスジドを訪ねる機会を得たのでそれらの現状を紹介し、日本のムスリム（西アジアをはじめとするイスラーム圏出身ムスリム及び日本人ムスリム）の祈りの場の実情と背景にある問題を考えた。

日本のマスジドは、絶対数は少ないながらも、この二〇年間ほどで急激に増えてきた。そこには日本の国内的な事情とともに国際的な社会・経済の変動が反映されていることが看取される。個々に見ると設置に至る事情や施設の形態はまことに多

様であり、それぞれに苦心の物語がある。また設置後の運営・活用に当たってそれぞれが抱える問題も大きいのが実態である。マスジドの数は今後大きくは増えないだろう（店田廣文）、むしろ不要なマスジドは整理すべき（浜中彰）といった指摘もあるが、日本在住のムスリム社会の形成、および日本という「非ムスリム社会」との関係の構築においてマスジドが果たすべき役割は依然大きい。

マスジドはまずは人の集まる場であるという浜中彰の言葉の通り、その機能を礼拝のみに限定して狭く捉えるのではなく、交流や学習、儀礼など多様な側面に注目しつつその役割を考えていく必要がある。そのような視点で日本のマスジドに注目することにより、我々はその利用者であるムスリム（あるいは、利用できる状態にすらなっていないムスリム）の出身地の社会や経済、文化の状況を知ることができ、さらには彼らを受け容れる（あるいは、受け容れない）日本社会の問題点に気づくことができる。我々が日本のマスジドから学ぶことは多い。

◇　◇

◇第八回　二〇一六年一月二十一日

近世近代日中文化交渉（日中移動伝播）研究班（三）

主幹　井上克人

概要

この例会では、中谷伸生研究員の岡倉天心に関する貴重で啓発的な報告の後、日並彩乃非常勤研究員が冷泉為恭筆《山越阿弥陀図》の図像学について、そして同じく髙橋沙希非常勤研究員が青木繁筆《わだつみのいろこの宮》の構想に関して報告し、いずれも説得性のある意欲的な内容で、とくに今回の例会では熱心な参加者から多くの貴重な質問やコメントが提示された。

「岡倉天心の美術史における近代と反近代――近世絵画の評価をめぐって――」中谷伸生（研究員）

「冷泉為恭筆《山越阿弥陀図》の図像学――理想郷のダブルイメージ」日並彩乃（非常勤研究員）

「青木繁筆《わだつみのいろこの宮》の構想に関して」髙橋沙希（非常勤研究員）

発表要旨

中谷伸生　研究員

「岡倉天心の日本美術史における近代と反近代――近世絵画の評価をめぐって――」

岡倉天心が、明治二十三年（一八九〇）から三年間にわたって東京美術学校で講義した「日本美術史講義」および明治三十六年（一九〇三）にロンドンで刊行された著書『東洋の理想』における日本美術史観を手掛かりにして、天心における江戸時代絵画の評価を追求した。狩野派に始まり、円山派、四条派、琳派、文人画家などの主要画家の評価をめぐって、天心がつくった日本美術史の評価の妥当性と問題点について詳細に言及し、今なお大きな影響を残す天心の日本美術史における評価基準を明らかにした。そこには天心の芸術観に指摘できる「近代」と「反近代」の交錯がみられ、天心以後に展開した日本美術史研究の成果と弱点がうかがえるという発表内容であった。

日並彩乃　非常勤研究員

「冷泉為恭筆《山越阿弥陀図》の図像学――理想郷のダブルイメージ」

冷泉為恭（一八二三～一八六四）は、江戸後期に活動した復古大和絵の絵師のひとりである。彼の祖父、父、伯父は狩野派の絵師であったが、為恭はその出自を好まなかった。自身の王朝への憧れを動機として、平安鎌倉時代の多くの古画の模写を行い、ほぼ独学でやまと絵を学習した。彼の画業は、京都御所や大樹寺の大規模な障壁画から小さな掛幅に至るまでの数々のやまと絵作品と、願海のための多くの仏画という二つの領域を跨った絵画制作が生涯並行している。

本発表は、彼の最晩年の仏画作品である《山越阿弥陀図》を、伝統的な仏画の系譜、また為恭の生涯の二つの観点から検討した。そして、本図の自然景の描写が、為恭の多くのやまと絵作品と通じることを指摘し、やまと絵や仏画といった絵画ジャンルを越えた彼の王朝的な理想郷イメージを明らかにした。

髙橋沙希　非常勤研究員

「青木繁筆《わだつみのいろこの宮》の構想に関して」

明治の洋画家、青木繁（一八八二～一九一一）は二十八歳という若さで亡くなっていることや、晩年は放浪生活に入ったこともあり、作品はそれほど多く残っていない。その中で《わだつみのいろこの宮》は、明確な下絵までもが残っている貴重な作例である。本発表では《わだつみのいろこの宮》の下絵を検討し、この作品がバーン・ジョーンズ（一八三三～一八九八）などのラファエル前派やギュスターヴ・モロー（一八二六～一八九

八）だけではなく、明治三十九（一九〇六）年に青木が描いた《旧約聖書物語挿絵》とも深い関わりがあるということを主張した。また、《わだつみのいろこの宮》と同時期に描かれた青木の他の作品においても、構図やモチーフなどに《旧約聖書物語挿絵》との共通点を確認することができた。そのことから、青木が幅広い興味を持ち、同じ構図やモチーフを別の作品にも頻繁に転用していたという制作過程の一端も明らかになった。

◇　◇

◇第九回　二〇一六年一月二十二日

東アジア宗教儀礼研究班

主幹　原田正俊

概要

今年度の例会においては、五人の報告者の研究発表を行った。日本の宗教儀礼関係では、密教の御産祈祷に焦点を当てて報告が行われた。御産祈祷のなかでも、天皇の子の出産に際しては、皇子誕生への祈りと共に権力者間の抗争もあり、とりわけ厳重な祈祷体制が採られた。日本では、公家の日記などでその詳細な状況を復原することができ、こうした例が中国でもみられるのかなど質疑が交わされた。

十七世紀以降の日本における国家祭祀についての報告もありベトナムなども含めた中国の影響が大きい地域全体を見渡しての議論が必要なことと、地域間の差異が生じる要因の探究、歴史的な背景を踏まえての研究が必要なことを共通認識として持った。

また、大陸からの仏教・道教の伽藍名称の影響は、これまで十分議論されてこなかったものであり、儀礼の場の解明も今後の課題である。道教関係の信仰、典籍の分析についてはいくつかの事例報告を受けてきたが、これらを思想史的にさらには思想と儀礼をどう結びつけて解釈していくかが今後の課題として議論された

発表要旨

二ノ宮聡　非常勤研究員

「碧霞元君信仰と北京の九娘娘」

中国の民間信仰に見られる神仙は様々な職掌を有する。その職能は、現世利益や死後の安寧、子孫繁栄など人々の生活に即したものから、職人ギルドの守護神など多岐に渡る。例えば、現在、最も広く信仰されている神として関帝や媽祖が挙げられる。

また、古来より人々の生活の中で避けることのできない問題として病気や怪我がある。病気や怪我は時として人を死に至らしめるため、人々は病気を恐れ、死を避けることを願った。そのため民間信仰でも医術、医療を掌る多くの神仙が古来より信仰されてきた。医術の神は、その職掌から薬王と称される場合もある。これら薬王は、健康、長寿、病気平癒を願う人々に篤く信仰されている。

本発表では、これら民間信仰にみられる神医のうち、明清時代にかけて北京など華北一帯で盛んに信仰された娘娘神を考察の対象とする。娘々神が有する医療的職能の検討を通じて、北京一帯の信仰、娘々神の信仰の特徴を考察した。

前原あやの　非常勤研究員

「『観象玩占』の東アジア的展開」

本発表では『観象玩占』の東アジアにおける展開について考察した。

韓国においては、英祖七年（一七三一）十月四日に「観象監、観象玩占ヲ印進ス」という記録がある。また、朝鮮刊本が、韓国・国立中央図書館、ソウル大学中央図書館（奎章閣）のほか、アメリカ・ハーバード燕京研究所（ハーバード大学内）にも現存する。

日本には、宮内庁書陵部、前田育徳会尊経閣文庫、蓬左文庫、東京大学東洋文化研究所、京都大学人文科学研究所、慶應義塾聊斎文庫に『観象玩占』が所蔵される。このうち宮内庁書陵部本は、『書物方日記』や『商舶載来書目』の記録から、中国から舶載された『観象玩占』が田沼意次の手に渡り、宝暦十二年（一七六二）に紅葉山文庫に寄贈され、その後、明治の世になって宮内省図書寮（現宮内庁書陵部）へ移ったと推察できる。

前田育徳会尊経閣文庫、蓬左文庫の『観象玩占』も江戸期に日本に伝わっており、『観象玩占』伝来の状況を検討する上で興味深い。

二階堂善弘　研究員

「大雄宝殿という名称について」

中国では寺院の本殿は「大雄宝殿」と呼ばれることが多い。しかし日本では黄檗宗の寺院を除いてはこの名称は少ない。この大雄宝殿という呼称は、ベトナムやタイなど東南アジアの華人系の寺院でもよく見かけるものである。また韓国では「大雄殿」という名称が一般的である。またこれとは別に、「覚皇殿」という名称もある。大雄も覚皇も釈迦如来の別号のひとつである。一方で釈迦如来を

祀らない殿を大雄宝殿と称することもある。これはあとから名称が変わったものと考えられる。本発表では、東アジアにおける大雄宝殿という呼称の一般化の経緯について、杭州の霊隠寺や浄慈寺などの五山を中心に実際の事例に基づき検討した。

◇　◇

◇第十回　二〇一六年一月二十三日

言語接触研究班（二）

主幹　内田慶市

概要

基調講演として台湾中央研究院から李奭學氏をお招きして「古新聖経」の版本についてお話をいただいたあとに、研究員（委嘱研究員も含み四人）に加えて外部からも八人をお呼びして言語接触研究をテーマにした研究例会を開催した。その成果は『東アジア言語接触の研究』（沈国威・内田慶市編著、関西大学出版部）として結実した。参加者は百名近く盛会であった。

発表要旨

内田慶市　研究員

「言語接触研究の過去・現在・未来

――文化交渉学の視点から」

これまでの言語接触研究班の歩みについて特に文化交渉学の観点から報告した。

これまで近代における「西学東漸」をめぐる東西の言語と文化の接触に着目し、特に宣教師による言語研究を中心に研究が進められてきている。だ、最近の新しい資料の発掘に伴い、言語学だけの分野からのアプローチでは不十分であり、まさに「文化交渉学」の拠って立つ方法論である「周縁からのアプローチ」を具現化するべく、歴史、宗教、文学等の他領域との「協同」が求められることを強調した。

陳　力衛　委嘱研究員

「現代中国語にはどれくらいの

日本借用語があるのか」

現代中国語の中にどのくらいの日本借用語があるのかについて長年議論されてきたが、今まで正確な調査もなく、個人的な判断に基づく語彙表を挙げるだけに止まっていた。そうした理由の一つはそもそも日本借用語の内訳に不明瞭な部分があり、個々の語の素性判断を下すには相当な時間と労力がかかることが挙げられる。そして、具体的な数字を出す場合、語彙調査の一定の範囲を定めていないこともそうした問題を曖昧にし、いろいろと想像の空間を残したと思われる。そこで本稿は『普通話三千常用詞表』（増補版、一九八七年、三九九六語を収録）を中心に意味分野別に、その借用語の分布を調べてみた。さらに『現代漢語常用詞表』（二〇〇八年、五六〇〇八語を収録）によって上位頻度順の四〇〇〇語を対象に、両者を比較しながら、現代中国語における日本借用語の具体的な量的分布と展望を試みた。

沈　国威　研究員

「訳語が如何に確立されたのか？

中国語における「economy＝経済」を例に」

「経済」が訳語として成立させるのは、どんな言語的障碍をクリアしなければならないことを厳復を例に考察するものである。

◇　◇

◇第十一回　二〇一六年一月三十日

アジア文化研究センター共催

言語接触研究班（三）

主幹　内田慶市

概要

この度、関西大学アジア文化研究センターに寄贈された鱒澤彰夫氏の文庫について寄贈者である元日本大学教授の鱒澤彰夫先生をお招きし「鱒澤文庫の蒐集遍歴」についてご講演いただいた。

内田慶市研究員は「鱒澤文庫における稀覯本」について発表をし、アジア文化研究センターの氷野善寛ＰＤによって鱒澤文庫の整理状況について報告がされた。

発表要旨

内田慶市　研究員

「鱒澤文庫に見られる稀覯本」

この度、関西大学アジア文化研究センターに寄贈された鱒澤彰夫氏の文庫は近代における中国語教育に関する恐らく世界で最も網羅的、体系的に蒐集されたものであるが、例外の稀覯本も相当数あり、それらについてこの報告では詳しく述べた。

◇　◇

◇第十二回　二〇一六年一月三十日

非典籍出土資料研究班（三）

主幹　篠原啓方

概要

岩尾一史非常勤研究員による研究発表及び玄幸子研究員の調査報告が行われた。テーマは次の通り。

岩尾一史非常勤研究員：「碑文史料からみた古代チベット帝国：古チベット語碑文史料概観」

玄幸子研究員：「朝鮮の仏教資料」

発表要旨

岩尾一史　非常勤研究員

「碑文史料からみた古代チベット帝国：古チベット語碑文史料概観」

チベット高原とその周辺には、古代チベット帝国（吐蕃）の一次史料の一つである石刻史料が点在している。これらはチベット史の重要史料であるにもかかわらず数年前まで史料集成が作成されていなかった。発表者は数年前に石刻データを集成することができたが、その結果、それら石刻史料が所在地によってある程度の傾向があること、そしてその傾向がチベット帝国の性質とも一定程度関連していることに気付いた。本発表では、まずチベットの石刻史料を概観し、その後各地域の石刻史料の傾向を説明し、そこから見えてくるチベット帝国の国家像を提示した。さらにラサに現存する唐蕃会盟碑の特異性について紹介し、それが唐、ウイグル、南詔との会盟を締結させたチベット帝国のモニュメントの一つであることを述べた。

玄　幸子　研究員

「朝鮮における仏教資料」

在外研究で拠点としている韓国における佛教受容の歴史を概観し、高麗寫経を中心にその所在および研究状況について簡単に報告をおこなった。高麗寫経の多くが現在日本に伝わり保存されているが、一部は韓国の各所（個人所蔵を含む）に保管されている。国立中央博物館、湖林博物館所蔵の資料を中心として写真で紹介し、その特徴についても一部言及した。また、『水陸無遮平等齋儀撮要』『佛頂心陀羅尼經』などの資料の伝播状況から民間信仰の中での佛教の在り方とその広がりについて今後の研究方向を示した。

◇　◇

◇第十三回　二〇一六年二月二十三日

西洋文学における異文化交流研究班

主幹　和田葉子

概要

川神傳弘客員研究員はフロベールの作品における外観描写、近藤昌夫研究員はゴーゴリの『鼻』、鼓宗研究員はビセンテ・ウイドブロの『来たるべきもの』、平田渡研究員はラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナの『サーカス』、和田葉子研究員はアイルランドで書かれた十四世紀の写本Harley 913におけるラテン語のなぞなぞについて研究発表した。いずれもそれぞれの時代と地域性に色濃く影響を受けた作品であり、歴史的考察に基づく文学研究の成果の発表であった。

発表要旨

川神傳弘　客員研究員

「フロベールと写実主義について」

一八五七年発表のフロベールの小説『ボバリー夫人』はフランス文学史上写実主義の礎を築いた作品とされている。文章と構成の基本的な特徴は不動不感性、客観主義、没個性である。しかし、その客観主義的形式に到達するに至る道程は長く険しいものであった。彼は生来のロマンチストであり、多分に抒情的で感性に溺れる性格であったからである。父親の仕事ゆえに病院内で生まれ、幼いころから物語を読み聞かされて育った生育環境はこの若者に、否応なく「死」や「虚無」をテーマに選ばせ、習作期の作品はことごとく「虚無」「腐敗」「暗黒」などの言葉の羅列と死体描写に終始した。その観念的かつ抽象的論議は何ら感銘をよぶものとはならなかった。やがて彼は作者の主観・内面・主張を強く押し出すことだけでは感動を誘う表現にならないことに気づく。「どんなに精魂込めて首飾りの真珠を磨いたことか。忘れていたのは一つだけ。玉に通す糸だったのです」「真珠が集まれば首飾りが出来る。でもね、首飾りをつくるのは糸ですよ」かくして彼は言葉以上に形式、構想に適う形式の追求に邁進するのである。言葉による主観の饒舌から、外観描写への重点移動の始まりである。かくして表現者の感情は「形式」に委ねられることになり、「何について書かれたのでもない本」が生まれた。それまでのような「制作」的発想と異なる小説芸術の「創造」が始ったのである。風俗紊乱で訴えられた「ボバリー裁判」において無罪を勝ち取ることが可能であったのも、

実にその「外面描写」によるところが大きい。

近藤昌夫　研究員

「ゴーゴリと生神女福音祭
――『鼻』の日付をめぐって」

床屋のイワンが切り分けたパンから顧客の八等官コワリョフの鼻が出現する。イワンにのしかかる冤罪の恐怖が威圧的人工都市ペテルブルクを呼び出す。一方、鼻を失い恐怖に陥るコワリョフの前に五等官の鼻（願望の分身）が現れ、持主を嘲笑する。「朝、それもかなり早くに」と目覚めが繰り返し強調され、眠り/son/が/nos/鼻に反転し、主従が逆転するのは「大地開きの日」と習合した生神女福音祭（三月二十五日）の作用だろう。前者はゴーゴリが嫌悪し怖れた、虫、爬虫類、悪魔が目覚める一年の節目、後者は放鳥した鳥が願いを叶える受胎告知の祝日である。俗物コワリョフに新しく鼻が下がるのは、鼻＝嘴の執り成しと考えられる。

作者ゴーゴリ自身の恐怖も反映した『鼻』は、プーシキンのペテルブルク神話を背景にしながら人工都市ペテルブルクで自然の反乱に見舞われる愛すべき俗物たちを描いた作品である。

鼓　宗　研究員

「ビセンテ・ウイドブロ
『来るべきもの』における終末観」

本発表では、ビセンテ・ウイドブロの『来るべきもの』（一九三四）を取り上げた。この〈前衛的〉小説には、南米の資産家アルフレド・ロクが〈次の大戦〉に備えてアンゴラに築いたユートピアの繁栄と瓦解が描かれている。それは、チリの詩人の創作の基底にある創生と黙示という主題に散文でもって輪郭を与えたものである。創生の主題は、クレアシオニスムの詩学の中心にある、「現実にそこにあるもの」とは異なる新しい世界の〈小さな神〉としての創造と密接に結びついたものだが、詩人はエマソンのエッセイ『自然』にその霊感を得た。他方、この作品には、第一次世界大戦や大恐慌などの時代背景がもたらした終末の予感が潜む。そして、創造と終焉の物語は詩的表現をもって描写される。このことが、主人公＝著者の分身が最後に示す共産主義への傾倒のごとき政治的イデオロギーを超えて作品に普遍的な価値を与えているというのが結論である。

平田　渡　研究員

「ベル・エポックのパリと
マドリードのサーカス文化について」

このたび上梓した、ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ著『えも言われぬ美しさの、きらびやかにして、永遠なるサーカス』に描かれている、ベル・エポックのパリとマドリードのサーカスがそなえている特徴をいくつか指摘した。

当時のサーカスは、パリやマドリードのような都会では、現在のように大衆化されておらず、観客は王侯貴族や上流階級が中心だったこと。したがって、昼の部（マティネー）ではなく、夜の部の興行に重点がおかれていた。開演時間は、マドリードの場合、二一時三〇分。そんなわけで、サーカス見物にゆくことは、キャバレー〈ムーラン・ルージュ〉やミュージック・ホール〈フォリー・ベルジェール〉に出かけるのと同じような感覚であった。つまり、上流社会の人びとの夜の社交場だったのだ。

空中ブランコや綱渡り、動物を使った曲芸などは、当時から人気があったけれど、いちばん注目を集めていたのは、道化師（クラウン clown）の演技と、円形舞台を所狭しと疾走する馬を乗り廻す芸であった。残念ながら日本では、道化師は存在しない。ただピエロがいるのみである。それがヨーロッパのサーカスとの最大の違いにほかならない。かつて、サーカスは日本では曲馬団と言われたことから分かるように、馬を使った曲芸はあるのだが、ヨーロッパで高等馬術（オート・エコール）と呼ばれるものはない。それは、シルク・ハットをかぶって正装した紳士が、馬にフォックス・トロットやタンゴを踊らせる体のものである。現在、ウィーンにある観光名所のスペイン乗馬学校で見られるような演技を想像していただければいいだろう。

和田葉子　研究員

「London, British Library, MS Harley 913に収められた謎々の謎――中世ラテン語によるややこしい家族関係」

London, British Library, MS Harley 913 は一三三〇年頃、アイルランドで書かれた写本である。そこには、ラテン語、英語、フランス語による韻文と散文の様々なジャンルの作品が収録されている。内容から、おそらくフランシスコ会の托鉢修道士が筆写したと推測される。中世のアイルランドにおける政治、宗教、社会等を痛烈に諷刺した詩や、ウィットに富んだ優れた作品を多く収めた非常に興味深い写本であるにもかかわらず、アイルランドというイングランドの「辺境」で筆写され、しかも三か国語が使用されているため、英文学史上、重要視されてこなかった。特に、この写本のラテン語による作品についての研究はほとん

どない。本発表では、ラテン語で書かれた謎々の一つを紹介するとともに、解答例を示した。謎解きが行われのは、この発表が初めてである。近親相姦が鍵となる家族関係が非常に複雑で難解な謎々は、ラテン語や古英語で書かれた謎々集からの影響を受けている。例えば、十世紀の写本に収められた近親相姦を扱った謎々が古英語にもあるが、聖書の創世記第十九章のロトの話を元にしている。おそらく作者は、このような伝統に則って、さらに凝った面白い謎々を作り上げたのではないかと思われる。謎々に登場する三人の人物の名前にも隠された意味があり、ラテン語で創作ができる、非常に教養のある、しかも、遊び心のある聖職者であったことがうかがえる。

◇　◇

◇第十四回　二〇一六年二月二十六日

日本文学研究班

主幹　長谷部　剛

概要

研究員の発表内容は以下の通り。

- 溝井裕一「想起する帝国――ナチス・ドイツにおける「過去のイメージ」の乱用に関する考察」
- 増田周子「火野葦平「インパール作戦従軍手帳」から見た戦争の記録」
- 山本登朗「『和習』再考――日本古代漢詩の一面――」

三名の研究員が、各自設定した研究テーマに即して研究発表を行った。

発表要旨

溝井裕一　研究員

「想起する帝国――ナチス・ドイツにおける「過去のイメージ」の乱用に関する考察」

ナチスの文化政策における「集合的記憶」のありかたについて、今回は建築をメインに論じた。たとえばヒトラーとシュペーアは、ツェッペリン広場や帝国首都ゲルマニアの建設にあたって、古代ギリシア・ローマを想起させる建物をつくろうとした。これはドイツ国民に、「ゲルマン人」の枠を越えた「アーリア人」の後継者であることを自覚させ、さらにギリシア人の「合理性」やローマ帝国の「覇権主義」を見習わせることによって、将来の兵器開発や侵略戦争に備えようとしたためである。つまり、ナチスは「過去のイメージ」をつうじて、未来のふるまいを規定しようとしたのである。またヒムラーが、ヴェーヴェルスブルク城を、古代神話を想起させる場として活用した問題についても論じている。

増田周子　研究員

「火野葦平「インパール作戦従軍手帳」から見た戦争の記録」

昭和十九年援蒋ルートの遮断を目指し、インド北東部の都市インパール攻略を目的とした日本の軍事作戦「インパール作戦」の研究を、火野の残した従軍手帖の記録からおこなった。この作戦は、牟田口廉也中将らに指揮されたが、作戦自体に無理があり、多くの犠牲者を出した上に敗北し、死の作戦とも呼ばれている。火野の従軍手帖は、インパールを撤退した後、日本軍が戦った雲南フーコン作戦を含め、全部で八冊残っている。その大半は、故鶴島正男氏により翻刻されているが、本格的な研究は未だされていない。本発表では、そのうち雲南フーコン作戦を省いた、昭和十九年四月二十五日～七月三日の部分、すなわち、火野がインパール作戦に従軍し、記録した手帖のみをとりあげ、詳細に報告した。火野が見た戦場の様相は、インパール作戦の一端ではあるが、戦争の真実の記録を読み解くことができた。

山本登朗　研究員

「『和習』再考――日本古代漢詩の一面――」

日本人が作った漢詩の中には、本来の漢詩の規則からはずれたり、正しい形を整えていなかったりするものが、しばしば見られる。それらは、これまで「和習」と呼ばれ、中国語を母語としない日本人が犯しやすい規則違反や慣例違反として、恥ずべき誤りのように見られることが多かった。

しかし、そのような「和習」の中には、日本の和歌の世界と通い合う表現や内容がしばしば見られる。今回は、最近話題にもなった、『懐風藻』中の大津皇子の例をまず検討し、さらには、平安時代初頭の嵯峨天皇が編集させた『文華秀麗集』の中の「燕」を題材にした詩群の表現について考えた。それらは、恥ずべき誤りの結果生み出された失敗作とは、必ずしも言えない。意図的かどうかはともかくとして、そこには中国の漢詩とは異なった日本人らしい表現や内容が見られる。それらはむしろ、日本人ならではの漢詩表現として積極的に評価されるべきではないかと考えられるのである。

◇　◇

平成二十五～二十七年度 東西学術研究所研究報告書

言語接触研究班　（主幹）内田慶市

班別研究報告書

周縁アプローチによる東西言語文化接触の研究とアーカイヴスの構築

内田慶市編著『漢訳イソップ集』（ユニウス、二〇一四年二月）、内田慶市・氷野歩等編著『語言自邇集の研究』（好文出版、二〇一五年二月）、内田慶市編著『関西大学長澤文庫蔵琉球官話集』（関西大学出版部、二〇一五年三月）、沈国威・内田慶市編著『東アジア言語接触の研究』（関西大学出版部、二〇一六年二月）、内田慶市・氷野善寛編著『官話指南の書誌的研究　付影印・語彙索引』（好文出版、二〇一六年三月）などがある。三年間にわたり持続的な研究活動が行われて多くの成果が収められたと考えている。

なお、外部資金獲得に関しては、内田慶市、沈国威がそれぞれが平成二十七年度科学研究費基盤研究C（一般）を獲得し、また、内田慶市がバチカン図書館のデジタル化に関して学内の緊急研究支援経費を獲得している。

個別研究報告書

近代における欧米人の中国語研究　内田慶市

近代における欧米人の中国語研究について多くの成果を挙げることができた。特に、新しく発見した漢訳聖書や中国語ドチリナ、あるいは琉球官話資料等々による近代中国語の文体や表記法等々の研究で大きな進展をみることが出来た。その成果として、論文のみならず、著書も三冊上梓することができた。なお、「文化交渉学とは何か」ということに関しても、中国言語学の観点から自分なりの一つの解答を出せてきているように思っている。今後とも、この分野での研究を発展させていくつもりである。

古代における日中言語接触の実体　乾　善彦

三年間の活動で、古代の日中言語接触の実態について以下の三点において成果を得た。

①漢文訓読が言語接触に及ぼした影響について

「漢文訓読」は、近年、東アジア全体によく似た現象が指摘されている（たとえば金文京『漢文と東アジア―訓読の文化圏』（二〇一〇、岩波新書）など）が、日本語の場合、それが日本語の歴史的変化に及ぼした影響の大きさが他言語とは比較にならないくらい、きわめて重要である。つまり、変体漢文という書記用の表記体を現出させたこと、表音用法を利用して独自の文字体系（平仮名片仮名）を生み出したこと、そこから、漢字仮名交じりの表記体とそれに連動して「和漢混淆文」という日本語の書記用文体を獲得したことなど、現在の日本語の基礎を形成するのに重要な役割を果たしている。そのことを明らかにするために、「変体漢文」のあり方を基礎に置くことで、全体を考える道筋をつけた。

②和訓・和音の成立と日本独自の漢字の用法について

「漢文訓読」の前提として、和訓と和音の成立がある。これについては七世紀木簡の出土により、訓点記入の方法が確立するよりもずっと古くから、漢文訓読が行われていたことが証明されている。和訓・和音は漢字の日本的用法につながる。同じく漢字を使いながらも、現代日本語中の漢字は、もはや中国語を書きあらわすための文字ではない。そんな中国の漢字との乖離を江戸時代資料によって考えた。古来からの漢字の遊戯的な用法は、近世に至って大きく花開く。そのような日本的漢字の用法を考える手立てとして、近世の漢字意識について考察を加えた。具体的には、『小野篁歌字尽』をはじめとする往来物や契沖の著作における漢字意識などである。

③さまざまの「和漢の混淆」の結果としての日本語書記用文体「和漢混淆文」の成立

古代における日中の言語接触の大きな特徴は、「漢文訓読」によるという点を常に強調してきたが、最終年度として、「漢文訓読」がひとつの「和漢の混淆」であり、我が国における漢字・漢文の受容は、つねに「和漢の混淆」を引き起こしてきた。その点を明らかにするために、「変体漢文」「宣命書き」「仮名の成立」「漢字仮名交じりの成立」「平安朝和文の成立」「和漢混淆文の成立」を取り上げ、全てにおいて「和漢の混淆」がどのような形で起こったかを明らかにし、これによって日本語の書記用文体である「和漢混淆文」の本質を考えた。「和漢混淆文」という術語（ターム）は定義しにくいとされており、もとは古事記のような文章を、現在では今昔物語集や平家物語のような文書をさすが、それを「和漢の混淆」という観点から整理しなおして、日本語散文文体の成立過程を整理した。（これにつ

いては、研究成果欄に記載していないが、論文「『和漢混淆文』と和漢の混淆」（国語と国文学二〇一六年七月号に詳しく論じた。

以上、三年間の研究により、日本語散文文体の成立に、古代における日中の言語接触の大きくかかわっていることと、その実体とが明らかになったと考える。

非漢語圏における中国語資料研究　奥村佳代子

今期研究班では、域外における中国語資料と中国語受容の実態を明らかにするための基礎的な作業として、域外における中国語資料の整理と語彙の調査を行った。

資料の整理としては、これまで研究の進んでいなかった二資料を特に取り上げた。

関西大学総合図書館長澤文庫蔵の写本『唐韻三字話』は、唐通事による中国語学習と、中国語知識の共有と伝播がどのように行なわれていたのかを明らかにする手がかりを得ることのできる資料である。唐通事が、二字、三字、四字などから成る短い語や語句の組み合わせから中国語学習を開始したことは、先行研究によってすでに指摘されてきたことであるが、本資料はその証拠となり得るものである。特に「三字話」に関しては、「主語となる名詞一字＋述語となる動詞一字＋目的語となる名詞一字」あるいは「述語となる動詞一字＋目的語となる名詞二字」のかたちで、会話に適した短い文を構成することが可能であることから、この資料の存在自体が、初級の段階で三字話を習得することが効果的であると考えられていたことを物語っているといえるだろう。また、薩摩藩で編纂、出版された江戸時代を代表する唐話辞書である『南山俗語考』の三字からなる語句あるいは六字、九字からなる語句には、『唐韻三字話』と同じ三字の語句が単独で、あるいは組み合わされた形で多く含まれていることから、両者には影響関係もしくは両者共通の唐話知識源があったと仮定する根拠となり得る。

筑波大学図書館蔵の写本「譯阿州孝子文」は、中村幸彦氏の「日本人作白話文の解説」において紹介された資料であるが、「この文は何によったか今は未詳」とされてきた。「譯阿州孝子文」が記述された背景を示す資料は現時点では見いだせていないが、本資料の中国語が中国語としての機能を備えた白話で書かれていることから、訳者は唐通事であるとの結論を導くことができる。また、本資料が江戸時代の孝行譚である「矢嶋屋忠兵衛事」という作品を訳したものであることを、両者の内容を対照することによって明らかにした。「譯阿州孝子文」が日本における中国語資料のひとつであり、唐通事による日本語作品の中国語訳資料として位置づけられる資料であることを指摘できるだろう。

また、先行研究に基づいて朝鮮半島の海難史料の尋問調査記録を言語資料として用い、朝鮮の中国語訳官による口頭で発せられた中国語が記録された問答を、基礎語彙のレベルで整理した。

近代日中語彙交流史　沈　国威

今期は、日中間の語彙の交流が、それぞれの国語形成に与えた影響を解明すべく、研究を進めてきた。また西洋の新概念を導入するにあたって、厳復が為された貢献を集中的に探索した。研究成果を『厳復與科学』に纏めた。ここでは初めて厳復とベーコンの思想的継承関係を明らかにした。

漢字文化圏の近代訳語研究にも引き続き大きな比重を割き、研究仲間と協力して進めてきた。研究成果は、『環流する東アジアの近代新語訳語』（二〇一四年、内田慶市氏との共編、三三八頁）、『東アジア言語接触の研究』（二〇一六年、内田慶市氏との共編著、四四〇頁）という二冊の論文集に纏めた。

十七～十九世紀の、域外官話通事の活動と文学　木津祐子

清代琉球・長崎の通事（中国語通訳）が学んだ官話教本を用い、その言語的特徴を分析し、使用者（編纂者）集団の特定、さらにその言語的アイデンティティを明らかにしたもので、従来漠然と「官話課本」と総称されていた写本群の内部差異や、広く東アジアの「訓読」行為に列なる諸特徴を指摘した。明末から清代にわたっての、東アジアにおける官話の流通がもたらした文化史的意味について、仏教との関係、叙事・クレオールなどの側面から多角的に論じた。

日中言語の新語接触による諸問題　陳　力衛

日中語言交流史の角度から見ると、従来、近代中国における西学東漸のルートとして次の三つが挙げられる。

A. 在華外国人宣教師の翻訳
B. 中国人自身の西洋語からの直接翻訳
C. 中国人が日本語からの重訳

A. は外国人宣教師たちによる洋学の伝播である。今期は『万国公法』を取り上げ、まず日本における『万国公法』の豊かな翻訳テキストに注目し、漢訳『万国公法』を直接手本として翻訳する場合とそれ以外の場合に分けて、両者の翻訳過程における改訳にスポットを当て、従来の漢訳『万

国公法』とどう変わってきたかを分析したものである。漢訳テキストから伝わってきた基本概念とともに日本語訳で当てられた新しい表現、たとえば、『万国公法』にない「国際法」「義務」「自然法」「治外法権」などの日本での新造語が逆に後の国際法を支えるようになった。明治後期に来日した中国留学生は、そのような訳語に接し、さらにそれを中国へ逆輸入することにもなった。

B.は中国清末における知識人の翻訳を指し、今期はその代表者となる厳復を取り上げていた。近代において、東アジアに位置しながらも、日本と中国の知識人が救国の方策を西洋に求めている点が同じである。たとえば日本において、A.のような中国語で書かれた漢訳洋書でも日本の西洋知識の受容の媒体となりうるから、同一の外来概念に対して日本既存の蘭学由来の訳語に加えて、中国からの訳語も入ってくることになる。結果的に「民主(中)－共和(日)」「審判(中)－裁判(日)」、あるいは「電気(中)－越曆(日)」「化学(中)－舎密(日)」のように二つの訳語が同時に日本語に存在する一時期があり、後に意味の住み分けや訳語の交代があったりしてようやく今日に定着してくる。

一方、こういう影響関係のある日中間の交流とは別に、時代が下って同一なる西洋語のテキストから、日中両国はそれぞれ独自の翻訳が出され、しかも相互に没交渉で参照関係も見られないという奇妙な現象が翻訳史に現れてくる。結果的に、中国においても、歴史的にA.とB.の翻訳から生まれた概念、用語のずれをいかに克服するかの問題がある。たとえば、同じ英語のunitに対して、A.は「単位」と訳し、B.は時代的に後でありながら、新たに音訳の「么匿」をもってそれにあてる。厳復の翻訳はまさにその既成訳の混乱を避ける意味で、まったく新しい言い方をもって外来概念に対訳するものであったが、そして今度はB.の翻訳においてC.の日本経由の概念や用語とのせめぎあいも生じてくるのであった。

したがって、中国における近代概念の成立について考える際、中国独自の訳語A.とB.において概念の継承と統一が課題の一つとして挙げられる。それからB.の翻訳では同時代もしくは前の時代のC.のような日本由来の概念をどのような態度で取捨選択するかが問題となってくる。

C.はまさしく日本経由の西洋知識がいかにして中国へ伝わるかの問題である。それも二つのルートに分けられる。一つは「西洋語→日本語→中国語」のように、たとえば『共産党宣言』の最初の中国語訳は「独→英→日→中」の転訳を経て成立されたもので、知の伝播という角度から見て、通時的にテキストの影響関係をたどりながら、西洋の思想や概念などが日本を通して中国に伝わった。もう一つは当然ながら「日本語→中国語」のように日本人自身の執筆した文章から直接訳出され、たとえば幸徳秋水の『二十世紀之帝国主義』が早くも一九〇三年に中国語へ翻訳されたものであった。

今期はまず明治の科学啓蒙家の翻訳による造語の苦心を取り上げ、「－力」、「－性」の接辞化を問題にしていた。科学用語の産出も蘭学からの継承と、漢訳洋書からの利用によって成り立っている。たとえば、漢訳洋書ではすでに「人力、馬力、風力、水力、物力」「重物之力」「圧力」「吸力」「漲力」「重学之力」「化学之力」「躍力」「駆力」「阻力」「抵力」「劈力」「縮漲之力」「離中之力」「眦中之力」が使われているが、日本の蘭学ではさらに「引力」「重力」「求心力」「遠心力」「動力」「速力」「弾力」「浮力」を創出した。

また、蘭学で成立した近代漢語を中心に、『英和和英語彙集』を取り上げ、蘭学⇒英学の転換とともに、それをどうやって東アジアにおいて流通したかを見た。まず分かったのは、この『英和和英語彙』の特徴として、和蘭辞書の『蘭語訳撰』（一八一〇）と蘭和辞書の『バスタード辞書』（一八二二）から多くの近代漢語訳語を採用したことである。たとえば、宇宙、世界、帝国、文学、人類、地球、農業、事業、学問、平均、未来、愛情、流産、半男半女、心臓、肝臓、腎臓、脾臓、食道、動脈、胴體、動悸、領地、化粧、故障などが収録されているが、中には中国の第一期の洋学資料から取ったものもあれば、日本での独自の対訳（たとえば和製漢語の「領地、化粧、故障」）もある。さらに、後世への影響としてはその語彙集が単に『英語箋』や日本の英和辞典への寄与だけに止まらず、編者が後に同じバタビアで『福建方言字典』（一八三二）と『朝鮮偉国字彙』（一八三五）を編輯出版したこともあり、さらに一八三五年以降『華英字典』（一八四二～四三）と『英華字典』（一八四七～四八）をも相次いで編集出版したことを念頭に入れれば、この『英和和英語彙集』が宣教師のルートで朝鮮半島や中国大陸へ影響を与えた可能性、つまり日本の蘭学の訳語がこの語彙集を通して中国語や朝鮮語へ入っていく可能性をも検討すべきではないかと考える。

中国語への逆輸入に関して、今期は、梁啓超が横浜で発行していた『清議報』などを資料として調査し、近代の「主義」の成立を中心に、日本と中国にそれぞれの展開と受容をまとめてみた。

さらに、注目したのは中国の国語辞書による新語への対応である。中国の近代辞書『辞源』（一九一五）から今日までの辞書が日本由来の言葉を受

入れる過程においていかなる苦悩があったかを明らかにしたものである。『辞源』では日本由来の語を標記していたが、一九三六年の『辞海』の段階になると、逆にその標記を止めたものが多く、しかも英語による対訳可能な語を一覧にし、意図的に日本由来の色を薄め、あたかも中国人が独自に直接洋語から訳されたように印象づけられるようになる。いわゆる日本由来の語彙に対する反発を考慮した形になっている。

以上はこの三年間にわたって研究した内容の概要である。日本近代語とその中国への流布を全体像として論じるには、さらに個々の資料の細かい検証と、いろいろな事実誤認を逐次に解明する必要があろうかと思う。

阿蘭陀通詞資料にみる言語接触の研究　松田　清

平成二十五年度

研究例会「言語接触研究の最前線」（一月三十一日）において、研究発表「佐久間象山の辞典開版事業とモリソン英華辞典――吉雄権之助編蘭英漢対訳辞書を中心に――」を行い、吉雄権之助編蘭英漢対訳辞書の二写本（象山旧蔵本、杏雨書屋本）に基づく、これまでの成立史研究をまとめ、本草博物関係の見出し語と宗教（儒教・仏教）関係の見出し語および例文の重要性に注目し、今後の展望を示した。さらに、未調査であった高鍋藩旧蔵写本を所蔵先の町立高鍋図書館において調査した（三月十二日）。

平成二十六年度

安永天明期の初期蘭学を支えた和蘭陀通詞のなかで、資料が希少であるため研究の遅れている松村元綱に注目し、松村と本木良永が共訳したと推定される艾儒略（ジュリオ・アレーニ）の地理書『職方外紀』の和訳とオランダ語地理書の関連、『職方外紀』の読まれ方を解明するため、国内各地の所蔵先を訪書し、『職方外紀』諸写本の比較調査を実施した。その過程で和蘭陀通詞による翻訳と推定される一連の『コウランツトルコ』訳稿を発見し、その分析を進め、洋学史学会例会において「山村才助に先行するコウランツトルコの翻訳について」発表した（三月二十九日）。

『職方外紀』諸写本調査の中間総括、佐久間象山のハルマ辞典増補改版事業に関する資料研究の成果を研究班で報告することは出来なかった。

平成二十七年度

平成二十四年度までに資料調査と仮目録作成を終えた京都の本草漢学塾、山本読書室の膨大な資料（約七〇〇〇件）について、その保存と公開をはかるための一助として、京都新聞紙上でコラム記事「京の学塾　山本読書室の世界」（朝刊、全三五六回）を連載した。また、山本読書室門人居処による本草博物学の人的ネットワークの分析、新発見のシーボルト編「日本植物目録」写本およびシーボルト自筆書簡、さらに、元禄期の最古級の蚕書写本の調査研究とその成果の社会的還元に追われた。

和蘭陀通詞資料については、林子平が和蘭陀通詞を介して長崎で得た西洋兵学情報の典拠について、また、シーボルトと交流のあった和蘭陀通詞茂伝之進の資料について貴重な知見を得た。蘭学関係の言語接触研究の新資料を各地で発掘したが、研究班活動（発表等）に生かし切れなかった。

中国語教科書の語彙及び語彙量に関する研究
――一九五〇年から現在の教科書を中心に――

阿部慎太郎

中国語学習用教科書は、毎年何十冊と出版され、特にここ数年は、「コミュニケーション」、「アクティブラーニング」など、多種多様な内容になっている。中身であるが、一年次用の教科書を見ると、文法項目は、どの教科書もある程度似通っており、これは数十年前の教科書や中国で出版されている教科書も大差はない。一方、語彙に関しては教科書によって大きな差異が見られる。中国語では、〝汉语水平词汇与汉字等级大纲〟のような中国語学習者向けのレベル別語彙リストが存在するが、語彙の選別基準は、多くは著者の個人的な判断によるものが大きいように感じる。また、語彙量に関しても、一冊の教科書でどのくらいの語彙量を提示するのが良いかという議論はあまりされていない。しかし、語学力と語彙量には大きな相関があり、特に初級段階では語彙量を増やすことは、一つの大きな学習目標であり、今後の教科書作成において語彙量問題は重要な視点であると考える。そこで、これまでに出版されてきた教科書の語彙量にどのような差があるかを詳しく調査することで、今後の教科書開発の新しいアプローチになると考える。

今期（二十七年度のみ）は、主に一九五〇年～現在までの日中で出版された教科書に限定し、該当する教科書のデータベース化及び分かち書きの作業を行った。ある一定量の語彙データ収集ができた。今後は、一九五〇年以前の教科書のデータ収集を行い、これらの語彙及び語彙量の考察を行っていきたい。

対外接触による近現代日中言語表現の変遷

稲垣智恵

今期は、研究テーマ「対外接触による近現代日中言語表現の変遷」の研究の一環として、主に、近現代中国語におけるアスペクト助詞〝着〟の用法変遷に関する調査を進めた。

具体的には、十九世紀末から二十世紀初頭にかけての中国語文献（翻訳文献含む）からアスペクト助詞〝着〟を用いた用例を収集し、それ以前の中国語に於ける〝着〟の用例と違いはあるのかどうか、前置成分や後置成分によって分類し調査した。また、報告者は近代以降の〝着〟の用法に関して、外国語の影響を考えているため、それについても調査を進めた。

明らかに二十世紀以降、〝着〟にはそれ以前と異なる新たな用法が現れたが、これらと外国語の関係は現時点では明示できず、方言の可能性も大いに考えられる。今後引き続き更に用例を採取し、調査を進めたい。

また、〝着〟に関する研究以外にも、近代中国語の新興語法に関する研究として、「定語＋人称代詞」構造における外来語の影響に関して調査した。これに関しては、本構造は一九二〇年代の日本語からの翻訳文献に多くその使用が認められる。管見によれば、最も初期の使用は魯迅によって翻訳された《一個青年的夢》（原作は武者小路実篤『ある青年の夢』）に大量に使用が見られる。同年代の他の外国語から翻訳した中国語や、中国語の文献には「定語＋人称代詞」構造が殆ど見られないことを考えると、本構造は日本語の影響を大きく受けたものである可能性が十分に考えられる。

さらに、同構造の研究の一環として、万葉集における人称代名詞の連体修飾構造に関しても調査を進めた。この研究は、中国語の「定語＋人称代詞」構造が日本語の「連体修飾語＋人称代名詞」構造の影響を受けたものであるとして、そもそも近代に用いられていた日本語の本構造が、外国語の影響を受けている可能性はないのかということを調査したものである。調査の結果、日本語において「連体修飾語＋人称代名詞」構造は『万葉集』『土佐日記』『枕草子』『源氏物語』の時代にも制限的に使用が確認された。以降明治期に至るまでに変化し、広い範囲で用いられるようになったが、英語や中国語の訳文と比較するに、十九世紀末、明治時代において本構造はすでに独自に使用されていたと分かった。つまり、日本語の「連体修飾語＋人称代名詞」が中国語の「定語＋人称代詞」構造に影響を与えていたとして、それがすなわち「間接的欧化」とは、現段階では言えないということである。

近代西洋人による中国語研究

伊伏啓子

平成二十七年度の一年間、言語接触研究班に所属し「近代西洋人による中国語研究」をテーマに研究を行った。具体的にはアメリカ人来華宣教師T・P・クロフォードの中国語研究、十九世紀の欧文資料を用いた中国語の被動文研究などを行った。

アメリカ人来華宣教師T・P・クロフォードの中国語研究では、これまでの資料調査の内容を整理し、彼が中国で出版した多数の書籍には、官話で書かれたものと上海語で書かれたものがあり、上海語の書籍は彼が独自に創案した符号を用いて著されていること。また、その特殊な符号は彼の妻や友人らによって使用され、同時期に複数の符号を用いた上海語書籍が出版されていることを述べた。この内容は『関西大学中国文学会紀要』三七号（平成二十八年三月）に掲載した。二〇一五年十一月には日本中国語学会全国大会において「早期西洋人中国語文法書に見られる受動態について」の題目で口頭発表を行い、欧文資料を用いた中国語の被動文研究の可能性を示した。会議に参加することにより、ありがたいコメントをいただき、今後研究を進める上で大きな刺激となった。

近代日中における「鍵」概念の変容と知識人

王　暁雨

平成二十五年四月から平成二十六年九月にかけて、準研究員として研究活動を展開した。

平成二十五年九月、ローマ大学で開催された日中伊院生フォーラムにおいて、「啓蒙と翻訳――福沢諭吉の翻訳思想を中心に」を題として口頭発表した。七月、「近代中日知識分子眼中的〝國民〟概念變遷」が『廈門大學〝東亞與日本學〟論文集』に掲載された。同年の十一月、台湾国立大学で行った「当代日本研究学会暨第四届日本研究年会」に「近代日中における「自由」概念の変容――翻訳を中心として」を口頭発表した。

平成二十六年五月、第六回東アジア文化交渉学会に参加する際、「〝新名詞〟與晩晴知識分子――以〝嚴譯〟及〝新名詞〟的碰撞為中心」をテーマとして口頭発表した。

平成二十六年九月から平成二十七年九月までは、非常勤研究員に転じ研究活動を続けた。

平成二十七年、『関西大学東西学術研究所紀要』第四八輯に「近代日中における翻訳事業と思想受容――「自由」を実例として」という論文を発表した。

近世初期俳諧の表記に関する研究

田中巳榮子

日本語の文字・表記史の研究において、通時的な考察と同時に、共時的な検討が必要である。近世という時代を考えた時に、日常語を多く含む俳諧は重要な資料となる。しかし、俳諧の国文学的研究に比して国語学的研究では、わずかに仮名遣いを論じる研究はあっても、漢字の用法・振り仮名・その他の表記形態などの研究の対象とされないのが現状である。

近世に登場した俳諧は幅広い知識層に普及し、営利を目的とした俳諧集が出版されるようになり、中には振り仮名が散見する俳諧集が見える。そこで、これまでに振り仮名が散見する近世初期の十俳諧集の版本を資料として、漢字の含有率や振り仮名の付記率・機能など表記の実態を述べてきた。引き続きこの三年間に、一つには問題となる漢字の用法を取り上げた。例えば「哆」に「アツカヒ」と振り仮名を付し「仲裁する」意を表す事では、振り仮名に二重表現の機能があるとした。また、「日外」を「いつぞや」の意に用いるのは、中国本来の義から外れた日本独自の用法であるが、「外」が持つ字義から「いつぞや」の意に用いられる事を述べた。さらに、「丈夫」の一字を置き換えて「上夫」と記す事についても、有意的に「丈」に「上」をあて二重の意味を持たせたとした。今一つには用語の観点から考察を進め、『紅梅千句』に見える「ふためく」について、単純語「ふためく」は日常語としては衰退し、複合語「あわてふためく」が取って代る変遷過程に検討を加えた。また、これまでの貞門俳諧二作品集・談林俳諧八作品集に貞門の三作品集を加え、音象徴語を取り上げて検討した結果、語の中には、今回の使用例が『日本国語大辞典』（第二版）では初出例である語・初出例より早い語・収録がない語が見える事、川柳と共通点がある事など、初期俳諧の特徴を明らかにし、表記法に様々な創意工夫が見えることを指摘した。

近代中国語教材の研究

氷野　歩

近代には欧米を含めた広い地域において、多大な影響力を持ったとされる中国語教材がいくつか存在しており、近代以降に出版された中国語教材には、これらの教材からの影響が認められるものも少なくない。そこで本研究では、近代に出版された中国語教材に見られる記述をもとに、主に近代欧米・日本・中国における中国語教育の様相の一端を解明することを目指したものである。

今研究期間では、主に近代を代表する中国語教材の一つといえる、イギリス人外交官 Thomas Francis Wade による『語言自邇集』（一八六七）を一つのモデルとして焦点を当て、収録されている文章や語彙、発音、内容、解説方法やレイアウト等、さまざまな角度から分析することにより、相互の影響関係を近代中国語教材の系譜としてまとめていくことで、『語言自邇集』が当時の中国語教材や中国語教育に具体的にどのような影響をどの程度与えていたかという点を明らかにする事を目指して研究活動を行ってきた。

まず研究をスムーズに進めるために、国内外の図書館が所蔵する資料の調査、また中国語関係資料を多く所蔵する尾崎實氏、鱒澤彰夫氏旧蔵書の整理ならびに目録作成作業に参加するなど、中国語教材資料の収集を精力的に行ってきた。なかでも二〇一三年八月にアメリカハーバード大学燕京図書館において行った資料調査によって収集した多数の『語言自邇集』関連資料うち、『語言自邇集』「談論百章」の雛形となった『問答篇』（一八六〇）には多数の書き入れが残されており、これらと『語言自邇集』本文との異同の考察より、燕京図書館蔵『問答篇』に見られる書き入れが、後に出版された『語言自邇集』本文の多くと一致することを解明した。これより『問答篇』が『語言自邇集』の代用品として一八六七年以降にも利用されていた可能性を指摘した。

また、これまでにも『語言自邇集』は近代日本の中国語教育にも広く影響を与えてきたと言われてきたが、『語言自邇集』と近代日本において出版された中国語教材の本文や書き入れとを対照することで、欧米で出版された『語言自邇集』が、近代日本の中国語教育において受容され、さらに別の教材として様々に形を変え広く展開していった過程を具体的に明らかにし、『語言自邇集の研究』（二〇一五、内田慶市・氷野歩・宋桔共編著）において論文「近代日本における『語言自邇集』の受容と展開」として発表した。また同書では稀覯書であった『語言自邇集』初版ならびに『登瀛篇』、『問答篇』の影印本文にあわせ、上記三篇計一一万字を超える本文の全語彙索引を作成し、中国語教育史研究ならびに近代中国語研究に寄与するものとなったと言える。

今研究期間においては、『語言自邇集』とその関連資料との影響関係について、主な研究対象として取り扱ってきたので、引き続き音韻や内容、レイアウトなど様々な角度から『語言自邇集』の分析を進めるとともに、中国大陸や欧米において出版された中国語教材との影響関係や、『語言自邇集』以外の近代中国語教材に関しても同様に研究を進めていきたい。

近世近代日中文化交渉（日中移動伝播）研究班

（主幹）井上克人

班別研究報告書

近世近代における日中間の人物移動と情報伝播

当研究班は平成二十五年度に発足して以来、近世から近代にかけての東アジア圏における情報の移動および伝播に注目して、日本と中国における文化交渉の実態を追跡し、文化事象相互の比較研究を行ってきた。もとより対象となりうる事象が膨大かつ広汎であることは言を俟たないが、当研究班では、各研究員の専門分野に立脚しながら、近世近代の日中文化交渉の俯瞰図を描き出すことを目指してきた。各研究員の具体的な活動としては、「近代日中交渉史における薩州人及び京都支那学派」、「近世近代の日中間における美術交渉史の諸相」、「日本と中国における近代学術としての歴史学形成をめぐる諸問題」、「近世近代の日中交渉のバックグラウンドとしての海域ネットワーク」、「東アジアにおける明治思想の位相」などが挙げられる。研究員共同の活動としては、この三年間に七回の研究例会を開催し、十五本の研究報告を行った。その過半数が海外からの招聘研究者であることも当研究班の特色である。

個別研究報告書

比較思想的視座から見る東アジアにおける日本の中世から近現代の思想の位相

井上克人

今期は特に研究例会での発表実績はなかったが、明治期の哲学思想の動向について比較思想的視座から研究してきた。

平成二十六年度第一回　東西学術研究所　総合シンポジウム「比較研究の過去・現在・未来――東西文化交流をめぐって――」では以下のテーマで発表した。

日　時：平成二十七年三月二月二十四日（火）一四：〇〇～一七：〇〇

場　所：児島惟謙館一階　第一会議室

発表題目：「東西比較思想の反省と課題」

また平成二十七年七月十八日に開催されたＩＣＩＳ国際シンポジウムにおいては、海外からも講師を招聘し、国内からも有識者を招聘して当研究班のシンポジウムを企画した。内容は以下の通りである。

テーマ：東アジア圏における伝統と近代化

発表者：王青（中国社会科学院哲学研究所研究員・中華日本哲学会副会長）「近代日本と近代中国におけるイプセン主義の受容」

高橋文博（就実大学教授）「主従道徳と近代日本」

藤田高夫「林泰輔の中国上代研究――伝統漢学から近代中国学への展開」

中谷伸生「木村蒹葭堂の文人趣味と文化交渉」

髙橋沙希「明治洋画界における青木繁」

司会＆コメンテータ：井上克人、陶徳民

近代日中米文化交渉史の研究

陶　徳民

代表者として、中谷伸生東西学術研究所長、藪田貫博物館長、内田慶市図書館長、杉村邦彦書論研究会長、大橋成行泰山書道院長、杭迫柏樹日本書芸院長などをはじめ学内外の関係者と連携して、発起人会、展覧会、シンポジウム、揮毫会などを主な内容とする一九一三年大正癸丑蘭亭会百周年記念行事を実行し、好評を得た。

東西学術研究所資料集刊三十七『重野安繹における外交・漢文と国史――大阪大学懐徳堂文庫西村天囚旧蔵写本三種』、同三十九『吉田松陰と佐久間象山――開国初期の海外事情探索者たち（Ⅰ）』を二〇一四年、二〇一五年にそれぞれ出版した。

近世近代の日中間における美術交渉史の諸相

中谷伸生

日本近世絵画史の再検討・再評価の課題を、東アジア美術交渉論の枠組で研究した。とりわけ平成二十五年度には、江戸時代の大坂画壇や京狩野の絵画を研究対象にして、それらを中国絵画や台湾絵画と比較して東アジア美術史の構想を研究した。その研究は、「美術交渉としての日本美術史研究と東アジア」、『関西大学東西学術研究所紀要』第四七輯、（二〇一四年四月）や「浦上春琴による文化五年の《蘭亭図》」、単著、『関西大学博物館紀要』第二〇号（二〇一四年三月）および「蘭亭曲水図――狩野山雪から浦上春琴へ――」、『東アジア文化交渉研究』第七号（二〇一四年三月）などで公表された。

続く平成二十六年度には、耳鳥齋を中心とする大坂画壇の研究を行い、「耳鳥齋の版本挿絵における作風展開」、『関西大学東西学術研究所紀要』第四八輯（二〇一五年四月）、「耳鳥齋アーカイヴズ――新資料十件をめぐって――」、『アジア文化研究センター・ディスカッションペーパー』巻一一、関西大学アジア文化研究センター（二〇一五年八月）、「文化交渉から見る日本と台湾の膠彩画（日本画）、『南島史学』第八三号、南島史学会（二〇一五年十

一月）、「東アジア美術交渉論の構想――グローバリズムに即した方法論と日本美術史研究」、『美術フォーラム21』第三二号、美術フォーラム21刊行会（平成二十七年十一月）を公開した。また、著書『耳鳥齋アーカイヴズ――江戸時代における大坂の戯画――』（関西大学東西学術研究所資料集刊三十六）（平成二十七年三月）を出版した。

続く平成二十七年度には、大阪を中心とする日本美術史を特化して研究を進めた。その研究は、「林閬苑研究――大坂画壇の奇矯の絵師――」、『文化交渉学研究』（平成二十七年）、「淀川図巻と平家物語絵巻のデジタル化――美術館・博物館の状況を含めての考察――」、『関西大学博物館紀要』第二二号、（平成二十七年三月）によって公開された。

日本と中国における近代学術としての歴史学形成をめぐる諸問題

藤田高夫

研究班における個人テーマ「日本と中国における近代学術としての歴史学形成をめぐる諸問題」をめぐって、伝統漢学と近代中国学との連続性と断絶性に焦点をあてて研究を行った。今期はとくに近代日本の東洋学の創始者の一人とされる林泰輔に注目し、彼が甲骨文・金文など出土史料の価値をいち早く認めて、古代史研究における史料的可能性を予見した「近代歴史学者」的側面と、『尚書』・『詩経』などの上代文献の記述を基本的に是認し、儒家の言説の事実性を疑わなかった「伝統的漢学者」的側面を併せ持った人物であったことを跡づけた。同時に、明治国家の近代学制が生んだ最初の東洋学者である白鳥庫吉と対比させて、それぞれの背景となった学問的経歴の違いが、中国古代史および古代史料に対するスタンスの相違となって現れたことを明らかにした。

これとならんで、出土史料に対する日中両学界の比較研究のために、木簡を素材として日中韓三国を対比するプロジェクトに参加し、さらに現在は素材を石刻史料に移して、同様の視点での研究を進めている。

近世近代日中交渉のバックグラウンドとしての海域ネットワーク

松浦　章

個別テーマとして掲げた「近世近代日中交渉のバックグラウンドとしての海域ネットワーク」を中心課題として、主に汽船が活躍した時代の問題について考察を行った。

二十世紀前半の日本では、海外への交通機関は汽船が中心であったが、その活動については既に忘却されている。そのような観点にたって、主として日本の汽船会社を中心にアジアへの航路の状況を「航路案内」と言う冊子を収集し検討を重ね(一)、また日本と北アメリカ大陸を結んだ北太平洋航路において主力であったアメリカの Pacific Mail Steamship Co. やカナダ太平洋汽船会社そして日本の東洋汽船会社、日本郵船会社、大阪商船会社などの「航路案内」を収集し、検討を加えて(二)、さらに交通史の分野でも等閑視されている二十世紀前半の沖縄航路についても検討を加えた(三)。

また帆船時代の資料として、日本が台湾を統治した時代に、台湾総督府が台湾の帆船について船籍登録を行った資料を、台湾の台湾国史館において収集したものを資料集刊として上梓した(四)。これらの成果は、以下の書籍として出版している。

（一）『近代日本の中国・台湾汽船「航路案内」――船舶データベースの一端』（単著）・関西大学アジア文化研究センター・二三二頁・二〇一五年二月

（二）『北太平洋航路案内のアーカイヴズ――船舶データベースの一端――』（単著）・関西大学アジア文化研究センター・三三八頁・二〇一五年六月

（三）『「海上の道」の汽船航路――沖縄航路案内を読む――』（単著）・榕樹書林、一五七頁・二〇一六年二月

（四）『日本台湾統治時代のジャンク型帆船資料　中国式帆船のアーカイヴズ』（関西大学東西学術研究所資料集刊三十八）（単著）・関西大学出版部・三五八頁・二〇一五年十月

青木繁作品における宗教観と坂本繁二郎との関係

髙橋沙希

明治の洋画家・青木繁（一八八二～一九一一）は、日本近代美術史の中で、高い技術と豊かな表現力などによって重要な存在として捉えられてきた。しかしながら青木が描いた数枚のインド文化に関する作品や『舊約物語』（中村吉蔵（春雨）、金尾文淵堂、一九〇七年）の挿絵である《旧約聖書物語挿絵》についてはこれまで纏まった形で論究されてこなかった。また、残っている青木の文章などから、彼がキリスト教やヒンドゥー教などの宗教に興味を持っていたことが明らかになっているが、青木の宗教観に関しても、これまでほとんど言及されてこなかった。そこで本研究では、青木の宗教心の有無についても視野に入れて、彼のインド文化に関する作品と《旧約聖書物語挿絵》の詳細な分析を行った。

平成二十五～二十六年度は、まず当時どのようなインドの書物が発行されていたのかを調査し、青木が読むことができたと考えられる書物を検討したうえで、彼の画業においてインド文化がどのように関わっているのかを考察した。次に《旧約聖書物語挿絵》については、《わだつみのいろこの

宮》を中心に、その他の青木作品との比較分析を通じて、《旧約聖書物語挿絵》が青木の中でどのように位置づけられるのかを検討した。さらに、それらの作品分析の中で、青木の宗教心の有無についても言及した。平成二十七年度からは、青木と同郷で同年齢であった坂本繁二郎（一八八二～一九六九）との関係について分析を進めている。その過程で、青木がインド文化及び旧約聖書に興味を持ったきっかけなどについても考究している。

清末民初の中国における修身教育に見られる日本の影響――「程度」と「素養」を手がかりに

陳　贇

小論「程度：回帰借語としての可能性」（『関西大学東西学術研究所紀要』第四七輯　一八三～二〇六頁　二〇一四年四月）で触れているように、清末民初の中国における国民意識の変化には、梁啓超などをはじめとする渡日、留日の中国人思想家や文化人が大きく関わっている。

日本には明治初期にethicsの概念が導入されたが、はじめは旧来の儒教思想による「修身」に結びつけて捉えられていた。それが明治二十年代になって、「修身」とは切り離された西欧近代思想にもとづく「倫理学」として定着を見た。そのことはこの分野における翻訳書の邦題に含まれる語が、明治二十年を境に「修身」から「倫理」に変化していることにも現れている（西悠哉（二〇一〇）「ethics」概念の受容と展開――倫理教科書を中心として――」『佛教大学大学院紀要』三八参照）。

一方中国ではこれより遅れて十九世紀末～二十世紀の初め、すなわち清末民国初期に激動の変革期を迎え、その中で人々の修身思想も旧来のそれから大きく変容を遂げた。この時期には、梁啓超をはじめとする多くの渡日、留日の知識人が活躍し、先行して西欧文化を採り入れた日本を経由して中国に新しい文化、思想をもたらした。その象徴的な例の一つとして教科書の翻訳、導入があげられるが、倫理学の分野においても二十世紀初頭に次のような日本の教科書が中国語に翻訳され、出版された。

【書名】	【原編著者】	【訳者】	【出版社】	【出版年】
《倫理教科書》	井上哲次郎、高山林次郎	樊炳清	江楚編訳官書局	一九〇一、一九〇三
《道徳進化論》	戸水寛人		広智書局	一九〇二
《倫理学》	元良勇次郎	王国維	科学叢書本	一九〇二
《倫理書》	文部省	樊炳清	科学叢書本	一九〇二
《新世界倫理学》	乙竹岩造	趙必振	新民訳印書局	一九〇二～〇四
《倫理学》（后改名《中国教育倫理学》）	元良勇次郎	麦鼎華	広智書局	一九〇三
《倫理教科範本》	秋山四郎	董瑞椿	文明書局	一九〇三～〇五
《道徳法律進化之理》	加藤弘之	金康寿等	広智書局	一九〇三
《東洋西洋倫理学史》	木村鷹太郎	範迪吉	会文学社	一九〇三
《倫理学》	中谷延治	王章述	四川学報本	一九〇五
《倫理学》（師範教科叢書）	法貴慶次郎（講授）	胡庸浩（記録）	湖北官書局	一九〇五
《倫理学教科書》	中島徳藏	金太仁作	東亜公司	一九〇七
《中学倫理学教科書》	服部宇之吉		商務印書館	一九〇八
《国民道徳談》	福沢諭吉	朱宗英	中国図書公司	一九〇八

（王小静（二〇一二）『清末民初修身思想研究』人民出版社一二一頁所収のものを一部修正）

日本側教科書の多くは明治二十～三十年代（十九世紀末）に出版されたもので、前述した経緯のように、新概念の「倫理（学）」が書名に用いられている。

上掲諸書の元となった日本の教科のうち、文部省編輯の『倫理書』は「中学校 師範学校教科用書」として一八八八（明治二十一）年に出版されたもので、「倫理」の名を冠したものとしては古いものとみられる。同書は上記の翻訳書の他にも、管学大臣審定、奏諮各省通行の『蒙学叢書』（光緒丁酉（一八九七）年～光緒癸卯（一九〇三）年）に引用され、中国でも早い時期から西洋思想より取り入れた「倫理」の思想が採り入れられていたことが昨年八月に蘇州市図書館における調査にて判明した。

本年度は上記のような事実関係の調査をおこない、「倫理」思想の日本での定着期に、それが中国にももたらされていたことを考察した。

次年度は、文部省『倫理書』（国立国会図書館蔵本）と『蒙学叢書』（蘇州図書館蔵本）の内容をさらに精査し、西欧の倫理学思想が日本経由で中国にもたらされた経緯についての更なる深い考察を行いたい。そのうえで、さきに考察を行った「程度」とその周辺語、および「素養」の語と概念が中国に導入されてゆく過程について考証したい。

近代日中知識人の東アジア国際関係認識
――琉球問題を中心に――

薄　培林

本研究は、近代日中両国の知識人が世界認識、特に東アジアの国際関係をどのように認識していたかについて比較・検討することを目的としている。そこでの研究成果を踏まえながら、二十一世紀の日中協同関係構築に向けたVisionないしは理論的展望を提示することが期待できるのが、本研究の最大な特色である。

具体的には、近代以来の日中関係に大いに影響を与えた琉球問題に焦点をあて、日中知識人の認識の違いを考察する。つまり十九世紀後半期の日中両国の代表的な知識人が、日中間の琉球問題や琉球のアイデンティティ、及び当時の中琉日関係についてどのように認識していたかについて実証的に検討することによって、東アジア国際秩序が変貌しつつ、世界情勢が激変する十九世紀後半期における日中両国の知識人の世界認識の違いを明らかにする。さらに、その違いの原因となる思想的背景を分析し、両国における近代国際法受容状況の相違も検証する。数年間にわたる研究テーマであるが、平成二十五年度はその第一歩として、まず近代中国の代表的な知識人王韜、そして王と交友関係のあった明治日本の知識人の琉球認識を考察した。平成二十六年度はその第二歩として、明治の官僚・知識人の国際情勢認識・琉球問題認識、及び李鴻章・何如璋・黎庶昌・黄遵憲・郭崇燾らの清朝官僚知識人の中琉関係論・琉球認識を検討した。

資料収集のために、平成二十六年三月六～十日の間に、沖縄の琉球大学図書館・沖縄県立図書館で資料調査を行った。その研究成果の一つとして、「近代日中知識人の異なる琉球問題認識」（『関西大学東西学術研究所紀要』第四七輯　二〇一四年四月一日）と題する論文を発表した。

近世やまと絵研究――時代における特質とやまと絵の本義

日並彩乃

復古大和絵は、江戸後期から幕末にかけて、平安・鎌倉時代のやまと絵に学ぶことで当代のやまと絵復興を目指した活動を指す。この絵画運動は、田中訥言（一七六七～一八二三）、浮田一蕙（一七九五～一八五三）、冷泉為恭（一八二三～一八六四）を中心に語られる。しかしながら、彼らの間に直接の繋がりは乏しく、作品の分析からも、三者をひとつの纏まりとして考えることは難しい。三者には共通した思想は存在せず、また、江戸後期にやまと絵の古典を学んだことは、住吉派や土佐派の絵師たちにも指摘できる。

復古大和絵は、思想的な観点から時代に応じて、その内容を流転させてきたが、上記三者の研究から、現在では厳密な意味では画派とは呼べず、むしろ尾張の画家田中訥言と浮田一蕙、そして為恭といった個々の画家たちによるやまと絵復興を目指した絵画制作と定義されている。この言説は、従来唱えられていた枠組みと先のような実情との不可解な乖離を、研究者に納得させるのに最適な認識であった。そのため、やまと絵復興という唯一の共通点を以って彼らを一群とみなす見解は、復古大和絵の研究者の間で共有され、この枠組みへの追求はここで結着となっていた。

この復古大和絵という概念が形成された過程に注目すると、復古大和絵の作品群を解体することによって、明治期に創造された美術史の中にあるイデオロギー、またこの学問の前提にある近世と近代という歴史区分がこれを生んだ大きな要因であることが明らかになる。

このような理解を前提として、今年度は、近世や近代といった学問的・歴史的枠組みを越えてやまと絵作品の比較を行うことで、そもそもやまと絵という作品が持つ本質的な意味に迫った。具体的な手法としては、近世作品の復古大和絵と、近代のやまと絵復興を志した日本画家たちの作品とを比較し、両者に共通して指摘されている〝近代性〟について検討を行った。作品分析と研究史の双方向から論及することによって、美術作品における〝近代性〟と、現在停頓しているやまと絵研究の新たな方法論を提示した。そして、長らく日本的特質を期待されていたために、偏向を加えられていたやまと絵研究を一国美術史から解き放ち、文化交渉学の領域に持ち込むことによって、美術作品における日本的な性質について検討するべき必要性を、紀要論文において、明らかにした。

思想面の検討を必要とする一方で、個々の絵師たちの遺した膨大な作品の研究も十分ではない。三者の中でも冷泉為恭の作品は、とりわけ秀逸なものが多いが、やまと絵作品ばかりが強調され、彼の画業を大きく占める仏画の総合的な研究は看過されている。作品の総合的な検討を行うことが、絵師の全体像の理解には不可欠である。そのため、彼の仏画作品を丁寧に考察し、彼自身の境遇や仏

画の伝統など多角的な視野から検討し、その研究結果を口頭発表した。彼の仏画は彼自身の抱く信仰心が強く反映されており、これが彼に指摘されている〝近代性〟にも結びついている。彼の仏画は、風景描写に重きを置いている点が、仏画の伝統と異なっており、これは彼が浪士に命を狙われて隠棲した現在の和歌山の風景写生と繋がりがあると考えられる。実際に足を運び、調査を行った。

今後もこれら研究を継続し、やまと絵を含む和様化という思想上・造形上の日本史上の特質について研究の深化を図る。

近世日中仏教論書における語義解釈の比較
―『四分律』関係文献を中心として―　宮嶋純子

本研究は、南山律学の大成者である唐・道宣、及び後世の日中学僧による『四分律』関連文献を題材として、諸本の語義解釈の比較を通じ、日中間における仏教文化の理解や解釈の作法の相違点について考察をおこなった。特に考察の重点を置いたのは、①道宣における仏教的世界観の解明と、②北宋・元照と日本・承遠による律典論書の解釈比較、の二点である。

①については、道宣自身がどのような仏教観・世界観を持ち、それがどのようにかれの著作に反映されているかを考察した。インドの各仏教部派において成立した戒律は、インドの社会風俗や慣習を背景として成立したものであり、律典を研究し注釈するためには、インドの文化や言語に精通していなければならない。道宣自身は西方へ赴かなかったが、同時代の玄奘がインドから帰還して著した『大唐西域記』が道宣の著作活動に及ぼした影響などを論じたほか、道宣が各著作に付した序文の訳注を行う科研の共同研究に参加し、広く道宣の思想背景について学ぶ機会を得た。なお二〇一四年夏季にベトナム・ハノイにて資料調査を行った際、関連調査として、ベトナムにおいて印刷刊行された道宣の諸著作についても実見した。

②については、道宣の代表的律学書『四分律行事鈔』のために著された後世の数多くの注釈書のうち、北宋・元照の『行事鈔資持記』と日本鎌倉期の唐招提寺僧・承遠の『資行鈔』を手掛かりとして、両書がそれぞれ『行事鈔』の同一個所についてどのように解釈しているかを比較考察した。結果として、インド語から漢語に翻訳した語彙を解釈する場合、それが翻訳語である（＝中国語固有の語彙ではない）ことがおのずから理解され得る中国の場合と、そうではない日本の場合において、語義解釈の力点が異なることなどが明らかとなった。本研究の成果は、『関西大学東西学術研究所紀要』第四九輯にて報告している。

青木正児における中国文学史観に関する考察
辜　承堯

今年度は、年頭に設定した年次計画通りに研究を進めてきた。青木正児の中国文学研究を中心に研究し、その成果を論文として発表した。

青木正児の中国戯曲研究についての考察は、まず日本思想史学会で口頭発表し、それに基づいた論文「青木正児の中国戯曲研究に関する考察―近代日中の中国戯曲研究を視野に―」が『関西大学東西学術研究所紀要』第四九輯に掲載される（二〇一六年四月刊行）

この論文は青木の戯曲大作―『支那近世戯曲史』『元人雑劇序説』『元人雑劇』を焦点に合わせ、青木の戯曲研究に対して、萌芽期（京大入学まで）、蓄積期（京大在学時代）、静寂期（京大卒業から第一回訪中まで）、沈潜期（東北帝大の教授時代）、円熟期（京大の教授時代）と、五期に区切られる。青木の研究アプローチは「読む戯曲」から「観劇」へ、曲辞から構造へ焦点を移し、新たな視点から戯曲を研究していた。王国維の「思想構造」に啓発され、青木は「構造分析」、「筋分析」を切り口にして、元雑劇の構造、楽曲の構成を考察していた。青木の中国戯曲研究の特徴をまとめると、文人肌的な側面と地道で実証的な研究方法を挙げることができる。

また、青木正児の中国文学研究著作を手がかりにして、その文学史観を考察した。その成果としては、『東アジア文化交渉研究』第九号に論文「青木正児における中国文学史観に関する考察（一）」を投稿した。（二〇一六年三月刊行）同論文の内容を二〇一六年三月に北京外国語大学で開催する中日韓院生フォーラムにおいて口頭発表を行った。

この論文は、昭和戦前期における中国文学史の編纂を問い直す一歩として、青木正児の中国文学史研究に着目し、その文学史観が持っている特徴と問題点を明らかにする一方、「中国文学史の研究は明治大正期から前進していない」という結論を検証し、以下の結論を得た。青木に出された文学史観をまとめてみると、「文芸思潮の三大変遷」説、「美意識の発露に由る」文芸起源説、新文化運動への注目などを評価する一方、仏教思想の影響を見落とし、文学と儒学的道徳との関係、文学の美学的特徴という二重標準で文学史を区分したという問題がある。青木の中国文学批評の特徴を全体からみると、芸術的感受性に偏り、論理性をやや欠けているようである。したがって、青木は錯綜混乱の文壇の栄枯盛衰から文学史運動の内在的メカニズムを見いだせなかった。

宮崎市定における中国史像の変遷
―そのアジア史・世界史との関連をめぐって―

呂　超

博士論文の研究テーマに関わる関連資料の収集、整理作業を中心に研究を行い、博士論文の作成することを中心として研究を取り上げた。詳しくいえば、日本における各誌に掲載された宮崎の論文及び著書の単行本を収集するだけでなく、中、英、韓語に訳された論文と著書の探し集める作業に力点を置いて、各国から宮崎史学への関心点を考察して宮崎史学の世界的影響力を備えた原因を分析した。更に、それらの基礎資料に基づき、宮崎市定と海外の東洋史研究者との交流について研究を行ったうえ、宮崎史学の思想源流と転換を把握する。加えて、宮崎の師である内藤、桑原の史学思想についての研究に続き、宮崎に影響に与えた海外の史学思想と結びついて、宮崎史学の学術淵源を析出した。

それに、宮崎市定と彼以外の東洋史学者との比較を通して宮崎史学の特徴を検討した。貝塚茂樹の『史記』、『中国史』研究、吉川幸次郎の『論語』研究、西嶋定生の「東アジア」研究などというような各研究者の論説と宮崎のそれぞれの研究と比較を行い、宮崎の学問の特徴を把握する。また、宮崎が巻き込まれた前後日本における東洋史学界の論戦について研究を行い、それぞれの立場、史観、学術源流を捉える。更に、それを踏まえ、東洋史学者たちが直面した境遇を察し、敗戦前後の思想転換を解明した。

東アジア宗教儀礼研究班　（主幹）原田正俊

班別研究報告書

東アジアにおける宗教儀礼と社会秩序

本研究班では、東アジアにおける儒教・仏教・道教による儀礼の展開と社会秩序との関係、各宗教間の相互の影響関係について研究を進めた。儒教儀礼では、「朱子家礼」の思想の変容、さらに家礼に則って行われる儀礼が日本にどのような形で展開していくかが明らかにされた。

仏教の儀礼については、近年、日本仏教史研究の進展によって、古代中世を中心に各宗派の研究が深化しているが、本研究班では、これまで手薄であった経典・経塚・肖像画・神像といった造形物と信仰のありかた儀礼の内容について検討を加えた。

道教については、大陸の道教信仰が如何なる形で日本に伝播してくるかが注目され、日本にのこる神像、建築について検証した。また、大陸における廟会の信仰儀礼や水陸会などが紹介された。これらをもとに個別研究報告にあるように論文、研究発表がおこなわれている。

個別研究報告書

日本中世の仏教法会と社会

原田正俊

東アジアにおける宗教儀礼と社会の関係を考えるため、いくつかの方向から研究を進め、研究発表を行い、論文を執筆した。宗教儀礼のなかでも日常的に行われ、定期的に繰り返される行事・儀礼に着目して、仏教寺院の年中行事について考察を進めた。

このなかで、東アジアにおける誕生日の祈祷について研究を進め、比較的史料の豊富な中国唐代・宋代の皇帝や節度使など地方有力者のための仏教による誕生日祈祷の在り方の変遷を明らかにした。こうした祈祷は、日本古代にも伝来するが、日本社会において天皇の誕生日祈祷が一時期行われるが定着せず、社会的な広がりもなかった。

しかし、興味深いことに中世になって、大陸との往来が活発になり、禅宗の儀礼が体系的に日本社会に流入するに及び、誕生日祈祷も注目されるところとなり、室町時代には将軍への誕生日祈祷が定着していくことを明らかにした。室町幕府が公武の統一王権として権力を持つにあたって、様々な宗教儀礼を執り行っていくが、この一つとして誕生日祈祷があった。東アジアにおける儀礼の伝播が単純な移入ではなく、時の政治状況や宗教的な環境によって規定されることがわかり、歴史的な分析が重要であることを指摘した。

この他、仏法の法脈相承の在り方とその表象物としての頂相（肖像画）に注目して、従来、美術作品としてしかみられていない絵画を歴史史料として分析を進めた。また、十三～十五世紀の東アジアの文化交流については、五山禅宗の位置付けが重要であり、この実体を総合的に論じた。

これら成果の一部を、全米アジア学会（フィラデルフィア）において報告し、欧米の研究者に対して新しい研究成果を紹介することができた。

朱熹『家礼』および泊園書院の研究

吾妻重二

朱熹の『家礼』を中心とする儒教儀礼、および大坂の漢学塾・泊園書院につき研究を進めた。

『家礼』関係では『朱子語類』礼関係部分の訳注を二冊、共著により汲古書院から出版した。『家

礼』関係文献資料としては『家礼文献集成　日本篇』三～六の四冊を東西学術研究所資料集刊シリーズとして刊行した。このシリーズの各巻には詳細な目次と解題をつけた。解題では書誌学事項を説明し、日本における『家礼』関係文献の展開の様相がたどれるようにしてある。また研究例会や東アジア文化交渉学会で研究発表を行うとともに、「鄭斉斗の礼学――朝鮮陽明学と礼教」、「水戸藩の儒教喪祭儀礼文献について」、「藤井懶斎『二礼童覧』について――「孝」と儒教葬祭儀礼」、「『家礼』の和刻本について」などの論文により、韓国・日本の礼学・礼制についても考察を進めた。

泊園書院関係では「藤澤南岳と篆刻芸術・印譜」、「泊園文庫の整理――印章と日記について」、「泊園文庫の新出印章と藤澤黄坡の印章について」、「文化交渉与日本私塾――兼論泊園書院（中国語）などの論文を発表した。またICIS国際シンポジウムでは「近代学制のなかの泊園書院」と題し、明治期以降における泊園書院の制度的位置づけを解明した。「WEB泊園書院」に関しては印章や自筆稿本目録等、コンテンツのいっそうの充実をはかった。さらに、平成二十六年度から関西大学創立一三〇周年記念特別研究費（なにわ大阪研究）の助成を受け、関連データの整理・翻刻、資料撮影、資料収集等にとりくんだ。

このほか、青土社の『現代思想』（第四二巻四号）では柄谷行人らによる「いまなぜ儒教か」特集号に「東アジアの儒教と文化交渉　覚え書き」を掲載し、文化交渉学的視点から儒教の展開と意義を幅広く論じた。

東アジアにおける道教の文化交渉　二階堂善弘

今期の業績については、著書は自著が英文に翻訳されたものが一冊、中文に翻訳されたものが一冊で、それぞれ海外において発行されている。また翻訳書を一冊、東西学術研究所の訳注シリーズのひとつとして出版した。国際学会における発表は七回となった。海外調査、国内調査は研究所の研究費に加え、科研費などもあり、積極的に行った。

英文著書、また国際学会において発表した中心の課題は、日本における渡来神の変容である。日本の禅宗寺院に祭祀される招宝七郎や祠山張大帝などの神々は、現在中国では信仰が衰えている。日本の信仰から逆にかつての信仰の姿を復元できる。幾つかの報告では、これらの神々のより詳細な変化について考察した。もうひとつの課題は、アジアにおける華人系民間信仰の展開である。今期は特にベトナムなどの状況について検討した。さらに、アジア全体の寺院文化の相違などについても調査を行った。

東アジアの宮廷年中行事　西本昌弘

日本古代の宗教儀礼の諸問題を日本国内だけではなく、中国・朝鮮など東アジアとの関わりのなかで追究した。第一に、古代の殯の問題を検討した。殯とは人の死後、埋葬するまでの仮安置・仮埋葬の儀礼とされている。ただし西岡弘氏が指摘するように、中国古代の殯とは、死者を主人の位置から賓客の位置へと移行させる儀式で、そのために平素は賓客が使用する場所に死者を埋葬した。推古天皇の殯が小墾田宮の南庭で行われたことなどは、このような意味づけを背景としてはじめて理解できることである。こうした視点をもとに、今後さらに殯の再検討を行ってゆきたい。

第二に、空海が日本に導入した後七日御修法について考察した。後七日御修法の成立時期や儀場については、さまざまな見解が唱えられているが、『元亨釈書』『続日本後紀』『真言付法纂要鈔』などを分析することで、正月御斎会と並行しない後七日御修法は中務省において承和元年（八三四）からはじめられたが、翌年から御斎会と並行して行われる後七日御修法が勘解由使庁を改造した真言院において開始されたと結論づけた。

第三に、遣唐使停止後の日本と呉越国・宋国との交流のなかで、白居易詩の受容がさらに進むとともに、天台浄土教の重要文献が将来され、さらに日本からも重要文献が送られたことを、杭州にあった水心寺という寺院に注目しながら、水心寺僧と日本僧日延や源信との交友関係を追究するなかで検討した。

近世仏像と歴史史料との関係について　長谷洋一

東アジアの宗教儀礼の研究に関しては歴史史料の分析が不可欠である。専門とする仏教彫刻に於いても、銘記の有無に関わらず歴史史料の援用が不可欠である。そのため個人研究では、在銘彫刻が従前の時代に比べて圧倒的に多く残る近世彫刻に焦点をあてて、歴史史料を絡めながら、彫刻作品の歴史的分析を行った。

追善などの宗教儀礼のうち、高僧の遠忌に関する事例について考察した。近世は祖師信仰が高まった時代でもあり、多数の祖師像が製作された。現代でも「厄除け」信仰の対象とされたのが日蓮坐像である。近世では、日蓮宗寺院に安置される日蓮像は、製作・修復のほか「御衣替」と称した彩色の新調が行われており、日蓮の生誕、開宗、遠忌など、日蓮所縁のある時期に行われていることが判明する。こうした製作・修復は常に日蓮が

「生きている」生御影を強調した行為として捉えられ、日蓮像だけでなく十界本尊像などの製作・修復にも波及していく。また製作者に関して近世初期には定朝・運慶の系譜を引く京都七條仏師が関与していた点を知ることが出来た。

京都七條仏師の系譜（仏師系図）に関して『美術研究』所収の「本朝大仏師系図幷末流」が詳細ながら原本は行方不明であったが、調査の結果、東京大学史料編纂所に影写本とみられるものが架蔵され、その分析、検討を行った。その際に別本の仏師系図を見出すことができ、検討した結果、上記の日蓮宗での近世造像や修復はもっぱら七条西仏所が携わったことが判明した。

次に祖師信仰の面から天正十五年（一五八七）の製作銘をもつ奈良県黒滝村鳳閣寺の聖宝像について分析を行った。鳳閣寺は修験道当山派の一大拠点であり、聖宝像は通常の坐像ではなく山伏姿の倚像である。当山派の歴史史料と聖宝像との関係から、鳳閣寺が当山派本山である上醍醐寺御影堂の修復に関与していたことが推測でき、修験道と聖宝に深く関係する鳳閣寺にも祖師像製作の機運が高まりを受けて製作されたものと推測できた。また鳳閣寺聖宝倚像は当山派・本山派の判別のため京都へ持ち出されたり、さらに役行者倚像と聖宝倚像を一対として「修験道得度」で使用されたことも判明した。以上、特異ながら僧侶（祖師）の肖像彫刻について考察を行ったが、付随して俗人の肖像彫刻の検討も行った。岡山・曹源寺には、池田家歴代藩主の肖像彫刻が安置されている。曹源寺創建時の藩主池田綱政と絶外和尚の肖像彫刻は共に寿像であり、『日次記』から両像の製作過程が克明に判明できる。

次いで奈良・世尊寺の本尊である阿弥陀如来坐像（元禄十三年・一七〇〇　家城左近作）の検討を行った。周知の通り世尊寺は古代比蘇寺、吉野寺とされ、欽明朝に茅渟海に浮かぶ樟木で仏像を製作したとする伝承をもつ寺院である。阿弥陀如来像は若干古材を残すと思われるが、ほとんどが近世の製作に誓い状態である。作者である家城左近は浄土宗に深く関わった仏師で、世尊寺に隣接し、もと世尊寺の支院であったとされる法輪寺が現在浄土宗に属することから、『知恩院日鑑』の検討を通じて、阿弥陀如来坐像製作と世尊寺の歴史について検討した。世尊寺は中世まで比蘇寺と称され真言律宗寺院であったが衰微し、支院が法輪寺として独立、その援助でもって本尊及び十一面観音像（体部は奈良時代作）の修復を行ったことが明らかとなった。その後に比蘇寺は曹洞宗へと転宗、寺号も世尊寺に改めたことが判明した。比蘇寺の変遷をみた場合、律宗から曹洞宗に移る間に一時浄土宗が入っていたことが明らかとなった。

なお検討中、美術院による世尊寺十一面観音像の修復時に頭部に元禄十三年（一七〇〇）・「家城左近」銘が確認され、頭部が近世の補作であった旨が知らされた。十一面観音像には大御輪寺など律僧の名を記した願文等があり、十一面観音像は律僧、阿弥陀如来像は浄土宗の人々がそれぞれ願主を分けて補作していることも上の検討を踏まえれば理解できる事項と思われる。

以上、近世仏像と歴史史料との関係を具体的な作例でもって検討を行った。

なお東アジアという観点からは、旧円覚寺仏像群に関しての検討を行い、沖縄県立博物館・美術館文化講座でその一端を示したが、現在も調査研究を継続中である。

『北斗本命延生経』注釈の研究

三浦國雄

今期は、四川大学と御縁ができたこともあり、儒教儀礼研究から道教研究へ研究をシフトさせた。といっても、前者の研究は一部分継続しており、平成二十六（二〇一四）年九月、東西学術研究所第四回研究例会において、「『朱子家礼』の変容――『応酬彙選』を読む」と題した発表を行なった（本発表は二〇一六年四月刊行の『関西大学東西学術研究所紀要』第四九輯に掲載）。道教研究の主眼は『北斗本命延生経』にあって、二〇一四年刊の『東方宗教』誌上に「若杉家本『北斗本命延生経』について」を発表したあと、二〇一五年七月、ICIS国際シンポジウムにおいて「『北斗本命延生経』徐道齢注の諸問題」と題した発表を行なった。『北斗本命延生経』には三種の特色ある注釈が残されているが、今後は、残りの二注（傅洞真と玄元真人の注）を考究して論文に反映させたい。同時に、道教経典の注釈の問題を深化させて行きたいと考えている。

近代日韓研究者による韓国儒教研究

李　曉辰

当該年度において近代日韓における韓国儒教研究活動について京城帝国大学を中心にすえ、検討を行なった。

特に本年度は、博士論文であった「京城帝国大学における近代韓国儒教研究の展開」に修正を加え、『京城帝国大学の韓国儒教研究――「近代知」の形成と展開』（勉誠出版、二〇一六年三月）を出版した。本書は、伝統的な儒教研究が近代的学問としての姿を形成していく段階において、当時韓国の最高学府であった京城帝国大学ではどのように研究がなされ、語られていたかを明らかにし、

また、京城帝国大学という場が有する特徴と制限が韓国儒教研究にどのように現われているかを究明したものである。出版に当たって博士論文に紹介できなかった情報を追加し、出版用の鮮明な画像や資料を収集するため、韓国で資料調査を行なった。

また、京城帝国大学における日韓研究者の学術活動と人的ネットワークを探るため、京城帝国大学の助手らが出版した雑誌『学海』を調べ、調査を行なった。『学海』は京城帝国大学法文学部の文科助手会が刊行した雑誌で、第一輯と第二輯が残っている。『京城帝国大学一覧』には助手に関する記録はないが、この雑誌はこれまで知られてなかった京城帝国大学の助手たちの研究活動を知る手がかりになると考えられる。今後、『学海』における近代日韓研究者の研究活動および交流関係に関する研究を深めていきたい。

宗教儀礼における馬牛の利用　　**佐藤健太郎**

平成二十五～平成二十七年度までの今期では、宗教儀礼にも用いられた馬の飼育・管理や牧の運営などについて研究を行った。まず平成二十五年度では、文献史料を中心に古代の馬の飼育体制・牧の構造などの調査を行った。近年牧研究は考古学によって大きく進展している。今後の牧研究における文献史学・考古学による協業作業に資することを目指し、これまでの文献史学の成果を論じた。また、平安時代の馬寮の飼育体制を考察し、畿内に置かれた牧やその研究の重要性を指摘した。

平成二十六・二十七年度では、正月七日に一年間の邪気を取り払うために白馬を視る儀式・宴が催される白馬節会を検討した。これまでの研究では白馬を視て一年の邪気を取り除く風習は古代中国に起源を持つものと見なされてきたが、近年ではそれを否定する意見が出された。改めて白馬節会に関する古代史料の収集・検討を行い、この風習が古代中国に起源を持つものとみなして問題ないとの結論を出した。その成果をもとに速やかに成稿するつもりである。

また平成二十六年度には、古代の身分制・差別を考察する過程で、馬牛の皮を用いる祭祀やそれに関する史料を検討した。だが、検討を重ねるにつれて宗教・民俗の観点からの考察が必要と考えるようになり、現時点において結論を出せていない。今後も継続して研究をする予定である。

ベトナムの「家訓」文献と伝統倫理の研究　　**佐藤トゥイウェン**

平成二十五年～二十六年

ベトナム国家図書館、ハノイ漢喃研究院、ホーチミン市総合科学図書館に所蔵されているベトナムの儒教（「孝」思想、漢文教育など）に関する書物および関西大学総合図書館、大阪大学図書館に所蔵されている日本の文化、儒教に関する資料を調査するとともに複写した。さらにそれらの文献につき書誌事項を整理した。研究活動の成果は東アジア文化交渉学会やタイにおける国際シンポジウム、広島県における「戦間期の東アジアと漢学」国際シンポジウムにも出席し報告した。論文は『関西大学東西学術研究所紀要』に掲載するほか、『東アジア文化交渉研究』（関西大学）に投稿した。

平成二十六年～二十七年

ベトナム・ハノイの漢喃研究院、ベトナム国家図書館、ベトナム社会科学院、フエの文廟、ホーチミン市総合科学図書館およびフランス極東学院（École Française d'Extrême-Orient）、フランス国立図書館（Bibliothèque Nationale de France）、ギメ東洋美術館図書館（Bibliothèque du Musée National des Arts Asiatiques Guimet）、フランス・パリの大学間共同利用言語・文化図書館（Bibliothèque Universitaire des langues et civilisations）において「家訓」関連文献（漢字・字喃・現代ベトナム語）および儒教に関する資料を収集・複写した。研究活動の成果は東アジア文化交渉学会やＩＣＩＳ国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」にも参加し報告した。論文は『関西大学東西学術研究所紀要』に掲載するほか、『東アジア文化交渉研究』に投稿した。

現代新儒家と近現代中国　　**鈴木章伯**

平成二十七年度は、新儒家第一世代、特に梁漱溟、張君勱、馮友蘭といった人物に焦点をあて、一九二〇年代初頭にかけて生成されたテクストとそれらをとりまく社会的、歴史的コンテクストの解明を進めた。

梁漱溟に関しては、すでに数多くの論文が発表され、新儒家としての活動が注目される一方で、社会主義や仏教をめぐる思想的営為はあまり全体として詳しく論じられてこなかった。そこで、ＩＣＩＳ国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」において、「梁漱溟における社会主義から仏教への転向」と題する研究発表を行い、資料に散見する関連の記載を基に、梁漱溟が『東西文化及其哲学』を出版するまでの過程を再構成し、彼の社会主義や仏教思想とのかかわりについて少しく検討を加えた。

その他、論文「「新儒家」の誕生に関する一考察」を『関西大学東西学術研究所紀要』第四九輯（二〇一六年四月）に発表した。この論文では、「東

西文化論争」から「科学と玄学の論争」にいたるまでの過程をトレースし、単に梁漱溟や張君勱といった新儒家の立場からだけではなく、梁啓超、陳独秀、胡適などといった周辺人物の言論活動にも焦点をあてながら、ふたつの「論争」の裏に隠された新儒家誕生の契機について考察を行った。

また、新儒家を対象とした研究以外では、台湾大学で開催されたシンポジウムに参加し、「藤原惺窩対宋明理学的接受及其意義」と題する研究発表を行った。そこでは、実証的な立場から、藤原惺窩が宋明理学を受容することで、普遍性や特殊性をめぐってどのような思想を展開したのかということを資料に基づいて論じた。

中国仏教の展開とソグド人

中田美絵

二〇一三年度と二〇一四年度は、主に七～八世紀における唐内地の政治状況や唐を取り巻く国際情勢と唐朝の仏教事業とがどのような関係にあるのかを考察した。唐代の外国人仏教僧には、ヒンドゥークシュ山脈南北麓地域のトカラや罽賓、およびカシミールなどの出身者が多いこと、そして、彼らは、最新の仏典や仏教思想をもたらしただけでなく、唐と当該地域とをつなぐ外交活動にもかかわるなど政治的な活動を繰り広げる者もいた。彼らは、勢力を伸長するイスラームや吐蕃（チベット）の圧迫を逃れ、新天地となった唐において様々な仏教活動を展開し、その結果、唐仏教に大きな影響を与えたことを確認した。

二〇一五年度は、仏教儀礼において重要な役割を果たした香薬に注目し、それらを取り扱うソグド商人関連の資料を収集・分析した。特に天竺から高僧とともに唐にやって来たソグド人の事績を整理し、八世紀における香木交易の海上ルートや、海上進出していたペルシア商人との関係について考察を行い、研究発表を行った。

中国の民間信仰（華北、東北地域における泰山信仰）

二ノ宮聡

泰山信仰は、古来より中国を代表する信仰の一つであった。泰山諸神の中でも碧霞元君は明代中期から清末民国期にかけて華北や東北一帯で広く信仰された女神であり、これら地域で娘娘神といえば碧霞元君を指した。碧霞元君信仰については、北京や瀋陽南部の大石橋などを中心として各地で大規模な廟会が開催されていた。こうしたことからも広く人々に受れられた信仰であったことが知られる。よって本研究では、これら碧霞元君廟会を通じて当時の民衆の信仰の様子を検討し、泰山信仰の伝播や変遷を検証することを目的とする。

廟会では大石橋の迷鎮山廟会を例とする。迷鎮山は満州時期を中心に大規模な廟会活動がおこなわれた。ここでは碧霞元君ではなく雲霄・瓊霄・碧霄を総じて三霄娘娘と称する。こうした名称の違いなどを通じて、華北地域の碧霞元君廟会との差異を比較し、満州地域の廟会の特徴に注目した。また北京では碧霞元君信仰の一形態である九娘娘について考察した。九娘娘は碧霞元君を含む九体の女神の総称であり、それぞれ異なる職掌を有する。中でも天然痘など病を治癒する神が多くみられる。こうした点から、当時の北京の民衆が伝染病（天然痘）を恐れていた状況がうかがえる。よって、この九娘娘信仰を通じて北京での信仰の特徴や活動について考察した。

十二～十四世紀東部ユーラシアにおける契丹仏教の継承

藤原崇人

今期は、「十二～十四世紀東部ユーラシアにおける契丹仏教の継承」というテーマのもと、唐代以降の漢訳仏教の展開を、「中華」という狭い枠組みではなく、「東部ユーラシア」という大きなまとまりのなかで把握するための土台形成を目指し、遊牧系国家の契丹（遼九〇七～一一二五）のもとに形成された仏教に注目して、その後代（金・元時代）における展開と影響を具体化することにつとめた。ここにおいては、既存の編纂資料のみならず、仏教石刻・新出仏教典籍・仏教文物など文字と実物体双方にわたる第一次資料の積極的な活用を心がけた。

本研究においては、関連する資料や遺跡などの実見調査が大きな比重を占めるため、二〇一三年度と二〇一四年度には中華人民共和国の遼寧省および内モンゴル自治区を訪問し、所在の資料・遺跡を調査すると共に、現地研究者との情報交換・意見交換を行った。また、契丹は「中央＝中華」に対置される「周縁＝相対的中央」とも見なせるため、わが国の歴史において同様の位相を呈したと考えられる奥州（岩手県）に注目し、二〇一五年度に平泉の仏教遺跡と関連資料の実見調査を行い、「周縁＝相対的中央」に展開した仏教文化の具体相の把握につとめた。

本研究の成果は、単著『契丹仏教史の研究』（法蔵館、二〇一五年二月）、論文「栴檀瑞像の遷転と十～十四世紀東部ユーラシアの王権」（原田正俊編『日本古代中世の仏教と東アジア』関西大学出版部、二〇一四年三月）ほか二編、口頭報告「契丹（遼）における仏教の社会的展開」（洛北史学会第

十六回大会、京都府立大学、二〇一四年六月）ほか五編において順次公表した。

天文暦学理論の東アジア的展開　　**前原あやの**

今期は、（一）中国の天文占書や星座分類について、（二）日本の天文暦学について、の二点を中心に研究を進めた。

（一）では、まず星座分類の変遷について整理した。中でも三家分類については平成二十六年度の研究例会にて「星座分類中の三家分類の位置づけ」と題する発表を行ない、論文にまとめた（『東アジア文化交渉研究』第八号に掲載）。また、三垣分類については日本中国学会第六六回大会にて発表している。本研究により、中国の星座分類の日本への影響、星座分類の展開過程について明らかにすることができた。

星座分類を検討する資料となる天文占書については、各所蔵機関へ調査に赴き全体像を整理し、各々の特徴について「天文占書の解題と「天文占書フルテキストデータベース」の意義」としてまとめた（『関西大学東西学術研究所紀要』第四九輯二〇一六年四月刊行に掲載）。また、個別の天文占書に関しては、調査から明らかになった点を「『観象玩占』の東アジア的展開」と題して平成二十七年度の研究例会にて発表した。

（二）の研究に関して、平成二十六年度には一般財団法人橋本循記念会より助成を受け（研究テーマ「若杉家文書『三家簿讃』の調査に基づく三家分類法の研究」）、また平成二十六～二十七年度には科学研究費（研究活動スタート支援）の助成を受け（研究テーマ「中国天文類書の継承と発展に関する基礎的研究」）、研究を円滑に進めることができた。

（二）では、泊園書院を興した藤澤東畡の師・中山城山の天文暦学について、特に『校正天文訓』を中心に読み進めた。城山は中国の伝統的な天文知識を整理し、幅広い知識を生かして『淮南子』天文訓を校正していた。城山は他にも天文暦算に関する自筆本を残しており、『考象暦撮要』（一冊）、『応天暦』（全四巻二冊）、『推魯暦』（一冊）、『距筭城山先生箸』（一冊）、『文政三年五星暦』（一冊）、『校正天文訓』（一冊）、『暦書講義』（一冊）、『截線分外角図』（一冊）、『割円八線表』（乾坤二冊）、『御製考象暦後編』（一冊）などがある。城山は幅広い分野の知識を有していたが、その中でも天文学に関しては、江戸時代によく研究された授時暦はもちろんのこと、当時最新の知識であった『暦象考成後編』をも入手し、自ら暦を推算していたことが分かった。その研究は大阪や京都の人々との交流をもとに進められたと考えられる。大阪の高橋至時や間重富、あるいは京都の陰陽頭である土御門晴親らとの関わりが、城山の天文学方面の知識形成に影響を与えたのであろう。

得られた成果については、今後整理しまとめていきたいと考えている。

福建泉州地域の道教普度儀礼の全容と台湾地域との地域差に関する研究　　**山田明広**

平成二十五年度～二十七年度においては、中国南方や台湾などといった中華文化圏において無縁死者を供養するため主として旧暦七月に行われる、一般に「普度」と呼ばれる道教式ないし仏教式の儀礼とその関連習俗について、台湾地域のものと中国福建省泉州地域のものを中心に現地調査を行うとともに関連文献読解による考察を加えることで、その現状および歴史的変遷について検討した。特に、平成二十五年度に福建泉州石獅地域の「亀湖大普」と台湾金門地域の道教式普度法会・民間の普度習俗を調査できたこと、および平成二十七年度に台湾彰化県において台湾中部地域の烏頭道士の普度科儀を調査し、さらに高雄市武廟において全真教の普度科儀を調査できたことは、いずれも従来ほとんど報告がなされていないだけに、大きな収穫となった。また、道教と仏教双方の普度儀礼に関する儀礼書を分析することで、両者の共通点や相違点、影響関係を明らかにすることもできた。このような調査・研究を進めた結果、台湾地域の普度習俗・儀礼の現状を解説するとともにその成立について考察した論文および台湾彰化県鹿港天后宮の普度法会についての調査報告を執筆した。

この他、台湾中部地域の烏頭道士の功徳儀礼（＝死者追善供養の儀礼）の調査を数例行い、そのうち鹿港地域のものについて、その儀礼構成と内容を解説する論文を著した。また、これまでの道教儀礼に関する研究成果を「斎儀」を基軸に統合して単著を出版した。

近世儒教の展開と政策論
―泊園書院出身者を中心に　　**横山俊一郎**

当該研究期間を通じて、大阪の漢学塾出身者とりわけ泊園書院出身者が幕府や諸藩の政策形成に関与した事例を取り上げ、そこでの思想と実践の連関如何について検討した。

その際、日本以外の近世東アジアにおける儒教教養人すなわち中国の士大夫や朝鮮の両班の社会的存在形態を踏まえ、従来の思想史研究では見落としがちであった〈思想家〉としてではない〈実務家〉としての儒者を研究枠組として設定し、そ

れが有効であるか否かを探った。

考察した結果、幕末の泊園書院には対外的危機を意識して幕藩体制の変革を志す武士身分の儒者が多数おり、彼らの中には従来の儒教は世事に疎いものであったと批判するとともに、蘭学をも含む諸教を折衷する中心概念として儒教言説を再構成する者も見られた。

これらの研究成果は当該研究期間以前に考察した懐徳堂出身者の事例と併せて、博士論文「近世儒教の展開と政策論――懐徳堂および泊園書院出身者を中心に」としてまとめることができた。地域を限定する形ではあるが、近世日本における〈実務家〉としての儒者の形成→展開→解体という一つの過程を示すことができたように思われる。

また博士論文の完成を受けて、泊園書院の門人名簿『登門録』を調査したところ、明治期に近代企業を創設した「企業家」を多数輩出していることも明らかとなった。この新たな事実は〈実務家〉としての儒者が蓄積してきた政策論とそれに随伴する実践倫理が、明治維新を経て「政策者」から「企業家」へと継承された可能性をも示唆している。

いずれにしても、儒教は東アジア世界においてどのような政治的・社会的機能を果していたのか、これは思想史的にきわめて大きな問題であるが、我々はいまだ十分な回答を得ていない。本研究で取り上げた事例はそのことを解明するうえで重要な筋道を提供するものと思われる。

日本近世における中国音楽研究
――『律呂新書』を中心として――

榧木　亨

当該年度においては、朱子学を代表する楽律書として近世期の東アジアで広く研究されていた、蔡元定『律呂新書』の日本における受容と変容の様相を明らかにするため、研究の基礎となる資料の収集ならびに選別を行なうとともに、対象資料の分析を通して、日本近世期における『律呂新書』研究の展開過程について解明を試みた。

これまでの成果を総合すると、日本における『律呂新書』研究は、およそ次の三つに分類されるものと考えられる。一つ目は、京都の朱子学者である中村惕斎に始まり、その弟子である斎藤信斎を通して、崎門系の朱子学者である尾張の蟹養斎へと継承されていった研究である。日本近世期に行なわれた楽律研究では、中村惕斎の『律呂新書』研究の成果がたびたび参照されていることから、惕斎らの研究が日本における『律呂新書』研究の基礎を構築したといえる。なお、惕斎から養斎までの『律呂新書』に関する著作は、すべて崎門学派の叢書である『道学資講』に収録されている。二つ目は、江戸幕府の学問を司る林家において行なわれていた、二代目の林鵞峰を中心とする研究である。しかし、林家において作成された『律呂新書』に関する著作は、対外的に公表されることがなかったことから、同時代における『律呂新書』研究ならびに楽律研究には、ほとんど影響を与えることはなかった。三つ目は、『律呂新書』を批判的な観点から研究した、京都の医師であり琴師でもある鈴木蘭園の研究である。儒者が理想とする「古楽」を探求する蘭園は、『律呂新書』に見られる蔡元定の「新しい解釈」については否定的な見解を示している。しかし、理想とする楽律を探求する手段として『律呂新書』を選択したことを考えると、前述の二つの研究とは観点が異なるものの、蘭園の研究も『律呂新書』研究として独自の価値を有するものであるといえる。

これ以外にも、中国では明代以降に数多く見られる『律呂新書』と象数易学を関連付けた研究を実施した内堀英長、そして、日本における『律呂新書』研究の比較対象として、日本よりも早く同書の研究を開始した朝鮮王朝における受容と変容の様相についても分析を行なった。

これらの研究成果は、日本中国学会、東亜楽律学会、東アジア文化交渉学会などの全国（国際）大会において口頭発表するとともに、『関西大学東西学術研究所紀要』第四八、四九輯、『関西大学中国文学会紀要』第三五、三七号、『東アジア文化交渉研究』第七号、『「文化交渉」東アジア文化研究科院生論集』第二、三号などに論文を発表した。

南北朝・室町前期における顕密仏教と公武政権

橘　悠太

南北朝・室町時代前期における顕密仏教と公武政権との関わりについて、最も公武政権と密接に関わった寺院のひとつである醍醐寺三宝院を手掛かりとして研究を進めた。

政治の転換点として先行研究において重視されてきた南北朝時代後期という時期区分では、政治状況と非常に密接な関係にあった三宝院と公武政権関連の研究はほとんど進展していないのが先行研究の現状であった。そこで、南北朝時代後期より室町時代前期における醍醐寺三宝院と公武政権との関係に着目した。中世後期の三宝院については多方面からの検討を要するため、①室町幕府（武家）との関係、②朝廷（公家）との関係、③当該期における三宝院の寺院としての動向、という三点に絞り、本年度は②を進めた。

②の研究では、三宝院の特徴のひとつである「公武媒介」を手掛かりとした。先行研究においては南北朝時代における公武の力関係は幕府ありきで

朝廷の力は弱体であったという政治史研究の視座により、寺院研究においても専ら幕府との関係が取り沙汰されていた。そのため、三宝院の「公武媒介」という役割の「公」の部分、つまり朝廷と三宝院との関係が注目されることはなかった。そこで本研究では、朝廷を重視する近年の南北朝期政治史研究もふまえ、寺院研究においても朝廷との関係をクローズアップすることを試みた。三宝院と朝廷との関係性について検討するにあたり、三宝院院主光済の血縁関係を検討材料とした。考察の結果、光済は当時の朝廷である後光厳天皇親政の中心メンバーであった日野家・四条家との血縁を有していた。当時の公家社会内において光済の血縁が認識されており、血縁をたよりに幕府との媒介を懇望する公家の姿が明らかとなった。これにより当該期における公武政権を支えるものとして、三宝院光済とその身内の公家たちの存在が極めて大きかったことを解明することができた。本研究の詳細な成果としては、論文の投稿を予定している。

柳芳『唐暦』逸文から見る唐代の宗教儀礼

姚　晶晶

平成二十七年度東西学術研究所準研究員として、各研究班の例会に参加し、東アジア宗教儀礼研究班で日本国内外の研究者の発表を聴講した。

その他、フィールドワークの成果によって、中国と日本から発見された資料群（文献史料、墓誌、古写本など）の調査と分析を通じて、唐代の史官である柳芳によって私撰された編年体史書の『唐暦』を復元していくことを目的とする。

具体的には中国と日本の文献における引用された『唐暦』の逸文を整理し、収集した断片的な内容を確認し、当時の両国の間に歴史と文化交流のすがたを窺いたい。

そして、日本国内外の学会では日本伝統文化についての発表と講演を行った。

特に、日本古代文化は唐代の宗教と儀礼を受容したことが浮かび上がってきたのであろう。同時に史官の柳芳と『唐暦』の逸文を詳しく紹介した。

また、日本国内外の研究者の成果を踏まえて、私は東アジア宗教儀礼班で柳芳と『唐暦』についての研究を進めていく。

非典籍出土資料研究班　（主幹）玄　幸子

班別研究報告書

中国周辺地域における非典籍出土資料の研究

中国周辺地域における非典籍出土資料の研究という共通テーマのもと、森部研究員は現地調査を実施整理の上ｗｅｂ上で資料公開を行い、その過程で新資料発見という貴重な成果を獲得した。これは科研費（挑戦的萌芽研究）「「農業・牧畜境界地帯」から構築する新しいユーラシア史像の試み」の成果でもある。篠原研究員も同様に主として現地調査を継続実施し、時に看過されがちな朝鮮半島の資料の整理を進めている点は大きく評価されうる。玄幸子・高田時雄委嘱研究員による『内藤湖南敦煌遺書調査記録』（関西大学東西学術研究所資料集刊三十四）は斯界に大きな反響を呼び、湖南の敦煌学が国内外でさらに注目されることとなった。さらに本研究班は科学研究費、基盤研究（A）二五二四四〇一五「中国典籍日本古写本の研究」（研究代表者：高田時雄、平成二十五年～二十九年）と連携して研究を進めていることを附記したい。当該研究は、敦煌吐魯番写本との比較研究において重要な意義を有する日本古写中国典籍についての網羅的な整理と研究を目指すものであり、その流れから敦煌学国際学術研討会ＫＹＯＴＯ二〇一五（主催 京都大学人文科学研究所二〇一五年一月二十九日、三十日）を共催できたことは本研究班の活動に大きな意味をもつ成果の一つである。

個別研究報告書

金石文資料からみた6世紀における新羅の制度史研究

篠原啓方

研究テーマに関する大きな成果としては、まず海外調査において、六世紀の碑石の調査、特に南山新城碑・明活山城碑の釈文資料が確保できた点が挙げられる。二年にわたる（二〇一三～二〇一四年）南山新城碑および南山山城の調査において、碑石の様式・形制のデータからは、文字のみを扱いがちであった先行研究にはない新たな知見を得、デジタル写真データからは、拓本では得られない碑面の情報を釈文作業に加えることができた。その成果として、南山新城碑文の一部釈文を発表（二〇一四年四月・論文）し、様式・形制についての基礎的考察を報告（二〇一四年十二月・研究例会）した。

次に法とかかわる碑文内容の研究については、南山新城碑文の序文に見られる「法」の運用体系について報告（二〇一三年十月・学会）し、新羅金石文の研究史を整理し、特に南山新城碑のそれを成果として発表した（二〇一四年三月・雑誌）。その過程で、あらためて新羅法典の成立をめぐる先行研究の視座に関する疑問点、問題点を指摘し、

新羅法典の成立に関する筆者の考えをまとめた（二〇一五年五月・研究例会、二〇一六年二月・雑誌）。

以上の成果から、六世紀における新羅法の成立と展開は、新羅独自の政治的・社会的背景とアイディアが反映しており、中国からの影響や日本古代史との類似性とは一線を画した全体像の構築が必要であることが分かってきた。この成果をもとに今後、新羅法の具体的なあり方と、碑石の設置目的、設置場所、などを総合的に検討していく必要がある。

研究テーマから広がった成果としては、九～十世紀における新羅禅僧碑文からみた僧と王権の関係を考察したもの（二〇一四年八月・学会、二〇一五年八月・論文）、朝鮮時代の碑石文化に関する論文（二〇一六年三月）がある。

総じて、今期の研究活動は、本研究班におけるテーマの一つである「東アジアにおける非漢族の史的展開」を明らかにする上で、一定の貢献を果たしたものと結論づけることができる。

中国語口語歴史研究――七～一〇Cの敦煌を中心とする西北地域における非典籍出土資料中の中国語口語の記述と整理　**玄　幸子**

主として敦煌資料を対象に中国語口語の歴史的研究を課題とした今期の研究活動は総括すると、各個別のテキスト語彙語法分析の外に、とりわけ日本における先駆的研究業績を見直し再評価したうえで今後の研究の在り方について新たな手法を確立すべく思索、検討した点がポイントである。

学会発表など学外での研究活動については、平成二十五年度は中国蘭州大学、北京首都師範大学、臺灣國立成功大學で開催された三つの国際学会で研究発表をし敦煌文書の日本における研究史、口語史研究での位置づけ、文献学的特徴について述べた。平成二十六年度は引き続き、中国浙江大学、武漢大学、京都大学で開催された三つの国際学会に於いて敦煌變文資料を使った日本における中国口語史研究の回顧と展望、口語研究資料の重要な分野である佛教資料の伝播状況、今後の中国口語史研究の新たな方法と展望について述べた。平成二十七年度は、北海道大学他主催の国際学会で日本人僧侶の手になる佛教資料の口語史研究資料としての性格を検討し、後期在外研究期間中には、韓国東国大学校および中国浙江大学での国際学会で變文資料のテキスト校訂の問題を再検討し、朝鮮僧侶の手になる第二次資料の口語史研究上での位置づけとその意味について述べた。

著書論文に関しては、日本における敦煌学の先駆者である内藤湖南の敦煌学研究の実際を紹介すべく本学図書館に所蔵される記録文書を本研究班委嘱研究員高田時雄京都大学名誉教授との共編で影印出版したほかに、敦煌文書の書誌的報告、日本所蔵の漢籍資料の紹介と位置づけ、口語資料としての變文資料テキストの校訂などに関する論文七本を公表し、その他辭書項目担当、書評、日本中国学会学会だよりなどに寄稿した。

イラン系・トルコ系民族の出土資料の調査と研究　**森部　豊**

イラン系・トルコ系民族の出土資料の研究というテーマで研究をスタートした。

まず、初年度は、二十世紀の初めに中国河南省北部で発見されながら、欧米に流出したソグド人の石製葬具に関する調査を継続し、それをweb上で3D化して公表する作業をおこなった。

二年目から、中国遼寧省朝陽市で二十世紀後半から二十一世紀の初めにかけて発見された唐代の墓誌の調査を行った。ここで発見された墓誌の中には、唐代の契丹人に関係するものが含まれているからである。ただし、既刊の資料集などでは、拓本写真の文字が不鮮明であるなど問題個所が多かったので、平成二十六年度および平成二十七年度にかけて実地調査を行い、写真撮影と墓誌の録文を作成した。調査の結果、既刊の書籍に収録されている以外の墓誌の存在が判明し、また墓誌の記述から、唐の羈縻政策や軍制（いわゆる「府兵制」）を再考することができる可能性を秘めていることまでを明らかにした。

中国周辺地域における非典籍出土資料の研究　**高田時雄**

敦煌吐魯番等寫本など出土文献を資料として、中世期の中國西北地域に於ける言語社会の諸相につき研究を行った。また内藤文庫中の材料を用いて、「パスパ文字の刻文をもつ須彌山研墨」及び「内藤文庫から新たに発見されたウイグル文木活字」の発表を研究例会で行うとともに、前者については『関西大学東西学術研究所紀要』第四七輯に論文として掲載した。さらに玄幸子研究員と共編で関西大学東西学術研究所資料集刊三十四として『内藤湖南敦煌遺書調査記録』（関西大学出版部、二〇一五年一月）を出版した。

古チベット語文献・金石文による古代チベット帝国の国家体制の研究　**岩尾一史**

今期の研究活動に関しては主に①出土文書の研究、と②石刻史料の研究、③ロシア所蔵チベット

語文書の研究の三点に分けられる。以下ではこの三点に分けて総括したい。

① 出土文書研究

古代チベット帝国の国家体制の大半はいまだ未解明のままであるが、史料がないわけではなく、実際には平成二十五・二十六年度には古代チベット帝国の行政システムに関する出土文書を収集することにつとめ、行政文書の種類を特定することを目指した。またあわせてチベットの行政システムの中で非チベット人がどのようにしてチベット語を使用するようになったのか、その具体例を調査した。その結果、チベットの下行文書・上行文書の書式を抽出することができた。

平成二十七年度は特に個別の公文書の読解を行った。昨年度の研究により古代チベット帝国のチベット語公文書についてはおおよそ把握する事ができたが、個別文書の解読についてはもう少し検討が必要であったので個別文書の解読に時間を割き、例えばチベット帝国後に成立した敦煌チベット語公文書 P.t.1109の解読を行った（二〇一六年三月に出版）。

② 石刻資料研究

チベット帝国の領域内の各地では多くの石刻文が作成されたと考えられ、現在でも翠雨百現存している。それらは場所・時代によって書き手やその意図が全く異なっており、帝国の諸相を浮き彫りにする史料である。例えば、チベット帝国の領土内に拡がったチベット言語文化が、非チベット人の間においてどのように受容されていたのか言語状況と文化接触の諸相を、敦煌莫高窟、楡林窟など石窟寺院の刻文を利用して明らかにすることができるのである。

報告者は以前より古チベット語石刻史料の悉皆調査を目指して石刻調査・テキスト読解を行ってきたが、特に平成二十四年十二月、平成二十五年十二月、平成二十六年十二月と毎年中国の敦煌莫高窟・瓜州楡林窟を訪問して実地の石刻史料調査を行い、当該地におけるチベット語の利用状況とその広がりを調査した。得られた成果の一部として、チベット支配期の敦煌莫高窟でみられるT字型題字枠についての専論を出版した（平成二十六年三月）。また現時点におけるチベット文石刻史料の概観については研究班での例会において研究発表した（平成二十七年一月）。また、現在までに得られた莫高窟・楡林窟の石刻史料データについては来年度に出版する予定である。

③ ロシア所蔵古チベット語文書の調査

平成二十七年度に三菱財団の人文科学研究助成金を受けることが決定した。その資金によってロシア科学アカデミー東洋写本研究所（サンクトペテルブルク）を平成二十七年九月と平成二十八年三月、二回にわたり訪問し、同所所蔵の古チベット語文書をDx番号を中心に集中的に解読した。また、その過程で同所チベット語担当研究員の Alexander Zorin 氏と同所所蔵チベット語文書の共同研究をスタートすることが決まった。来年九月の助成期間終了までに同所の古チベット語文書を随時出版していく予定である。

唐末五代期における盧龍節度使の活動
―遼寧省出土墓誌群を中心に

新見まどか

今年度は、平成二十五年度に中国遼寧省を訪れて行った盧龍節度使関連の石刻史料の整理・読解・分析を行った。特に重要と思われる「劉承嗣墓誌」については、関西大学で開催された石刻ゼミナールにて、唐・五代史のみならず宋・遼代の専門家とも共同で読解を行い、唐末五代期における盧龍節度使一族の活動を復元することに努めた。また、唐代の盧龍節度使に関しては、中国の北京市法源寺所蔵「重蔵舎利記」を分析し、その成果を『関西大学東西学術研究所紀要』第四九輯に「唐末の盧龍節度使における「大王」号の出現」と題した論文として投稿した。これら石刻史料群の分析よって、既存の編纂史料では知られていなかった九世紀末から十世紀における、盧龍節度使と唐朝廷との関係や契丹との関係などを明らかにすることができた。

敦煌・トルファン発見の書儀・書簡文に関する文献学的考察

山本孝子

今期三カ年の非典籍出土資料研究班の活動のうち、平成二十六年度に非常勤研究員として参加した。同時期は、科学研究費特別研究員奨励費（二〇一三年度～二〇一五年度「唐・五代期の僧尼の書儀・書簡文に関する文献学的考察」研究課題番号：13J03545）の助成を受けており、この研究課題とも関連する敦煌・トルファン発見の書儀・書簡文についての考察を進めた。特に、今期研究班での研究テーマに沿ったものとしては次のような成果を公表している。

平成二十六年九月の太原師範大学歴史系における講演では、「唐五代時期書信格式的復元与域外資料」と題し、唐五代期の書簡の書式を復原する上で、敦煌発見の書儀・書簡文に加えて、日本に現存する同時期の資料が非常に高い参考価値を有することを紹介した。

平成二十六年十月に西北師範大学で開催された〝文化交流交匯交融的典範――敦煌文化〟国際論壇では「従唐五代時期書札礼儀看漢字文化圏的文化交流」について口頭発表を行い、唐五代期の書札礼から、東アジア漢字文化圏における文化交流の軌跡を見た。中国の書儀が重要な役割を果たしていたことを述べた。

平成二十七年一月の敦煌学国際学術研討会・京都二〇一五（於京都大学）「唐五代期の書簡文「短封」について」では、唐五代期において短封は、その性格・役割をやや変えながら重喪の弔いの際に用いられていたことを確認した。唐代には主に一種の特殊な封緘の方法を言い、九世紀以降「別紙（／別幅）」や「三幅書」の登場に伴い、内容を持つ弔いの書簡として発展し、五代期には三幅書に伴って送られる書簡として弔いの文言が連ねられ、単独で封がなされていた。「短疏」や「短啓」と呼ばれるような姿へと変化したとの結論に至った。この報告をまとめた論考は、「凶儀における「短封」の使用――唐・五代期における書簡文の変遷」として『敦煌写本研究年報』第一〇号（平成二十八年三月）に収録される。

研究期間を通して、敦煌・トルファン発見の書儀・書簡文に関する理解を一層深めることができた。

比較信仰文化研究班　（主幹）蜷川順子

班別研究報告書

祈りの場の比較文化史的研究

世界各地の「祈りの場」を主な研究対象として、西アジア・イスラーム文化圏、日本を含めた東アジア・仏教文化圏、南アジア・ヒンドゥー文化圏、ヨーロッパ・キリスト教文化圏という地域、宗教別の研究軸を設定し、年二回の研究例会を中心に比較研究活動をおこなった。東西学術研究所での口頭発表や紀要における研究論文の執筆以外でも、科学研究費関係では、「環東シナ海・環日本海沿岸の文化交渉と歴史生態をめぐる学術的研究」（基盤研究（A）、研究代表者：野間晴雄）、「途上国の手工業研究の総合に向けた地理学的試み――既存研究の批判的整理と実地調査から」（基盤研究（C）、研究代表者：吉田雄介）、「『油彩への衝動』中央公論美術出版」（出版助成、研究代表者：蜷川順子）や、科研申請奨励研究や研究成果公開活動、学会関係の発表や論文執筆、関西大学アジア文化研究センター、関西大学EU日本学ワークショップでの学術活動、他大学や各市町村主催の講演会や関連書誌への投稿など、研究員による活発な活動が展開された。

個別研究報告書

ヨーロッパ・キリスト教文化圏の祈りの場の研究　蜷川順子

今期は「祈りの場の比較文化史的研究」という共同研究テーマの下、年に一回ずつの研究発表をおこなった。担当したのはヨーロッパ・キリスト教文化圏の祈りの場の研究であったが、ヨーロッパの動向に限定せず、わが国におけるキリスト教文化圏の形成を扱うことで、わが国の問題が、ヨーロッパの問題と如何に密接に繋がっていたかを、グローバルな視点から扱った。

平成二十五年度には、平成二十六年一月二十九日に開催された研究例会「祈りの場の諸相」の第三部「ヨーロッパ・キリスト教世界の「祈りの場」において、「幕末の日本に向けられたキリスト者の眼差し――パリ外国宣教会の活動を中心に」というタイトルでの研究発表をおこなった。ここでは、同年度八月二十日から九月十九日にかけて、パリ第三大学との交換派遣研究期間にフランスで実施した、ジュラ県サン＝クロード司教管区やパリのバック通りにあるパリ外国宣教会のアーカイヴでの調査に基づいて発表内容をまとめた。十九世紀後半の欧米諸国との接触に始まる、パリ外国宣教会による日本再宣教の意味や、聖堂の建設と共に日本にもたらされた聖母像の問題などを中心に扱いながら、海禁期間中もヨーロッパでは継続的に日本への関心が高く、特にフランス革命以降はカトリック受難の時代を克服するモデルとして、日本における殉教者が注目されるようになった経緯も論じた。

平成二十六年度には、平成二十六年十二月十七日に開催された第八回研究例会「祈りの場の諸相その三」において、「幕末の日本に向けられたキリスト者の眼差し――横浜聖心教会の建設――」というタイトルで研究発表をおこなった。ここでは同年五月十四日、十五日、および十二月六日、七日に実施した横浜山手教会、神奈川県立歴史博物館、横浜市立図書館での調査に基づいて発表内容をまとめた。禁教令以降日本で最初に建設された、横浜聖心教会（献堂式一八六二年、現横浜山手教会）の建設事情について報告した。ここで、同教会の献堂先となった聖心の意味について、西欧での伝統を探りながら、わが国にそれが移入された経緯に注目した。また、今期研究の基本主題である、カトリック教会復興の大きな物語に日本再宣教が組み入れられていたことを、合わせて強調し

た。

平成二十七年度には、平成二十七年六月十七日に開催された第四回研究例会「祈りの場」の諸相――聖と俗の間で――その一」において、「十九世紀のパリ外国宣教会――大浦天主堂のルーツを求めて：上海編――」というタイトルで研究発表をおこなった。ここでは、同年三月五日から三月八日にかけて上海において実施した、一八六四年にルイ神父によって献堂された四川南路若瑟堂（聖ヨセフ教会、上海四川南路三六号）や一八五二年にスペインのジャン・フェランが設計した董家渡天主堂（聖ザビエル教会、上海董家渡路一八九号）での調査に基づいて、発表内容をまとめた。上海での調査を踏まえて、この聖堂建設に関係したイエズス会と、日本での建設に関わったパリ外国宣教会との歴史的関係を、とくに十七世紀にパリ外国宣教会が設立された前後の事情を中心に考察した。

以上のような、研究例会を軸とした活動以外に、現在の東西学術研究所総合シンポジウムの前身として平成二十五年度末の平成二十六年三月二十七日に開催された総合研究会において、「比較信仰文化にみるイメージの諸相と位相」というタイトルの下、同年度の研究班の活動を総括した。

東西学術研究所での活動に関係する外部での学会活動としては、平成二十一～二十二年に所属した環インド洋文化研究班での研究課題であった「単独の幼児イエス」像に関連して、二〇一三年にポーランド、クラクフのヤギェウォ大学で開催された国際美学会において研究発表をおこなった。これに関する論文は、二〇一五年に出版された。“The Child Jesus Standing Alone: Supernatural or Yuru-chara?,” Performing Cultures, ed. by Jakub Petri, ICA2013 Proceedings vol.3. Krakow: Libron, 2015, pp.31-40 に掲載された。また、二〇一四年にリスボンのノヴァ大学で開催された国際学会、第一二回欧州都市歴史学会において、今期の研究課題に関連する長崎市大浦天主堂を主題とした “Ōura Tenshudō: a French Temple in Nagasaki, Japan” を口頭で発表した。今期の主題である、パリ外国宣教会の再宣教に関しては、『関西大学東西学術研究所紀要』第四九輯に論文「出現と痕跡――パリ外国宣教会を手がかりに」として発表した。また、平成二十六年度の課題でもある聖心モチーフについては、ヨーロッパ近代のキリスト教信仰の中で急速に広まったものでもあるため、まとまった論考を準備し、また国際学会での発表を検討している。

調査活動としては、各年度の発表に合わせておこなった上述の現地調査以外に、二〇一四～五年に、香川県小豆島、山口県萩市、岡山県津山や鶴島、新潟県佐渡島などで、キリシタン・イメージ関係の調査、二〇一六年二月末に長崎県五島列島の教会群の調査を実施した。海外では、上述の学会に合わせたイベリア半島での調査の他、二〇一六年三月末にイギリス、ドイツにおいて、大映図書館およびフンボルト大学図書館などでの文献調査を実施した。

西アジア・イスラーム文化圏の祈りの場の研究

新谷英治

西アジア・イスラーム文化圏の祈りの場の考察を課題として、まずイスタンブル所在の教会堂とマスジドに注目してキリスト教とイスラーム教の祈りの場のあり方を考え、ついで西アジア・イスラーム文化圏出身者をはじめとするムスリムや日本人ムスリムが利用する日本所在のマスジドに注目し、祈りの場としてのマスジドが持つ意味と役割を考察した。

マスジドは祈りという行為を行う場として重要であるのは当然として、それ以外にムスリム相互の交流や学習、儀礼などの場として多くの役割を有している。それらの役割に注目しつつマスジドを見ると、そこを祈りの場として祈りを捧げる人々の社会的関係や彼らの文化の有り様が見えてくる。西アジア・イスラーム文化圏所在のマスジドであれ日本所在のマスジドであれ、それらが果たしている機能に注目することは、そこで祈りを捧げる人々のその社会における有り方・境遇を知ることに繋がる。その意味で、祈りの場の考察は、人々の信仰の内面的な有り様だけでなく、彼らの社会的、経済的、さらには文化的な営みの姿を明らかにする上でも有効な手法であることを確認できる。

南アジア・ヒンドゥー文化圏の祈りの場の研究

野間晴雄

インド世界における聖地は、多様な環境生態を超越して存在するヒンドゥー社会に強烈に刻印されている。聖地＝祈りの場は、王の祈りの場、庶民の祈りの場に大別できる。多くは交通路に沿った聖地で、インドのバラナシ、ネパールのバクタプルなどがその代表である。しかし現在のヒンドゥーの聖地は、ドラビダ人のインダス河谷からの南インドへの南下にともない、ヒンドゥー王国／都市が建設された南インドでその分布が顕著である。タミルナドゥ州のヒンドゥー都市、マドゥライはその典型で、中央寺院、王の信仰の場が都市プランに反映されている。北への広がりは、カトマンズ盆地の諸ヒンドゥー都市に顕著で、カトマンドゥー・ドゥルバル（Durbar）、パシュティナ

ート（ヒンドゥー寺院）、パタン（Patan）、バクタプル（Bhakutapur）、キルティプル（Kirtipur）などが聖地として大衆にも支持されている。

いっぽう、仏教の4大聖地はタライからガンジス中流域にかたまって分布する、北インドのイスラム化＝イスラム王国の成立によって、この地域ではヒンドゥー教聖地はその痕跡をあまりとどめない。スリランカやビルマ、タイにこの地から上座部仏教が伝播し、王の祈りの場に特化した聖地が形成された（インド化）。カンボジアのアンコールトムは、その強烈の東南アジアにおける仏教とヒンドゥー教が混在した王都であり聖地であった。筆者はガヤ（インド）とルンピニ（ネパール）を事例としてヒンドゥー聖地を相対化する目的で、仏教聖地を考察した。

これらの聖地の全体的考察と基礎データベース作成につづき、南アジア・ヒンドゥー文化圏と仏教聖地について、信仰の場という共同研究課題に対して、日本での文献調査に加えて、二〇一五年八月十七日～三十一日に北インドのデリー、アグラ、シムラを訪問し、さらにバラナシとガヤにおけるヒンドゥー教の信仰の場に関わる調査を行なった。コルカタでベンガルの歴史研究者と意見交換し、インド博物館を見学した。これらをもとに、バラナシのヒンドゥー教聖地を、聖地のコスモロジーの理念と実際、寺院建築物、ヒンドゥー・モスリムの居住構造などから考察した。

今後はこれらをまとめながら、報告書では信仰の場としての南アジアにおけるヒンドゥー教や仏教聖地の特色と都市理念を、歴史地理学、宗教地理学的観点から考察したい。

住まい・集落・山に設定された「聖なる空間」

森　隆男

住まいとそれを取りまく集落空間、さらに他界と意識された山について、それぞれに存在している「聖なる空間」すなわち神を祀る祭場がどのような役割を果たしているかについて検討した。検討するための資料はすべてフィールドワークで得たものである。

山については京都の稲荷山を取りあげ、古代の祭場が中世後期に山麓に移動する様子と、そこで活動する宗教者を追った。集落については兵庫県丹波市の事例を通じて、中世に祭場が山麓に移動して神社が創建されることで集落に与えた影響をさぐった。住まいについては宮崎県椎葉村の住まいに来訪神を迎えて饗応する神楽を取りあげ、住まいが祭場に転換する瞬間を観察し分析した。

以上の小テーマをそれぞれ研究例会で発表して、参加者から多くの意見を得ることができた。これらの研究は私が長年取り組んでいる住まいの意味を考える大テーマの枠内で行ったもので、神と人の「距離」を切り口にしたものである。

この三年間も引き続いて南西諸島でのフィールドワークを重ね、すでに本土では衰退・消滅した住まいに関わる習俗の情報を収集している。その目的は、住まい空間を貫く「クチ――オク」の秩序を日常・非日常時の人びとの動線から抽出するためである。これらの成果は今後の研究例会で発表していきたい。

琉球における湧水拝所の特性

松井幸一

琉球には多くの祭祀空間が存在する。本研究では琉球各地の祭祀空間に注目して、その継承がいかにおこなわれてきたのかを検証してきた。

今期の研究では琉球各地の聖地について調査をおこなったが、特に湧水に関する聖地は今なお数多く存在していた。湧水は生活に欠かせないものであったため、生活用水としては利用していない現在もなお各地で大切に保存され、そこでの祭祀が継承されている。一部の大規模な湧水は整備され観光地としての新たな一面も持つようになったが、そのような大規模湧水空間でも地元住民によって祭祀がおこなわれ、祭祀空間としての意味はしっかりと継承されていた。井戸のようなより小規模の湧水空間は道路や住居の一部または駐車場として埋められる例もあるが、そのような場所でも香炉だけは設置するなど、湧水の有無にかかわらずかつての湧水空間は祭祀空間としての継承がおこなわれていた。したがって琉球の聖地はそこにあるモノの有無だけでなく空間としていかに存在しているかが重要である。

このような観点から今期は分析手法の一つとして聖地データベースを作成してきた。聖地データベースの作成経過からは、一つの集落に複数の聖地が存在していること、村落祭祀、個人祭祀などいくつかの分類が可能であること、聖地間にも一定の階層性が見られることが推測できる。今後はさらに調査・分析を進めて聖地と集落の関係性や聖地と祭祀者の関係性をより明らかにすることによって、琉球の集落と聖地の関係性を再検討していく予定である。

戦中・戦後日本洋画壇の西洋受容と宗教との関連について

恵崎麻美

平成二十七年度より当研究班の所属となったが、本年は、戦中・戦後日本洋画壇の西洋受容と宗教

との関連について、洋画家小磯良平（一九〇三～一九八八）を中心に検討を行った。

小磯は神戸出身で、旧三田九鬼藩のキリスト教文化のうちに育てられた画家であり、従来の小磯研究においても、彼とキリスト教との関係は幾度となく指摘されてきた。しかしそれらの多くは断片的な言及に留まり、十分な論及がなされたとは言い難いのであった。

本研究において、彼とその作品を検証するにあたり、とりわけ注意を要したのが、基礎資料の徹底的な調査である。当時大衆的な人気を博した小磯にあっては、その著作及び、画家と作品に関して書かれた文献の数は膨大な数に昇り、また、調査の範囲は美術雑誌のみならず、大衆誌から地元誌に至るまで、多岐にわたるであろう。小磯の芸術や意図を理解するためには、これまで重視されてこなかった、この種の資料の研究が重要であるというのが報告者の見解である。

二〇一五年六月、関西大学東西学術研究所第四回研究例会において発表を行った。テーマは「小磯良平における西洋受容――戦中期西洋美術受容と宗教の関係を中心に――」である。本発表では、こうした調査の結果得た文献資料を材料にしながら、小磯とキリスト教との関わりを整理し、ステンドグラス《幼子イエスとヨハネ》（一九五九年）のデザインの分析や、《斉唱》（一九四一年）の解釈について新たな見解を提出した。また、特に戦時中の小磯作品を中心に分析・考察した内容を、二〇一六年四月刊行の論文「戦中期という時代と芸術――小磯良平の戦争画三作を巡って――」（『関西大学東西学術研究所紀要』、第四九輯、二〇一六年四月）にまとめた。

さらに、平成二十六年度三月に学位を取得した博士論文「小磯良平・室内での創作――エドガー・ドガ受容から戦争画制作までを中心に――」に加筆・修正を加え、提出を行った。ここでは、戦前までの小磯芸術の基礎形成について考証を行うことによって、画家の新たな側面を提示し、その芸術の再構成を目指したのである。また、ドガの受容を中心に彼と西洋芸術との関係について述べたが、これによって、日本における西洋美術受容の重要な事象の一例を挙げることができたと考えられよう。

以上のように、小磯作品に関する具体的分析を行い、またそこに見る信仰、ひいては彼が積極的に行なった西洋美術受容との関連も検証した。そうすることによって、小磯が西洋美術を積極的に摂取しながら行った幅広い創作活動の中にある、キリスト教に関する作品の位置づけと、画家の意図や制作理念を読み取ろうと試みたのである。

こうした手法で、今後は戦中・戦後日本洋画壇の西洋受容と宗教との関連の一断面の究明を目指す予定である。

日本の捕鯨における信仰と、それらを生み出した海のくらし

茶谷まりえ

日本の沿海地域における捕鯨文化を幅広くとらえ、調査の結果を様々な角度から丹念に整理・分析する作業に努めてきた。一方、本年度は静岡県の安良里地区でのフィールドワークを実施し、「捕鯨」をクジラ漁とイルカ漁とに分けて見直すなど新しい視点から研究を深めている。今期の活動は今後の研究の重要な礎を築いたと考える。

イスラームにおける信仰文化・祈りの場としての「敷物」研究

吉田雄介

本研究では、マスジェド（モスク）を中心にイランの祈りの場所で使用される敷物について検討した。

こうした信仰の場の敷物に関する資料は乏しく、文献的な調査からは多くは明らかにならない。そこで、敷物の中でもズィールー（綿製絨毯）という敷物の特性に頼ることで、産地の過去の状況を復元できないかと考え、現地のマスジェドやイマームザーデ（聖者廟）などを訪問し、使用中の敷物のデータを収集した。特に百年以上前に織られたもので、しかも職人の名入りのズィールーを中心に、敷物に織り込まれた情報を収集し、この三年間（平成二十五～二十七年度）で一〇〇枚以上のサンプルを観察することができた。このフィールドワークからは以下の成果が得られ、各々論文として公表ないし研究例会等で報告した（個別のタイトルに関しては、過去の『関西大学東西学術研究所紀要』を確認されたい）。

①まず、ズィールーという敷物生産の中心産地であるヤズド州の祈りの場を訪問し、十数ヶ所の祈りの場で現在使用されているズィールーを悉皆的に調査した。この結果、比較的最近に生産された敷物が多く使用されていると同時に、施設によっては二百年以上前に宗教寄進財として寄進されたズィールーが今でも使用されていることがわかった。

②さらに①の調査を前提に、古い製品を中心に現地で情報を収集した。そして、特定の施設で使用されている敷物や特定の種類の敷物（寄進土地などの収益から寄進された敷物）を検討すること

で、ズィールーという敷物の特徴を解明した。

③次に、機械織りカーペットが家庭だけでなく、祈りの場においても使用が増えることで、敷物用途が減ったズィールーは、車のシートカバーやペン立てといった新しい用途や、敷物であっても従来よりも小型の敷物に転換しつつある点についても検討した。

④また、最初に触れたように手織物・手工業は史料が乏しいため、その研究手法についても再検討をおこなった。具体的には遊牧民地域（イラン西部）の手工業研究の問題点の整理や、イランのみならず隣国オスマントルコの手工業研究・産地研究の批判的検討をおこなった。

東アジアにおける様々な民間信仰に関する地理学的研究　齋藤鮎子

東アジア、とりわけベトナムおよび日本における民間信仰について現地の視察と文献調査で明らかにしようと試みた。

ベトナムの研究では、宗教（大乗仏教、道教、儒教など）がアニミズム、先祖崇拝、呪術・占いなどと融合した現世利益を追求する人を民間信仰信者と定義し、願いに応じて様々な宗教・信仰を民間信仰信者は選択していることを指摘した。さらにテト（旧正月）では、年神の送迎、先祖供養、特別な風習・習わしから民間信仰を捉え、日本との差異および共通性を見いだした。さらに仏寺、神社、宮殿、村落内の集会場・廟、先祖を祀る廟などの信仰の場が多様にあるが、これらは厳密な境界（プライベート、パーソナル、パブリック、コモン）を有していることを指摘した。

日本の研究では、静岡県富士宮市を中心とした富士山信仰を対象とし、世界文化遺産「富士山」の構成資産を手掛かりに予察につとめた。その中で、富士山本宮浅間大社と山宮浅間神社で明治六年以前まで行われていた「山宮御神幸」の行路「神幸道」に配置される「丁目石」に注目した。その配置場所のほとんどは断定されておらず、加えて現存するものは数基のみである。今後の研究課題として、「丁目石」から「神幸」のルートについてGISを用いた分析を行い明らかにしたうえで、その空間の持つ意味を論じていきたい。

日本文学研究班　（主幹）長谷部　剛

班別研究報告書

日本言語文化の「転化」

本研究班はテーマを「日本言語文化の『転化』」とし、或る文化表象の形成・展開のありかたを「転化」ととらえ、それぞれの研究活動を遂行した。長谷部剛および増田周子・関肇・大橋毅彦は「日本近代文学における『転化』」という課題で、中国など海外の文学を日本の文学者がどのように受容しどのように自らの作品として「転化」していったのか、また、日本の文学作品・評論が外国語に翻訳され受容された時にどのように「転化」していったのか、検討した。山本登朗は「日本中古文学における『転化』」という課題で、平安漢文学がどのように古代中国や朝鮮半島の言語文化の影響を受容し自らのものとして「転化」していったのか、論究した。大島薫は「日本仏教説話における『転化』」という課題のもと、仏教説話の形成・展開について研究を続けた。溝井裕一は「ヨーロッパ表象文化の『転化』」という課題で、ヨーロッパの文化記号がどのように「転化」していったのか、論究した。

研究員・委嘱研究員の研究成果は多岐にして膨大な量に及ぶが、あえてここで一点挙げるのであれば、研究員のうち長谷部・山本の二名が参画した「日本古代の「漢」と「和」――嵯峨朝の文学から考える――」（アジア遊学一八八、勉誠出版、二〇一五年九月）の刊行を挙げることができる。また、外部資金獲得状況については、本研究班の主幹である長谷部剛を研究代表者とする科学研究費・基盤研究（B）「隋唐燕楽歌辞の文学的・音楽学的アプローチによる双方向的研究」（二〇一五年四月一日～二〇一八年三月三十一日）を挙げることができる。これは、本研究班でも取り組んだ中国近現代の文学者・歴史家、郭沫若の第二次日本滞在期間（一九二八～一九三七）の研究活動を解明することとも関わる内容となっている。

個別研究報告書

郭沫若（一八九二～一九七八）における、文学的語彙の形成　長谷部剛

中国近現代の文学者・歴史家、郭沫若の第二次日本滞在期間（一九二八～一九三七）に焦点を当てた。

二〇一四年二月の日本文学研究班研究例会では、「郭沫若［訳］『日本短篇小説選』について」と題して研究発表し、郭沫若が一九三四年に上海・商務印書館より刊行した『日本短篇小説選』について論じた。これは、同時代日本の作家の短篇小説十九篇を中国語に翻訳したものであり、マルクス主義文学陣営であった郭沫若が、日本のプロレタリア文学を多く選んであるのは容易に理解できる

にしても、プロレタリア文学以外の、芥川龍之介・志賀直哉・横光利一などの作品を選んでいることは、注目に値する。特定の文学的イデオロギーに支配されない、この選訳集の存在は、郭沫若の多角的な文学理解を示すものであろう。発表ではさらに、中国語翻訳文を詳細に検討し、当時形成途上にあった中国語の文学的表現が日本語の干渉・影響を受けていることを具体的に明らかにした。

また、郭沫若が日本語の原著を中国語に翻訳し、一九三六年に上海・商務印書館より刊行した林謙三著『隋唐燕楽調研究』をめぐっては、二〇一五年十二月中国で開かれた「傳統與現代：古琴藝術學術研討會」において、郭・林両者の交友を中心に明らかにし、さらに『隋唐燕楽調研究』の日本語原著への復元を進めた。同書については、林謙三・郭沫若双方の著作権継承者とも連絡を取り日本語版出版の同意を得ることができたので、近日中の刊行を準備している。

日本文学の基底をなす仏教学
（中国仏教と日本仏教）について　**大島　薫**

日本文学の基底を「仏教」に辿る研究は少なくない。それは、検索システムが整う一切経でなく、日本で編纂された注疏を含む各種テクストに及んでおり、またそういった研究は、寺院に伝存する聖教を調査し、目録化する作業と並行して行われている。日本には、未だ確認されていない、数多くの聖教が伝存しているからである。

本研究班において筆者は、柏原談義所における聖教調査の成果を踏まえることで、日本文学史において「説話」と、仏教学においては「譬喩」「因縁」などと称されてきた「短いモノガタリ」を再考した。「説話」の典拠を明らかにする研究では、日本で営まれた仏教教育や、経典注疏に散見する「譬喩」「因縁」が注目されている。ただし、仏教教育や経典注疏に「譬喩」「因縁」と称される「短いモノガタリ」が用いられているように、仏教に限らない、諸道における教育活動においても「短いモノガタリ」は用いられていた。諸道における教育活動を記録した「注釈書」と称されるテクストにも、「短いモノガタリ」が数多く記述されている。ゆえに筆者は、「短いモノガタリ」を用いて教育活動を営むという方法が、仏教における教育活動を基底として、さまざまな教育活動に布衍したことを指摘し、さらには、柏原談義所に伝存する新出聖教に明記される、仏教教育に「短いモノガタリ」を用いる意義に関する文言を論拠として、「譬喩」「因縁」の機能に関する通説を否定した。

新聞小説の研究　**関　肇**

柳川春葉が小説を執筆し、鰭崎英朋が挿絵を描いた新聞連載小説の発表状況を調査し、「生さぬ仲」（『大阪毎日新聞』大一・八～一・四）を中心として、明治末から大正期にかけての家庭小説の再流行、小説と挿絵の連携、製版技術の転換期における挿絵の新しい試み、新聞紙上を演劇の舞台とするような挿絵の特徴などについて考察し、その成果を論文にまとめて発表した。

さらに、竹久夢二の新聞小説挿絵について、その発表状況を調査し、資料収集を行った。明治四十年代に新聞や雑誌のコマ絵を描くことから出発した夢二は、大正中期から末年にかけて、自作の絵入り小説以外に、四つの新聞小説の挿絵を描いている。なかでも加藤武雄「審判」（『読売新聞』大十四・十～十五・三）の挿絵は、本文の単なる補足や説明にとどまらない異彩を放つものであり、その多様な表現を具体的に検討することによって、夢二における草画から挿絵への移行の諸要因、新聞小説挿絵を手がけるにいたる経緯とその画風の変遷、加藤武雄との関わり、小説テクストと挿絵の相関関係、当時の新興美術としての立体派や表現主義に通じる夢二の斬新な試み、テクストと拮抗するような独自の挿絵のあり方などについて明らかにし、その成果を論文にまとめて発表した。

これらは従来ほとんど顧みられなかったテーマであり、また柳川春葉と鰭崎英朋の息の合った結びつきと加藤武雄と竹久夢二のそれほど深くない交わりとは、きわめて対照的なものであって、その持つ意味を探ることにより、新聞小説と挿絵をめぐる問題への新たな切り口を提示することができたと考える。

日本近代文学とアジア諸国との関係　**増田周子**

今期の研究班で中心に行ったのは、火野葦平と戦争研究、ならびに葦平の戦後の平和活動の研究、すなわち具体的には、「アジア諸国会議」後の中国、朝鮮訪問等、アジアとの関連研究である。葦平研究に関しては、科研費受給中の研究とも重なり、かなり研究を推進することができた。その他、大阪の文学研究についても、以前からの研究に続いて進めることができた。

日本中古文学における「転化」　**山本登朗**

今期三年間のうち、前半の二年間は、おもに二つの種類の「転化」について考察した。

まず『伊勢物語』について、中国文学から日本人が学び取って応用した形式が重要な形で使われていること、またそれが、中国本来のものとは違った、独自の役割や意味をもって使われているこ

とを、二条后章段などに見られる「段末注記」をめぐって考え、そこから、該当諸章段の成立や意味について考察した。

また、それと平行して、『伊勢物語』が、その享受の過程で多く絵を伴って読まれていたことに注目し、現存する各時代の絵を検討することを通して、絵に描かれることによって本来の『伊勢物語』の章段理解がどのように変化していったか、その「転化」の姿を考察した。

最後の一年は、日本人によって作られた古代の漢詩に注目し、それらにしばしば見られる、本来の漢詩のあり方から外れた表現や内容が、これまで言われてきたような稚拙な誤りではなく、むしろそこに、意図的に作られたかどうかはともかく、中国の詩とは異なった、日本の和歌にも連続する独自の内容や表現が見られること、それらは、中国の漢詩から「転化」した日本漢詩の特色として、積極的に評価すべきであることなどを考えた。

人と動物の関係史／集合的記憶と第三帝国／ドイツ民間伝承におけるジェンダー　溝井裕一

平成二十五年～二十七年度の研究は、おもにつぎの三点に集約される。

一つ目は、「ひとと動物の関係史」に関わるもので、動物園や水族館の文化史的研究、民間伝承における変身モティーフや、狩猟伝説、人狼信仰、ヴンダーカンマーの研究がこれに該当する。メインとなる地域はヨーロッパで、ひとが狩猟をやめて農耕・牧畜中心の生活に移行し、さらにキリスト教を受け入れていく過程で、ひとと動物の境界が変化し、それにあわせて動物にたいする態度が変容していった様を追跡している。

二つ目は、ナチス・ドイツにおける「集合的記憶」の乱用に関するもので、ナチスがドイツ人に歪曲した「過去のイメージ」を、文化政策を通じて植えつけ、これによって彼らに新しいアイデンティティを付与し、侵略戦争とユダヤ人虐殺へ導こうとした問題を扱っている。報告者がとくに重点的に調査したのは、ナチス建築と、絶滅動物復元計画である。

三つ目は、ジェンダーに関するもので、ドイツの「ハーメルンの笛吹き男伝説」をとりあげ、それが中世から近世へ伝承されていくうちに、物語に登場する父親のイメージ、母親のイメージがしだいに変化していく過程を調査した。

日本近代文学にとっての上海体験　大橋毅彦

第二次上海事変以降アジア太平洋戦争終結に至るまでの日本近代文学の上海体験、ならびに日本近代文学と関わりを持った上海文化界の動向についての研究を行った。具体的には個々の作家・作品を対象とする研究では、木原孝一の詩業と、建設戦士としての自身の戦場体験を綴った『戦争の中の建設』、池田みち子の〈上海もの〉とも呼び得る一連の小説群、室伏クララの中国文学翻訳家ならびに詩人としての仕事を考察の対象とした。また、現地発行の新聞・雑誌については、主として「大陸新報」と「大陸往来」の研究を行った。すなわち、邦字新聞「大陸新報」の考察にあたっては、そこに掲載された中国文学と文化をめぐる言説が乱立あるいは対立の様相を帯びている点を明らかにした。現地綜合雑誌「大陸往来」については、中国国家図書館（北京）所蔵の同誌を活用しながら、向後の研究に資するために初期の同誌の目次一覧を作成すると共に、そこに掲載されている現地作家の作品群に時代の刻印がどのようなかたちで捺されているかについても論じてみた。一方、これらの研究と並行させながら、上海の旧フランス租界にあったライシャムシアター（蘭心大戯院）に関して、日・英・仏・中の新聞記事を基にしての多言語横断的研究を行い、その成果として、二〇一五年一月に共同研究書『上海租界與蘭心大戯院』を上海人民出版社から刊行、日本国内でも同年四月にアジア遊学の特集として『上海租界の劇場文化』を編んで刊行した。また二〇一五年度は、日本近代文学の上海体験というテーマにこの十数年来取り組んできた成果を博士学位申請論文の形でまとめていく年にもあて、上海亡命ユダヤ人芸術家に関する書き下ろしの論考なども加えつつ、「昭和文学の上海体験」と題する論文を仕上げた。

平安時代の和歌・物語における漢籍利用　惠阪友紀子

テーマである「平安時代の和歌・物語における漢籍利用」の研究を進めるため、句題和歌研究会や歌合研究会に参加し、研究発表を行った。歌合研究会では、これまでの研究会での成果が科学研究費補助金を得ることができたため、研究分担者として参加し、調査や研究を行った。

また、国文学研究資料館の共同研究（若手）の補助金を得て、『和漢朗詠集』の諸本整理をするため、陽明文庫、宮内庁書陵部など各地の美術館等で資料収集を行った。その成果の報告として、「関西大学東西学術研究所紀要」（第四八輯）に「関西大学図書館蔵生田本『和漢朗詠集』上巻の本文」の資料紹介を行い、二〇一五年八月に中国西安で行われた和漢比較文学会第八回海外特別例会に参加し、「『和漢朗詠集』の享受――詩歌の増補と大江匡房――」の研究発表を行った。

非定家本三代集の研究

立石大樹

三代集の流布本になったと考えられる藤原定家が書写校訂した所謂「定家本」があるが、それ以外の非定家本の本文に注目して、考察した。内容は以下の通り。

①升型本『古今和歌集』

定家本に影響を与えた定家の父・藤原俊成が自ら筆を染めて書写した俊成本と考えられていた升型本『古今和歌集』の古筆切を集成し、筆跡検討した。結果、俊成の真筆とは認められない可能性が極めて高いことを確認した。また、本文も、俊成本ではなく定家本であることから、非定家本ではなく俊成風の筆跡をよくした人物が定家本を書写した可能性が考えられる。残された課題として、定家本の中での位置を確認してゆきたい。

②伝藤原定家筆四半切『後撰和歌集』切

江戸時代の鑑定家によって、定家の筆跡であるといわれる四半切の『後撰和歌集』の古筆切を集成した。非定家本ともいえる初期の定家本の可能性を秘めながら、枚数が少なく論ずるまでには至らなかった。今後も継続し、取り組みたい課題と考える。

③秋篠切『後撰和歌集』

民部卿局筆とされてきた秋篠切を集成した。現在まで、七〇葉以上を図版で確認し、その検討を行った。かつて、調査した断簡が定家本に一致していたことから、その本文を「定家本」と述べたこともあった。しかし、まとめて調査した結果、定家本とも異なる部分が極めて多く、中には内容の重複する断簡もあることから、秋篠切の再検討が必要と考え調査した。

その成果は、平成二十八年度　和歌文学会関西例会（四月　於奈良大学）で発表した。

④小松切『拾遺抄』

昨年度、博士学位請求論文の中でも扱ったが、坊門局を伝称筆者とする小松切を再度、集成し直し論文化した。

以上四点が、本年度の活動である。

『源氏物語』を中心とした物語作品の享受に関する古筆資料の総合的調査と研究

中葉芳子

今期（平成二十五～二十七年度）は、「『源氏物語』を中心とした物語作品の享受に関する古筆資料の総合的調査と研究」をテーマとして個人活動をおこなった。

『源氏物語』の古筆資料に関しては、平成二十六年三月に「中世『源氏物語』梗概本古筆切集成稿」（『関西大学東西学術研究所研究報告書』所収）として、古筆切でしか現存しない中世の『源氏物語』梗概本を考察している。また、平成二十六年五月には「伝西行筆源氏集切の意義――鎌倉時代における『源氏物語』享受の一端として――」（『王朝文学の古筆切を考える――残欠の映発――』所収、武蔵野書院）と題して、『源氏物語』の和歌を集めた源氏集の中に梗概本と近い内容を持つものがあることを示している。平成二十八年三月には「冷泉為秀筆物語切の書写内容――付・中世『源氏物語』梗概本古筆切集成　補訂版――」（『国文学（関西大学）』第一〇〇号所収）を発表し、中世『源氏物語』梗概本古筆切の集成を補訂するとともに、ツレが紹介されたのを機に、『夜の寝覚』とされてきた古筆切の内容が『源氏物語』梗概本であることを改めて論証している。

また、平成二十七年二月に出版された田中登編著『古筆の楽しみ』（武蔵野書院）に、『源氏物語』に関連する古筆切六枚の解説を執筆した。同じく平成二十七年二月には共著で『源氏物語を彩るひとびと』（青簡舎）を出版した。これは、大学やカルチャーセンターなどでのテキストとして使用することを目的として編集・執筆したものである。

平成二十八年三月には共著で「甲南女子大学蔵『源氏小鏡』解題と翻刻（上）」（『甲南女子大学研究紀要　文学・文化編』第五二号所収）と題して、甲南女子大学に所蔵される『源氏小鏡』を紹介している。『源氏小鏡』の中でも一系統を成す重要な伝本であるが、行方不明となっていた写本。今回は全三冊中の一冊分だけの紹介ではあるが、これから続けて紹介していく予定である。

奉納百首の表現史

福留瑞美

平成二十七年度は、寺社へ奉納された百首歌のうち伊勢神宮へ奉納された平安末期から鎌倉期にかけての百首歌を調査した。その中で百首歌の構成意識や奉納先への意識の違いが確認できた。例えば、勧進による百首では勧進者を意識したものや、個人の奉納百首では神社の四季の情景や神話を意識したものがある。そういった諸相の中で、皇祖神・天照大神・天孫降臨などの記紀神話が詠まれている歌を有する百首があり、それは伊勢社奉納というものの一つの特徴と言えるが、伊勢社奉納百首全体の中においては必ず詠まれるものではないということが判明した。

西洋文学における異文化交流研究班

（主幹）和田葉子

班別研究報告書

西洋の文学・言語・思想における異文化交流

各研究員がスペイン、南アメリカ、ロシア、フランス、イギリス、アイルランドを舞台に繰り広げられる西洋文学の中の異文化接触の関係を研究するとともに、これらに加えて日本とその他のアジア諸国を視野に入れた研究にも踏み込むことができた。そのきっかけになったのは、平成二十六年度、招聘することができたコーネル大学のジョン・ホイットマン博士と、私たちの班のメンバーであるパトリック・オニール博士によるコロキアムであった。中世のラテン語のテキストと日本および韓国の漢文のテキストに見られる訓点を東西比較した非常に興味深い発表となった。訓点の研究は文字通り、行間を読む作業であり、小さな訓点から当時の知的活動がダイナミックに伝わってくる非常に刺激的なコロキアムとなった。

個別研究報告書

中世英文学における異文化接触

和田葉子

一三三〇年頃、アイルランドで書かれたLondon, British Library, MS Harleyには、ラテン語、英語、フランス語による韻文と散文の様々なジャンルの作品が収録されている。内容から、おそらくフランシスコ会の托鉢修道士が筆写したと推測される。中世のアイルランドにおける政治、宗教、社会等を痛烈に諷刺した詩や、ウィットに富んだ優れた作品を多く収めた非常に興味深い写本であるにもかかわらず、アイルランドで筆写され、三か国語が使用されているため、英文学史上、これまであまり注目されてこなかった。平成二十五～二十七年度は、一貫して、この写本の作品を、一つ一つ、読み解き、歴史学の視点も大いに取り入れて、当時のアイルランドの社会背景を十分考慮して、それらの成果を論文、学会（全国大会）、および研究例会において発表した。

科研費による調査研究も非常に役立った。ケンブリッジ大学図書館、大英図書館（イギリス）、ノースカロライナ大学チャペルヒル校（アメリカ合衆国）、アイルランド国立図書館、ウォーターフォード市立図書館（アイルランド共和国）では、上記の写本について、日本国内にはない情報がたくさん得られた。

平成二十六年度には、主幹として思いがけなく、私たちの研究班に新しい視点を取り入れることができた。コーネル大学のジョン・ホイットマン博士を招聘し、私たちの班のメンバーであるパトリック・オニール博士とのコロキアムを開催できたのは嬉しい出来事であった。中世のラテン語のテキストと日本および韓国の漢文のテキストに見られる訓点を東西比較した非常に興味深い発表となった。訓点の研究は文字通り、行間を読む作業であり、小さな訓点から当時の知的活動がダイナミックに伝わってくる非常に刺激的なコロキアムであった。

今期の研究班の成果は来年度、編纂して関西大学出版部より単行本として刊行することが決まっている。

ロシア文学と正教

近藤昌夫

平成二十五年度は科学研究費（基盤研究C「一八六〇年代のドストエフスキーにおける文学と建築のトポロジー」課題番号二三五二〇四〇九）最終年度にあたり、最終年度の成果を『白痴』論（「緑の聖所」）／『スラヴィアーナ』第六号、平成二十五年十一月）にまとめるとともに、研究年度全体の成果を『ペテルブルク・ロシア　文学都市の神話学』（未知谷、平成二十六年一月）で公表した。また、平行して進めていた翻訳ザイツェフ『チェーホフのこと』（未知谷、平成二十六年三月）を出版した。

平成二十六年度はサンクト・ペテルブルク大学で在外研究に従事した。同地では上記『ペテルブルク・ロシア　文学都市の神話学』の記述内容を検証するとともに、関連資料を収集した。また、プーシキン名称海外児童文学図書館において講演（Характеристка современной японской литературы и влияние перевода Футабатэя Симея「現代日本文学の特徴と二葉亭四迷の翻訳の影響」）を行ったほか（平成二十七年二月十三日）、サンクト・ペテルブルク大学国際人文学会で口答発表（“Образ храма в рассказе Чехова «Студент»”）を行った（平成二十七年三月十一日）。

平成二十七年度は、上記口頭発表をもとに、同名の論文（露文）をスラヴ人文学会年報（『スラヴィアーナ』第七号（通算二九号）、平成二十七年十一月）に公表した。また、『ペテルブルク・ロシア文学都市の神話学』の検証過程で、コロムナ地区の文学的重要性が明らかになり、帰国後、今後の構想を『散策探訪コロムナ　ペテルブルク文学の

源流』（未知谷、平成二十七年十二月）にまとめ上梓。同書を踏まえ、東西学術研究所研究例会で行った報告「ゴーゴリと生神女福音祭――『鼻』の日付をめぐって」（平成二十八年二月二十三日）は、コロムナ時代のゴーゴリの代表作『鼻』をプーシキンのペテルブルク神話『青銅の騎士』を継承する作品として読み直した。

ヨーロッパとラテンアメリカの前衛詩の発展においてビセンテ・ウイドブロ（Vicente Huidobro）が果たした役割の調査：詩論の分析を通じて

鼓　宗

今期の活動で重点を置いたのは、研究テーマに「詩論の分析を通じて」と示した通り、ビセンテ・ウイドブロの詩学クレアシオニスムがどのように展開したのか、著述に基づいてその変遷を追うことであった。そのために、一期前の研究班の活動においては、詩人のシュルレアリスムへの対抗意識が強く表れた一九二五年の宣言集*Manifestes*の翻訳と解題を『マニフェスト――ダダからクレアシオニスムへ』（関西大学東西学術研究所訳注シリーズ十五　平成二十五年三月）として刊行したが、このたびは『マニフェスト』に収まっていなかった詩論を中心に、初期のエッセイ、インタヴュー、詩・詩人を主題にしたいくつかの詩編などを集めた『クレアシオニスムの詩学――ラテンアメリカのアヴァンギャルド』を編訳した。またビセンテ・ウイドブロは初期の論集『徒然に……』で、未来派を取り上げて以来、この二十世紀の前衛主義の嚆矢である運動にたびたび言及しているが、その提唱者フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ以前にこの名称を用いた者としてガブリエル・アロマルの、そしてその主張に実質的に先駆けた者としてアルバロ・アルマンド・バセウルの名前を挙げている。これらカタルーニャとウルグアイの詩人がどのような人物であったのか、ウイドブロはそこからどのように自身の美学を発展させようとしたのか、「関西大学東西学術研究所紀要」第四九輯に寄せた「未来主義の先駆者、ガブリエル・アロマルとアルバロ・アルマンド・バウセル――ビセンテ・ウイドブロの初期論集『徒然に……』を巡って」では明らかにしようとした。また研究例会では、ウイドブロの小説を二編、『カリオストロ』（平成二十五年度）と『来るべきもの』（平成二十七年度）を取り上げたが、これら小説の主題や手法と詩学がどのように関連していくのか、平成二十六年度研究例会の主題、チリの詩人と未来派の関係にも照らしながら探ることを、小説それ自体の翻訳と併せて引き続き自身の課題としたい。

一八八〇年代から一九二〇年代にかけてのフランス文学とスペイン・ラテンアメリカ文学の交流について

平田　渡

平成二十五年度は、九月二十八日にスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学でおこなわれた、国際哲学会に招待されて、専門外のテーマ、『源氏物語』について発表をすることになったので、資料集めと読みこみ、原稿の執筆、翻訳と苦労つづきであった。

英語のチャールズ・イー・タトル出版とは、まだ比ぶべくもないが、スペインでサトリ出版という会社が立ちあげられて、芭蕉、一茶、蕪村、森鴎外、夏目漱石、泉鏡花、芥川龍之介などの文学作品が出ていることを知って刺激を受けた。

平成二十六年度は、目立った研究成果は得られなかった。

平成二十七年度は、『サーカス』の下訳をすませると、それからは手直しに継ぐ手直しをつづけた。作者ラモンは、つねに「新しいもの」を模索する前衛派らしく、一見簡単そうで、その実まことに難解な文体を操るので、訳者泣かせの作家と言っていいだろう。そのせいで、何人ものネイティヴの手を煩わせることになった。「もろもろの恩かがふりし一生（ひとよ）かな」（聖子）を本歌取りすれば、まさに「もろもろの恩かがふりし月日かな」（渡）である。

中世アイルランドにおけるアイルランドとイングランドの知的交流について

パトリック・オニール

平成二十五～二十七年度の研究成果を日本及び海外の学会で講演、発表したほか、二十五年度は*Psalterium Suthantoniense*（the Southampton Psalter）（Corpus Christianorum, Continuatio Mediaeualis）に加えて、二十七年度には、*Old English Psalms*, edited and translated by Patrick P. O, Neill, Dumbarton Oaks Medieval library vol. 42（Harvard University Press, Cambridge, March 2016）、合わせて二冊を刊行した。平成二十六年度には、東西学術研究所で開催されたコーネル大学のジョン・ホイットマン博士とのコロキアムにおいて、中世のラテン語のテキストと日本および韓国の漢文のテキストに見られる訓点を東西比較しディスカッションも行った。

また、東西学術研究所合同研究室および、アイルランドのダブリン高等研究所、アイルランド国立図書館、ウォーターフォード市立図書館、松江市の小泉八雲資料室において成果につながる調査

研究を行うことができた。

専制政治下における自律と自由

川神傅弘

当初より「知識人は何故全体主義的な制度に憧れるのか」という問題を一貫して追究した。第二次世界大戦後サルトル、ポンティ、フーコーなどフランス知識人の大方はスターリンの指導するソ連を圧倒的に支持し続けた。その理由の一つとして考えられるのはわずか数年前に体験したヒットラーによるナチス体制下で不断に行われた拷問、監禁、密告、強制収容所送りなどの恐怖政治の悪夢であったろう。フランス知識人たちはこうした全体主義の過酷な有り方の根源をファシズムという名の思想の決定的性格に求め、複数政党を許容しない一国一党の独裁的政治形態は只管ファシズムに由来するものと考えたのである。

こうした悪夢からの解放を願うethos（時代の雰囲気）に満ちた戦後のフランスで共産主義が救世主的な役割を担う思想として歓迎されたことは言うを俟たない。要するに共産主義社会はファシズム社会と一八〇度異なる理想的な社会と受け止められたのだ。かくして知識人たちは《均質的かつ普遍的社会》という理想郷実現の夢をソ連に託した。しかしながら、一九五〇年代になるとソヴィエトの政治体制の欠陥を露わにする情報が陸続ともたらされるようになり、果たしてその社会のあり方は嘗てのヒットラーによる恐怖政治にきわめて類似した、暴力と強制収容所の存在を許容する過酷な全体主義体制であることが明らかになる。ファシズムと共産主義の違いはただ一つ、その暴力と強制収容所があくまで「進歩」を志向する思想であるか否かにかかっていた。ポンティの明るい未来を志向する限りにおいて暴力は許されると

する「進歩的暴力理論」は多くの知識人の支持を得た。ポンティは「暴力は革命の成就と共に消滅する」と訴えた。こうして多くの知識人のあいだに楽観的進歩主義が蔓延したが、アルベール・カミュは反対の論陣を張り、サルトルとの論争が始まった。

サルトル、ポンティらの左翼知識人の拠って立つところはヘーゲルに由来する「歴史は進歩する」という進歩史観であり、進歩のために、いわば未来のために人が犠牲になることは今までもあったし、今後もありうることを認めるものであった。人命尊重主義のカミュはそれを否定した。革命思想は古き時代のキリスト教の「千年王国説」や「理想郷」の考えに端を発するまやかしに過ぎないと考えていたからである。

平成十三年の論文「カミュ・サルトル論争が示唆する抑圧と自由」以来、これら両作家に象徴される平等の思想と自由の観念の相克の相を描いてきたが、今回の拙稿「超越と今・ここ」においては、更にキリスト教的千年王国説と平等主義的・共産主義的幻想の密接な関係を詳らかにすることが出来たように思われる。研究の途次、ロシア亡命哲学者ニコライ・ベルジェーエフの存在の大きさに気づき、キリスト教的かつ実存的見地からの共産主義観、理想郷主義観を援用することが出来たことは僥倖と言うに等しい大いなる収穫であった。

◇　◇

彙報

一　出版物

（二〇一五年四月一日～二〇一六年三月三十一日）

1　中谷伸生編
『東西学術研究所紀要』第48輯
（二〇一五年四月刊）

2　中谷伸生編
『東西学術研究所々報』第90号
（二〇一五年五月刊）

3　吾妻重二編
『泊園』第五十四号（二〇一五年六月刊）

4　松浦　章編著
『日本台湾統治時代のジャンク型帆船資料――中国式帆船のアーカイヴズ――』
（東西学術研究所資料集刊38）
（二〇一五年十月刊）

5　劉　雄峰著　二階堂善弘監訳
『神話から神化へ――中国民間宗教における神仏観』（東西学術研究所訳注シリーズ18）
（二〇一五年十二月刊）

6　沈　国威・内田慶市編著
『東アジア言語接触の研究』（東西学術研究所研究叢刊51）（二〇一六年二月刊）

7　吾妻重二編著
『家礼文献集成　日本篇5』（東西学術研究所資料集刊27-5）
（二〇一五年三月刊）

8　吾妻重二編著
『家礼文献集成　日本篇6』（東西学術研究所資料集刊27-6）
（二〇一五年三月刊）

9　ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ著
平田　渡訳
『えも言われぬ美しさの、きらびやかにして、永遠なる　サーカス』（東西学術研究所訳注シリーズ19）
（二〇一六年三月刊）

10　陶　徳民編著
『吉田松陰と佐久間象山――開国初期の海外事情探索者たち（Ⅰ）――』（東西学術研究所資料集刊39）（二〇一六年三月刊）

◇　◇

二　研究員の研究活動

（二〇一五年四月一日～二〇一六年三月三十一日）

言語接触研究班

内田慶市　研究員

（著書）

●『官話指南の書誌的研究　付影印・語彙索引』（氷野善寛との共編著）好文出版　七二五頁
二〇一六年三月

●『東アジア言語接触の研究』（沈　国威との共編著）（関西大学東西学術研究所研究叢刊五一・文化交渉と言語接触研究・資料叢刊六）関西大学出版部　全四四〇頁（一～一八頁）二〇一六年二月

（論文）

●「『無師初學英文字』――清末南北官音差異的一斑」『東アジア文化交渉研究』第八号（査読有）
二五～三三頁　二〇一五年三月

（研究発表、講演等）

●「東亞文獻資料的電子化的現狀和未來」東亞文學觀念史與數位人文 Digital Humanities and East Asia Literature Research　二〇一五年十二月二日　台湾大学（文化交渉学研究拠点経費）

●「域外漢語研究的有効性」（基調講演）第七回世界漢語教育史国際シンポジウム　二〇一五年十一月七日　厦門大学

●「CSACにおける東アジア文献のアーカイブスの現状と将来」（国際学会発表）CSAC第二回国際シンポジウム「東アジア文献資料アーカイブスの現状と国際ネットワーク」二〇一五年

十月二十四日　関西大学

●「關於近代中國人編《英華字典》的譜系――以商務印書館的一系列為主」（国際学会発表）「英華字典與近代中國」學術研討會　二〇一五年八月二十四日　台湾中央研究院近代史研究所

●「Computerization, Informatization, and Information Technology in Japanese Library and its future」（基調講演）　ＬＩＳ（図書館の電子化国際会議）2015　二〇一五年八月二十三日　大阪国際交流センター

●「東アジア文献アーカイブスの現状と未来」（基調講演）　公開シンポジウム「日本語の歴史的典籍データベースが切り拓く研究の未来」（国文学研究資料館主催、日本学術会議）　二〇一五年七月二十五日

●「周縁資料による中国言語学研究の過去・現在・未来――文化交渉学の視点から」（国際学会発表）　ＩＣＩＳ国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」　二〇一五年七月十八日　関西大学

●「文化交渉学と言語研究」（基調講演）　日本近代語研究会平成二十七年春季研究発表大会　二〇一五年五月二十二日　甲南大学

●「關西大學亞洲文化研究中心的數據庫的現狀」（国際学会発表）　ＣＳＡＣ国際研究集会「文化交渉学とデジタル時代の人文学」　二〇一五年三月二十八日

●「文化交渉学と言語接触研究――周縁からのアプローチ」（基調講演）　第四八回ことば研究会（電子情報通信学会）　二〇一五年二月二十七日　京都光華女子大学

（調査、資料収集など）

●北京外国語大学（中国）　二〇一六年三月十一日～十五日（文化交渉学研究拠点経費）

●世界漢語教育史研究学会（中国・厦門大学）　二〇一五年十一月五日～十一月十日

●ＩＱＮ国際会議（ドイツ・エアランゲン大学）　二〇一五年十月十五日～十月二十日

●日中意院生フォーラム及びバチカン図書館との協議（ローマ）　二〇一五年九月十三日～九月二十二日

●国際シンポジウム参加（台湾・中央研究院）　二〇一五年八月二十三日～八月二十六日

●中国語検定試験実施のため（北京・北京外国語大学）　二〇一五年六月二十六日～六月二十九日

●バチカン図書館館長等との会談（北京・北京外国語大学）　二〇一五年四月二十七日～四月二十九日

●東北大学（瀋陽）での講演および北京外国語大学での日中韓院生フォーラム（中国・瀋陽と北京）　二〇一五年三月八日～三月十五日

乾　善彦　研究員

（論文）

●「テキストとしての廣瀬本万葉集」『高岡市万葉歴史館叢書　古写本の魅力』（査読無）（高岡市万葉歴史館）　一～二一頁　二〇一六年三月

●「画咄作品群の資料性――「文字と絵」の研究にむけて――」『国語語彙史の研究』（査読有）三五集（和泉書院）　一二七～一四三頁　二〇一六年三月

（研究発表、講演等）

●「大津皇子の物語」　関西大学飛鳥史学文学講座　二〇一五年十一月八日　明日香村公民館

●「もしも漢字だけだったら」　信州萬葉教室　二〇一五年十月十六日　信州大学付属長野中学校

●「『日本霊異記』から『三宝絵』へ」　奈良女子大学古代学学術研究センター第十一回若手研究者支援プログラム　二〇一五年八月二十三日　奈良県立万葉文化館

●「古写本の魅力」　二〇一五年高岡万葉セミナー　二〇一五年八月一日　高岡市万葉歴史館

●「「和漢混淆文」ということ」　大阪市立大学国語国文学会　二〇一五年七月二十五日　大阪市立大学学術交流センター

●「漢文訓読という言語接触」　ＩＣＩＳ国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」　二〇一五年七月十九日　関西大学

（その他）

●「『小野篁歌字尽』とその周辺」『関西大学アジア文化研究センターディスカッションペーパー』Vol. 11　二八～三八頁（一一）　二〇一五年八月

●「飛鳥むかしむかし　八五回～八八回　日本語表記のはじまり編」（新聞記事）　朝日新聞　朝刊（奈良版）　二〇一五年五月二十九日・六月五日・六月十二日・六月十九日

●「関西大学蔵契沖関係書あれこれ」『関西大学アジア文化研究センターディスカッションペーパー』Vol. 10　二五～三三頁（九）　二〇一五年三月

奥村佳代子　研究員

（著書）

●『東アジア言語接触の研究』（沈　国威・内田慶市編著）（関西大学東西学術研究所研究叢刊五一・文化交渉と言語接触研究・資料叢刊六）分担執筆　関西大学出版部　全四四〇頁（三〇一～三一九頁）　二〇一六年二月

（論文）

●「十八世紀長崎における口頭中国語――「初進館の内容に基づく『譯家必備』再考」『東アジア文化研究』第九号（査読有）三七頁～四六頁　二〇一六年三月

●「大田南畝旧蔵「訳阿州孝子文」について」『関西大学中国文学会紀要』第三七号（査読無）三七頁～五六頁　二〇一六年三月

●「朝鮮問答記録包含的漢語資料価値」『廈門大学国際漢語学報』（査読有）第六巻第一輯　七六～九三頁　二〇一五年

●「『海外奇談』の語句の来歴と翻訳者」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　二九～四二頁　二〇一五年四月

（研究発表、講演等）

●「東亜非漢語圏的語言記録――以十九世紀朝鮮半島的問答記録為主――」（研究発表）　第七回世界漢語教育史学会　二〇一五年十一月　廈門大学

●「唐通事の白話文――日本語作品の翻訳を中心に――」「黄檗宗と十七世紀の東亜文化交流」国際シンポジウム　二〇一五年十月　台湾大学

●「近世日本人による白話文――創作白話文の題材と語彙語法」　中国近世語学会二〇一五年度研究総会（関西大学東西学術研究所との共催）　二〇一五年六月　関西大学

●「東亜非漢語圏的交流方式和語言記録――以朝鮮半島漂流史料為主要調査対象――」　東アジア文化交渉学会第七回年次大会　二〇一五年五月　神奈川県開成町

沈　国威　研究員

（著書）

●『東アジア言語接触の研究』（内田慶市氏との共編著）（関西大学東西学術研究所研究叢刊五一・文化交渉と言語接触研究・資料叢刊六）　関西大学出版部　全四四〇頁（一九～四〇頁）　二〇一六年二月

●『厳復與科学』（単著）　私家版、関中研　二一二頁　二〇一五年四月一日

（論文）

●「漢字の意味とその獲得」『関西大学中国文学会紀要』（査読無）第三七号　一五～三六頁　二〇一六年三月

●「『中日近代新詞詞源詞典』の編纂について」『或問』（査読無）第二八号　二二五～二四二頁　二〇一五年十二月

●「十九～二十世紀之交的翻訳與漢語：以厳復為説」『合璧西中――慶祝顧彬教授七十寿辰文集』（査読無）　二九四～三一一頁　二〇一五年十二月

●「厳復科学思想的淵源：従培根到穆勒」『思想與方法』（方維規主編）（査読無）　北京大学出版社　二四五～二九〇頁　二〇一五年十月

●「連載：中国語語彙学習の話し（一）語彙力と語彙サイズ　（二）字から詞へ　（三）単語の長さ」『中国語の輪』（査読無）第九九号　一二～一三頁　二〇一五年三月　一〇〇号　一二～一三頁　二〇一五年六月　一〇一号　一二～一三頁　二〇一五年九月

（研究発表、講演等）

●「厳復『天演論』中的科学思想與培根」（講演）　二〇一六年三月二十八日　復旦大学

●「二十世紀初的新名詞和新国語」（講演）　二〇一六年三月二十五日　南京大学

●「厳復『天演論』中的科学思想與培根」（講演）　二〇一六年三月十日　北京師範大学

●「漢外詞彙教学新思索：字本位・詞本位之争的終結」（講演）　二〇一五年十二月二十一日　澳門科技大学

●「厳復科學思想的淵源――以《天演論》為中心的討論」（研究発表）　国際シンポジウム：中国翻訳史進程中的訳者　二〇一五年十二月十九日　香港中文大学

●「近代新詞與漢語的双音節化演進」（基調講演）　世界漢語教育史学会　二〇一五年十一月一日　厦門大学

●「近代英華辞典環流：従羅存德、井上哲次郎到謝洪賚」（研究発表）　国際シンポジウム：英華字典與近代中国　二〇一五年八月二十四日　台湾中央研究院近代史研究所

●「漢語詞彙体系的特点與漢外詞彙教学」（講演）　二〇一五年八月七日　マレーシア大学

●「近代訳語はどう創られたのか？」（研究発表）　ＩＣＩＳ国際シンポジウム：文化交渉学のパースペクティブ　二〇一五年七月十八日　関西大学

●「十九～二十世紀之交的翻訳與漢語」（講演）　閲読中国翻訳史（第四回中国翻訳史研究夏期セミナー）　二〇一五年七月二日　湖南科技大学

●「厳復科学概念的変化」（研究発表）　アジア学会（ＡＡＳ）　二〇一五年六月二十一日　台湾中央研究院

●「近代思想史と語彙史の間：「楽観・悲観」を例に」（研究発表）　国際シンポジウム：東アジアにおける漢字漢語の創出と共有　二〇一五年三

月二十一日　早稲田大学

（調査、資料収集など）

●北京外国語大学（中国）　二〇一六年三月十一日～十五日（文化交渉学研究拠点経費）

●バチカン図書館（ローマ）　二〇一五年九月十三日～二十日

木津祐子　委嘱研究員

（論文）

●「琉球通事的正統與長崎通事的忠誠ー从两地「通事書」的差別談起」《翻譯與跨文化流動：知識建構、文本與文體的傳播》Translation and Transcultural Movement: Knowledge Construction and the Transmission of Texts and Literary Style（査読無）（臺北：中央研究院中國文哲所）三三九頁～三六九頁　二〇一五年十月

（研究発表、講演等）

●「クレオール文学の担い手としての唐通事――（一）長崎諸寺をどう語るか――」（研究発表）台湾大学文学院日本研究中心・中央研究院合同国際学術研討会「黄檗宗と十七世紀の東亜文化交流」　二〇一五年十月二日～三日　台湾大学文学院

●「十八世紀域外的「叙事」――以唐通事和荻生徂徠為例」（研究発表）　中央研究院中国文哲研究所・東京大学東洋文化研究所合同国際シンポジウム「世界の中の中国明末清初」　二〇一五年五月三十日～三十一日　東京大学伊藤国際学術研究センター

●「非漢語圏における中国白話文（Chinese Vernacular Writing in Non-Chinese-Speaking Regions）」（講演）　第六〇回国際東方学者会議関西部会（東方学会主催）　二〇一五年五月二十三日　京都市国際交流会館

陳　力衛　委嘱研究員

（著書）

●『東アジア言語接触の研究』（沈　国威・内田慶市編著）（関西大学東西学術研究所研究叢刊五一・文化交渉と言語接触研究・資料叢刊六）分担執筆　関西大学出版部　全四四〇頁（三六九～三九五頁）　二〇一六年二月

（論文）

●「近代東アジアの言語交渉による漢語の意味変化」『言語事実と観点』（韓国延世大学言語情報研究所）（査読有）第三六輯　七～二四頁　二〇一五年十二月

●「「優勝劣敗，適者生存」――進化論の中国流布に寄与する日本漢語」　成城大学『経済研究』（査読無）二一〇号　二四七～二七一頁　二〇一五年十二月

●「W・H・メドハースト『英和和英語彙』」『悠久』（おうふう）第一四三号　（査読有）五四～六八頁　二〇一五年十一月

（研究発表、講演等）

●「日本語「気管支炎」から中国語「支気管炎」へ」（研究発表）　二〇一六年度国際シンポジウム：「東アジア言語の接触研究」　二〇一六年三月二十六日　上海東華大学外国語学院

●「《文學興國策》的譯者是誰？――從顏永京到林樂知」（研究発表）　中國翻譯史進程中的譯者：第一屆中國翻譯史國際研討會　二〇一五年十二月十九日　香港中文大学

●「近代における日中語彙交流のサイクル」（特別講演）　国際基督教大学・アジアンフォーラム二〇一五年九月十六日　国際基督教大学

●「ジャカルタで編集された『英和和英語彙』（一八三〇）」（特別講演）　二〇一五年九月五日　Universitas Airlangga（インドネシア）

●「「金字塔」在東亜的流傳及其運用」（研究発表）「英華字典與近代中国」学術研討会　二〇一五年八月二十四日　台湾中央研究院近代史研究所

●「厳復的譯詞與日本的譯詞」（研究発表）「近代中日関係的多重面向（一八五〇～一九四九）」国際学術研討会　二〇一五年八月十九日　台湾中央研究院近代史研究所

●「近代東アジアの語彙交渉によってもたらされた諸問題」（特別講演）「人文言語学、〈近代〉の語彙と文法を再び問い直す」国際シンポジウム　二〇一五年八月六日　韓国延世大学

●「宣教師の辞書編集」（研究発表）「キリシタン文学の継承：宣教師の日本語文学」日本語の歴史的典籍国際研究集会　二〇一五年八月一日　国文学研究資料館

●「外国人の見た近代日本語」（特別講演）　二〇一五年七月十一日　東京都立大学国語国文学会

●「和製漢語の中国語への流布」（特別講演）　二〇一五年六月二日　早稲田大学社会学部

（その他）

●「外来語のふるさとを探してみよう」『図書館教育ニュース』（監修）　二〇一六年三月八日

●パネルディスカッション「国際ワークショップ東アジアにおける叙述と歴史」京都大学学際融合教育研究推進センター主催　二〇一六年二月十三日　京都大学人文科学研究所

●コメンテーター　ICIS国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」文化交渉学と言語接触研究　二〇一五年七月十九日　関西大学

●書評「佐藤亨『現代に生きる日本語漢語の成立と展開――共有と創生』」『日本語の研究』第一一巻二号　一四七～一五三頁　二〇一五年四月

松田　清　客員研究員

（論文）

●「山本読書室諸国門人居処并便所認の紹介と分析」（遠藤正治・益満まをとの共著）『近世京都』（査読有）（近世京都学会）第二号　一〇一～一九一頁　二〇一六年三月三十一日

●「わが国最古級の蚕書　武富咸亮著『蚕母要覧』について」（榎本祐嗣・前澤健との共著）『近世京都』（査読有）（近世京都学会）第二号　三九～九一頁　二〇一六年三月三十一日

●「藤塚知明旧蔵の西洋奇図について（下）」『仙台市博物館調査研究報告』（査読無）三六号　四三～六六頁　二〇一六年三月三十一日

●「四高旧蔵ヘルツェル掛図について」『金沢大学資料館紀要』（査読有）第一一号　六五～六九頁　二〇一六年三月三十一日

●「シーボルト編『日本植物目録』改訂稿について（上）」（遠藤正治・加藤僖重・鳥井裕美子との共著）『鳴滝紀要』（査読無）第二六号　一～二〇頁　二〇一六年三月二十五日

●「シーボルト編／伊藤圭介・賀来佐之録「日本植物目録」について」（遠藤正治・鳥井裕美子との共著）『神田外語大学日本研究所紀要』（査読無）第八号　三一～八七頁　二〇一六年三月十五日

（研究発表、講演等）

●「山本読書室資料『諸国門人居処并飛脚便所認』について」（遠藤正治との共同発表）　近世京都学会、第四回研究発表会　二〇一五年七月五日　京都橘大学・明優館D二〇二教室

●「儒医山本亡羊とオジギソウ――本草博物学から文理融合を考える――」　第二四回けいはんな「ゲーテの会」　二〇一五年七月二日　公益財団法人国際高等研究所

（調査、資料収集など）

●国立国会図書館　二〇一六年三月三十一日

●大分県竹田市教育委員会　二〇一六年三月二十三日

●熊本市西区、雲巌禅寺、蓮台寺　二〇一六年三月二十二日

●佐賀県立図書館　二〇一六日三月二十一日

●葛城市歴史博物館　二〇一六年三月二十日

●奈良県葛城市磐城小学校・葛城市歴史博物館　二〇一六年三月三日

●岐阜県羽島市竹鼻町、大仏寺　二〇一六年二月二十六日

●神田外語大学附属図書館洋学文庫　二〇一六年二月十三日

●鈴鹿市大黒屋光太夫記念館　二〇一五年十二月六日

●松浦史料博物館　二〇一五年十二月二日

●神田外語大学附属図書館洋学文庫　二〇一五年十月二十日～二十二日

●松浦史料博物館　二〇一五年九月二十六日

●長崎市シーボルト記念館　二〇一五年八月六日

●佐賀県立図書館　二〇一五年七月三十一日

●神田外語大学附属図書館洋学文庫　二〇一五年六月十日

●横浜国立大学学術情報センター　二〇一五年五月二十五日

●兵庫県加西市、大日寺、鎌倉寺、普光寺　二〇一五年四月二十一日

●三重県多気郡相可町、西村広休旧宅跡　二〇一五年四月四日

（その他）

●「京の学塾　山本読書室の世界」『京都新聞』（朝刊）　二〇一五年四月一日～二〇一六年三月三十一日　コラム全三五六回連載

●シーボルト編日本植物目録および新発見シーボルト自筆書簡に関する解説　二〇一六年二月十七日　NHKテレビ「おはよう日本」報道

稲垣智恵　非常勤研究員

（論文）

●「新興語法としての〝着〟について」『関西大学中国文学会紀要』（査読無）（関西大学中国文学会）第三七号　二一七頁～二四〇頁　二〇一六年三月

（研究発表、講演等）

●「新興語法としての〝着〟――十九世紀以前の用法と比較して」　二〇一五年度近世語学会研究集会　二〇一五年十二月十二日　愛知大学

伊伏啓子　非常勤研究員

（論文）

●「来華宣教師クロフォード（T. P. Crawford. 1821-1902）の中国語著作について」『関西大学中国文学会紀要』（査読無）三七号　一七三～一八七頁　二〇一六年三月

（研究発表、講演等）

●「早期西洋人中国語文法書に見られる受動態について」（研究発表）　日本中国語学会第六十五回全国大会　二〇一五年十月三十一日～十一月一日　東京大学

●"How the IQN program has impacted my

career as a university educator”（スピーチ）Success Stories, Past, Present, and Future: The Erlangen IQN and its Perspectives　二〇一五年十月十六日～十八日　Friedrich-Alexander-Universität Erlangen-Nürnberg（ドイツ）

●「近代西方漢語教材裡的被動語態」（研究発表）東アジア文化交渉学会第七回国際学術大会　二〇一五年五月九日～十日　神奈川県開成町

（調査、資料収集など）

●SOAS図書館（イギリス）・ライデン大学図書館（オランダ）調査　二〇一六年三月十三日～二十日

●バーゼル伝道会古文書館（スイス）調査　二〇一五年九月十日～十二日

王　暁雨　非常勤研究員

（論文）

●「近代日中における翻訳事業と思想受容――「自由」を実例として」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　一七一～一八五頁　二〇一五年四月

田中巳榮子　非常勤研究員

（論文）

●「近世初期俳諧における音象徴語」　関西大学『国文学』（査読有）一〇〇号　三五五頁～三七九頁　二〇一六年三月

●「近世初期俳諧『紅梅千句』に見える「ふためく」について」『国語語彙史の研究』（査読有）（国語語彙史研究会編、和泉書院）三四号　一四四～一六六頁　二〇一五年三月

近世近代日中文化交渉（日中移動伝播）研究班

井上克人　研究員

（著書）

●『比較思想から見た日本仏教』（共著：二十八名　末木文美士編）　山喜房佛書林　五四七頁（八一～一〇七頁）　二〇一五年十二月

（論文）

●「明治哲学界――有机体哲学及其系譜」（生李並・訳）『日本哲学与思想研究文集〔卞崇道先生記念号輯〕』（主編：王青）（中国社会科学出版社）二〇一～二一〇頁　二〇一五年二月

（研究発表、講演等）

●「宗教から世界を知ろう」　関西大学提携講座二〇一五年度〔秋のリレー講座〕（スタッフ：井上克人・小田淑子・宮本要太郎・酒井真道）　二〇一五年十月～二〇一六年三月全六回（二〇一六年二月二十七日担当）　毎日文化センター

●「知っておきたい日本の思想」　二〇一五年度〔秋の講座〕　二〇一五年十月～二〇一六年三月全六回　毎日文化センター

●「人間――この問われるべきもの」（講演）　主催：土井道子記念京都哲学基金　二〇一五年九月二日　京都ガーデンパレス

●「近代日本における西洋哲学の受容と展開」（講演）　比較思想学会第四二回大会　二〇一五年六月十三日　東洋大学

●「西田哲学を読み解く六つのキーワード」　日独文化研究所「哲学講座」　第一回二〇一五年五月三十一日、第二回六月二十八日、第三回七月十二日　京都教育文化センター

●「武士道の精神」　二〇一五年度〔春の講座〕二〇一五年四月～二〇一五年九月全六回　毎日文化センター

陶　徳民　研究員

（著書）

●『吉田松陰と佐久間象山――開国初期の海外事情探索者たち（I）（関西大学東西学術研究所資料集刊三十九）』（単著）　関西大学出版部　二七六頁　二〇一六年三月

●『テーマで読み解く中国の文化』（湯浅邦弘編著）（「第十四章　東西文化交流」執筆）　ミネルヴァ書房　三五七～三七八頁　二〇一六年三月

●『内藤湖南：政治と漢学』（J. A. Fogel原著の中国語訳・共訳）　南京：江蘇人民出版社　三六三頁　二〇一六年一月

●“*Trans-Pacific Relations in the Late 19th and Early 20th Centuries: Cultural, Commerce, and Religion*”（共編著）.　三三三頁　Society for Cultural Interaction for Eats Asia, December 2015.

（論文）

●「鯨油時代の砲艦外交と人道主義――下田密航をめぐる松陰の懇願とペリーのジレンマ」『異文化研究』（山口大学人文学部）第一〇号　六九～七八頁　二〇一六年三月

●「三島中洲における漢洋折衷のバランス感覚――松陰・安繹・榮一との比較――」『日本漢文学研究』（二松学舎大学）第一一号　一六三～一七四頁　二〇一六年三月

（研究発表、講演等）

●「日本近世の教育」　第四回教育遺産世界遺産登録推進国際シンポジウム記念講演　二〇一六年二月二十一日　岡山県青少年教育センター閑谷学校

●「承先賢之風雅、續藝文之系譜――二〇一三年關西大學京都蘭亭會百年紀念行事紀實」　香港大學饒宗頤教授百歳華誕國際學術研討會　二〇一五年十二月七日　香港大学（文化交渉学研究拠点経費）

●「羅森、衛三畏與吉田松陰及平山謙二郎――十九世紀中葉的港澳與日本開國」　香港城市大学中文及歴史系「思考亞洲一體化」シリーズ講座　二〇一五年十一月三十日　香港城市大学

●「藤澤南岳と大正癸丑の蘭亭会」　大阪府公開講座フェスタ二〇一五　二〇一五年十一月十一日　大阪府新別館南館大研修室

●「幕末明治の「アメリカ」受容――リンカーン大統領の場合――」　日本思想史学会二〇一五年度大会パネル発表　二〇一五年十月十八日　早稲田大学

●「洞察史料　點石成金――關於一八五四年黒船訪日期間人道主義訴求的互動」　二〇一五年中文數字出版與數字圖書館國際研討會　二〇一五年六月十七日　西安

●「鯨油時代の砲艦外交と人道主義――下田密航をめぐる松陰の懇願とペリーの介入」　山口大学人文学部異文化交流研究施設第二九回講演会　二〇一五年六月九日　山口大学

●「三島中洲における漢洋折衷のバランス感覚――松陰・安繹・榮一との比較――」　二松学舎大学資料展示室講演会（企画展「三島中洲と近代」其三）　二〇一五年五月三十日　二松学舎大学

（その他）

●コメンテータ　連続セミナー「だから、〝日中韓〟――絆の再発見」第七回「聖徳太子の平和外交に学ぶ」　二〇一六年三月十日　東京・国際文化会館

●司会兼コメンテータ　東アジア文化交渉学会パネル「東アジアおける文化交渉と自己認識」　二〇一五年五月九日　神奈川県開成町

●関西大学国際交流委員会委員　北京語言大学文学院長銭婉約教授を東西学術研究所招聘研究員として受け入れた　二〇一五年十月一日～十一月三十日

社会活動

●東アジア文化交渉学会理事

●東アジア文化交渉学会年刊（英語）主編

●中国社会文化学会評議員

中谷伸生　研究員

（著書）

●『日本と台湾の日本学――美術・思想・歴史――』（徐興慶との編著）　尚昂文化事業國際有限公司　二〇一六年一月

（論文）

●「林閬苑研究――大坂画壇の奇矯の絵師――」『東アジア文化交渉学研究』（査読有）第九号　一七頁～三五頁　二〇一六年三月三十一日

●「淀川図巻と平家物語絵巻のデジタル化――美術館・博物館の状況を含めての考察――」『関西大学博物館紀要』（査読無）（関西大学博物館）第二十二号　一二頁～二七頁　二〇一六年三月三十一日

●「東アジア美術交渉論の構想――グローバリズムに即した方法論と日本美術史研究」『美術フォーラム21』（査読有）（美術フォーラム21刊行会）第三十二号　一一〇～一一九頁　二〇一五年十一月三〇日

●「文化交渉から見る日本と台湾の膠彩画（日本画）」『南島史学』（査読有）（南島史学会）第八十三号　一～一四頁　二〇一五年十一月三〇日

●「耳鳥齋アーカイヴズ――新資料十件をめぐって――」『アジア文化研究センター・ディスカッションペーパー』（査読無）（関西大学アジア文化研究センター）巻一一　三～二七頁　二〇一五年八月三十一日

●「耳鳥齋の版本挿絵における作風展開」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　一～二九頁　二〇一五年四月

（研究発表、講演等）

●「大岡春卜《淀川絵巻》――堺から道頓堀までの風景と大坂画壇の画家たち――」　さかい利晶の杜講演会　二〇一六年三月五日　さかい利晶の杜

●「北野恒富の絵画表現とその評価」　大阪商業大学連続講座「北野恒富と中河内」　二〇一五年十一月六日　大阪商業大学

●「淀川図巻と平家物語絵巻のデジタル化」　CSAC第二回国際シンポジウム「東アジア文献資料アーカイブスの現状と国際ネットワーク」　二〇一五年十月二十五日　関西大学

●「十八世紀・十九世紀的日本《澱川圖》――日本與中國的往来――」　國立臺灣海洋大學人文社會科學院成立十週年慶祝大會　二〇一五年十月十六日　國立臺灣海洋大學海洋文化研究所（文化交渉学研究拠点経費）

●「木村蒹葭堂の文人趣味と文化交渉」　ICIS国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」　二〇一五年七月十八日　関西大学

●「耳鳥齋と大坂の戯画――漫画の源流――」　頴川美術館第三十九回文化講座　二〇一五年六月二十一日　頴川美術館

●「近世の大坂画壇」　NHK文化センター（京都）

美術品から江戸を視る　二〇一五年六月十二日　NHK文化センター（京都）

●「文化交渉から見る日本と台湾の膠彩画（日本画）」　南島史学会第四十四回全国大会　二〇一五年五月三十日　台湾国立大学（文化交渉学研究拠点経費）

（調査、資料収集など）

●北京外国語大学（中国）　二〇一六年三月十一日～十五日（文化交渉学研究拠点経費）

●パリ・カルナヴァレ博物館（フランス）　二〇一五年十一月十一日～十五日（文化交渉学研究拠点経費）

●チューリッヒ大学（スイス）　二〇一五年十一月七日～十日（文化交渉学研究拠点経費）

●基隆・淡水（台湾）　二〇一五年十月十五日～十八日

（資料紹介等）

●「大岡春卜《浪花及澱川沿岸名勝図巻》と《平家物語絵巻》のデジタル化について」『アジア文化研究センター・ディスカッションペーパー』（関西大学アジア文化研究センター）巻十二　二〇一六年三月三十一日

●「瀧梅岡真理子に見る現代の雅」『瀧梅岡真理子展』　二〇一六年三月二十三日　ギャラリー砂翁（東京）

●「序文」（陶徳民編著『吉田松陰と佐久間象山――開国初期の海外事情探索者たち（Ⅰ）――』関西大学出版部）　二〇一六年二月

●「序文」（吾妻重二編著『家礼文献集成　日本篇六』　関西大学出版部）　二〇一五年十二月

●「序文」（沈　国威・内田慶市編著『東アジア言語接触の研究』　関西大学出版部）　二〇一五年十二月

●「序文」（吾妻重二編著『家礼文献集成　日本篇五』　関西大学出版部）　二〇一五年十一月

●「グローバリズムの方法論と日本美術史研究――一国主義と受容研究を越えて――」『美術フォーラム21』（美術フォーラム21刊行会）第三十二号　二六～二八頁　二〇一五年十一月三〇日

●「大正癸丑蘭亭会一〇〇周年記念展覧会余滴――王羲之から喜田華堂へ――」『阡陵』（関西大学博物館）第七一号　三～四頁　二〇一五年九月三〇日

●「序文」（松浦章編著『日本台湾統治時代のジャンク型帆船資料　中国式帆船のアーカイヴズ』関西大学出版部）　二〇一五年九月

●「琳派・やまと絵の広がり」『生活美術としての琳派』（一般社団法人美術フォーラム21）三～四頁　二〇一五年七月十二日

（シンポジウム司会）

●「生活美術としての琳派」総合司会　一般社団法人美術フォーラム21　二〇一五年七月十二日　京都国立近代美術館

●「第七回EUワークショップ研究交流会」司会　二〇一五年十一月十日　チューリッヒ大学（スイス）（文化交渉学研究拠点経費）

藤田高夫　研究員

（論文）

●「漢代における軍費推算の資料と方法――軍事費の定量的把握のための覚書」『東アジア文化交渉研究』（査読有）第九号　三二一～三三三頁　二〇一六年三月

●「「漢学」と「中国学」――日本における近代中国史学形成の一側面」『日本対中国文化的摂取与創新』（浙江工商大学東亜研究院）　二〇一六年）

（研究発表、講演等）

●「韓国歴史教科書《東アジアの歴史》を読む」（招待講演）　One Asia Project　二〇一五年十一月十三日　韓国・慶尚大学校

●「〝漢学〟与〝中国学〟――日本中国近代史形成的一个側面」二〇一五年十一月七日　中国・浙江工商大学東亜研究院（文化交渉学研究拠点経費）

●「林泰輔の中国上代研究――伝統漢学から近代中国学への展開」（研究発表）　ICIS国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」二〇一五年七月十八日　関西大学

（調査、資料収集など）

●浄水寺古碑・装飾古墳群調査（熊本県）　二〇一六年三月五日～六日

●那須国造碑・上野三碑調査（栃木県・群馬県）　二〇一五年三月一日～二日

松浦　章　研究員

（著書）

●『海上の道」の汽船航路――沖縄航路案内を読む――』（単著）　榕樹書林　一五七頁　二〇一六年二月

●『日本台湾統治時代のジャンク型帆船資料　中国式帆船のアーカイヴズ』（単著）（関西大学東西学術研究所資料集刊三十八）　関西大学出版部　三五八頁　二〇一五年十月

●『北太平洋航路案内のアーカイヴズ――船舶データベースの一端――』（単著）　関西大学アジア文化研究センター　三二八頁　二〇一五年六月

●『近代東亜海域交流：航運・商業・人物』（編著）（関西大学東亜海域交流史研究叢刊第八輯）（中

国語）台北・博揚文化事業有限公司　四二〇頁　関西大学アジア文化研究センター　三二八頁　二〇一五年六月

（論文）

●「一九三〇年代日本郵船会社の『上海航路案内』」『東アジア文化交渉研究』（査読有）第九号　三三五～三四六頁　二〇一六年三月

●「東洋汽船のサンフランシスコ航路」『関西大学アジア研究センターディスカッションペーパー』（査読無）Vol. 12　四一～六〇頁　二〇一六年二月

●「日清汽船会社のアーカイヴズ」『関西大学アジア文化研究センターディスカッションペーパー』（査読無）Vol. 12　二七～三九頁　二〇一六年二月

●「アーカイヴスとしての航路案内」『関西大学アジア研究センターディスカッションペーパー』（査読無）Vol. 12　三～二五頁　二〇一六年二月

●"The Trade in Dried Marine Products from Nagasaki to China during the Edo Period", Keiko Nagase-Reimer ed. Copper in the Early Modern Sino-Japanese Trade,（査読有）(Leiden: Brill), pp.118-156, 2016

●"The Import of Chinese Sugar in the Nagasaki Junk Trade", Keiko Nagase-Reimer ed. Copper in the Early Modern Sino-Japanese Trade,（査読有）(Leiden: Brill).pp.157-174, 2015.

●"Imports and Exports of Books by Chinese Junks in the Edo Period", Keiko Nagase-Reimer ed. Copper in the Early Modern Sino-Japanese Trade,（査読有）(Leiden: Brill) .pp.175-195, 2015.

●"Maritime Rescue and Salvage in Early Modern East Asia", Martin Collcutt & De-min Tao ed. Trans-Pacific Relations: In the Late 19th and Early 20th Centuries: Culture, Commerce, and Religion,（査読有）(Kansai University), pp.201-218, 2015.

●「十九世紀末北美的輪船公司與北太平洋航路――從上海到北美洲」上海中国航海博物館編『絲路的延伸：亞洲海洋歴史與文化』（査読有）（中西書局）七一～一〇〇頁　二〇一五年十二月

●「嶋谷汽船会社と日本海定期航路」『或問』（査読有）第二八号　一～一四頁　二〇一五年十二月

●「清代沿海釣船的航運活動」『国家航海』（査読有）（上海古籍出版社）第一三輯　六七～七七頁　二〇一五年十一月

●「日本郵船会社の台湾航路案内」『南島史学』（査読有）第八三号　五四～六六頁　二〇一五年十一月

●「淺野回漕店から東洋汽船会社へ」『関西大学文学論集』（査読有）第六五巻第二号　一九～五四頁　二〇一五年十月

●「南洋郵船会社の航路案内」『或問』（査読有）第二七号　一～二〇頁　二〇一五年七月

●「十八～十九世紀におけるMacao（澳門）の海外貿易船」『関西大学文学論集』（査読有）第六五巻第一号　二五～五〇頁　二〇一五年七月

●「一九〇六年至一九三九年間日本阿波國共同汽船會社的中國東北沿海航運」『海洋文化學刊』（査読有）（台湾・基隆・國立臺灣海洋大学海洋文化研究所）第一八期　一～三二頁　二〇一五年六月

●「二十世紀三〇年代日本郵船公司発行之《上海航線指南》」尤飛君、袁曉春、尤澤峰編『行舟致遠：揚帆海上絲綢之路』（査読有）（黄海数字出版社）二一～三二頁　二〇一五年六月

●「清代帆船による東アジア・東南アジア海域への人的移動と物流」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　四三～五七頁　二〇一五年四月

（研究発表、講演等）

●北京外国語大学（中国）二〇一六年三月十一日～十五日（文化交渉学研究拠点経費）

●「東洋汽船のサンフランシスコ航路」アジア文化研究センター第三七回研究例会　二〇一五年十二月二十五日　関西大学

●「晚清中日间轮船航运与东亚交流」（大会報告）第三屆環東海論壇暨〝一帶一路〟建設與東亞海洋共同體構建研討會　二〇一五年十二月十九日（十九～二十日）中国・浙江金華・浙江師範大学（文化交渉学研究拠点経費）

●「中日文化交流の研究方法」（学術講座）二〇一五年十二月十七日　中国・杭州・浙江工商大学日本語言文化学院

●「日清汽船会社のアーカイヴズ」アジア文化研究センター第三六回研究例会　二〇一五年十二月十一日　関西大学

●「アーカイヴスとしての航路案内」アジア文化研究センター第三六回研究例会　二〇一五年十二月十一日関西大学

●「輪船時代的海上絲綢之路」二〇一五年北京論壇歴史學分論壇　二〇一五年十一月七日（六～八日）中国・北京大学

●「中日文化交流研究之方法」（学術報告）二〇一五年十一月四日　中国・北京・中央財経大学文化伝播學院（文化交渉学研究拠点経費）

●「江戸時代に舶載された『唐詩選』とその流布」海洋人文研究青年論壇　二〇一五年十月十六日　台湾・基隆・國立臺灣海洋大学人文學院海洋文化研究所（文化交渉学研究拠点経費）

●「十六世紀中葉から十七世紀初頭の東アジア海域の海上貿易と海商・海賊」〝海上貿易と海商・海賊〟国際シンポジウム　二〇一五年九月二十六日　東京・世界史研究所（渋谷）

●「一九〇〇年代日本轮船公司的上海・天津・青島航线指南」第二二届国際歴史科学大会：青島衛星会議――青島的城市化与国際化　二〇一五年八月二十四日（二十四～二十五日）　中国・青島・黄海飯店

●「阿波國共同汽船会社と山東・遼東沿海航運」（学術報告）　二〇一五年八月二十四日　中国海洋大学

●「十九世紀末北美的輪船公司與北太平洋航路――従上海到北美洲」（大会報告）〝絲路的延伸：亞洲海洋歷史与文化〟国際学術研討会　二〇一五年八月二十日（二十～二十一日）　中国・上海中国航海博物館

●「二十世紀三〇年代日本郵船公司発行之《上海航線指南》」二〇一五年中国航海日行舟致遠国際海航論壇　二〇一五年七月十～十一日　中国・寧波・寧波香格里拉大酒店（文化交渉学研究拠点経費）

●「中國沿海港市與日本郵船会社的定期航路」〝中國的沿岸城市及其近代轉型〟國際學術會議　二〇一五年六月十六日（十六～十七日）　香港・香港城市大学中文及歴史系（文化交渉学研究拠点経費）

●「日本郵船会社の台湾航路案内」（基調講演）二〇一五年度「日本學與台灣學」國際學術研討會　二〇一五年五月三十日　台湾・台中・靜宜大學日本語文學系（文化交渉学研究拠点経費）

（調査、資料収集など）

●北京外国語大学（中国）　二〇一六年三月十一日～十五日（文化交渉学研究拠点経費）

●横濱開港資料館（横浜）　二〇一六年二月九日

●北京・首都師範大学図書館への漢籍資料調査（中国）　二〇一五年十一月九日

●香港公共図書館　舊香港新聞の資料調査（香港）　二〇一五年六月十八日

●神戸市文書館『神戸又新日報』資料調査　二〇一五年六月十二日

髙橋沙希　非常勤研究員

（論文）

●「青木繁作品における宗教との関連性」（研究報告）『鹿島美術財団』（査読無）年報三二号別冊　一五四～一六四頁　二〇一五年十一月

（研究発表、講演等）

●「明治洋画界における青木繁」　ICIS国際シンポジウム　二〇一五年七月十八日　関西大学

（研究ノート）

●「青木繁の評価をめぐって」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　三八九～四〇五頁　二〇一五年四月

日並彩乃　非常勤研究員

（調査、資料収集など）

●和歌山県　二〇一六年二月二十三日～二十六日

宮嶋純子　非常勤研究員

（論文）

●「道宣『釈迦方志』にみる、唐代佛教学者の世界観」『佛教史学研究』（査読有）第五七巻第二号　六〇～八〇頁　二〇一五年三月（刊行は九月）

（研究発表、講演等）

●「唐代仏教学者の世界観――玄奘の帰還を画期として――」（研究発表）　平成二十七年度東アジア仏教研究会定例研究会　二〇一五年五月十六日　大正大学

（その他・訳注）

●『道宣著作の研究――道宣著作序文訳注稿（二）――』（平成二十四～二十七年度科学研究費補助金　基盤研究（C）「道宣著作の研究」研究成果報告書）　訳注担当箇所：「『釈迦方志』序・後序」四九～六三頁、「『釈迦氏譜』序」六四～六七頁、「『広弘明集』法義篇序」八六～九一頁、「『広弘明集』誡功篇序」一一〇～一一五頁　二〇一六年三月一日

幸　承堯　準研究員

（論文）

●「青木正児における中国文学史観に関する考察（一）」『東アジア文化交渉研究』（査読有）第九号　二〇七～二二四頁　二〇一六年三月

●「青木正児と中国新文化運動との共鳴――胡適、呉虞、魯迅との交際を中心に――」『関西大学中国文学会紀要』（査読有）第三七号　一八九～二一二頁　二〇一六年三月

●「近代日本における中国戯曲研究――青木正児とその著作を中心にして――」『東アジア文化研究科院生論集』（査読有）第五号　九五～一一二頁　二〇一五年十一月

（研究発表、講演等）

●「青木正児における中国文学史観に関する考察」第九届中日韓研究生論壇――東亜文明交流與互

鑒　二〇一六年三月十二日　北京外国語大学
●「青木正児の中国新文化運動への眼差し――胡適との交際を手がかりに――」二〇一五年度日韓伊両岸次世代フォーラム　二〇一五年十一月二十七日　関西大学
●「異色な存在：青木正児における儒教批判・道教称賛論」「近代日本的中国学」学術研討会　二〇一五年十月二十三日　香港中文大学比較日本学研究中心
●「近代日本における中国戯曲研究――青木正児とその著作を中心にして――」日本思想学会二〇一五年次大会　二〇一五年十月十八日　早稲田大学戸山キャンパス
●「青木正児とその戯曲研究について」第八回「EU日本学」国際ワークショップ　二〇一五年九月二十三日　関西大学飛鳥文化研究所

（調査、資料収集など）
●名古屋大学総合図書館・青木文庫　二〇一五年八月一日～二日

東アジア宗教儀礼研究班

原田正俊　研究員

（著書）
●『中世禅籍叢刊第三巻　達磨宗』（共著：「成等正覚論」「正法寺文書」翻刻・解題［四二五～四四二、六一一～六二〇頁］臨川書店　全六六六頁　二〇一五年七月三十一日

（研究発表、講演等）
●「中世の高野山と金剛三昧院」（講演）　二〇一五年十月二十四日　和歌山県立博物館
●「南北朝の内乱と堺」（講演）　二〇一五年九月十九日　堺市教育委員会
●「室町仏教論を考える」（講演）　仏教史学会入門講座　二〇一五年六月二十日　大谷大学
●「以心崇伝と常光寺」（講演）　二〇一五年四月二十六日　八尾市歴史民俗資料館

（その他）
●『アジアと日本をつないだ僧重源・栄西』　司会・パネルディスカッション記録集（大阪狭山市教育委員会）　九七～一二六頁　全一二六頁

吾妻重二　研究員

（著書）
●『家礼文献集成　日本篇六』（単著）（編著）（関西大学東西学術研究所資料集刊二十七～六）関西大学出版部　二〇一六年三月
●『家礼文献集成　日本篇五』（単著）（編著）（関西大学東西学術研究所資料集刊二十七～五）関西大学出版部　二〇一六年三月
●『朱子語類』訳注　巻八十七～八十八』（共著：吾妻重二・秋岡英行・白井順・橋本昭典・藤井倫明訳注）汲古書院　二〇一五年七月

（論文）
●「『家礼』の和刻本について」『東アジア文化交渉研究』（査読有）第九号　一六九頁～一九六頁　二〇一六年三月
●「藤井懶斎『二礼童覧』について――「孝」と儒教葬祭儀礼」『関西大学中国文学会紀要』（査読無）第三七号　一～二二頁　二〇一六年三月
●「文化交渉与日本私塾――兼論泊園書院」（中国語）（査読無）、呉震主編『全球化視野下的中国儒学研究』（査読無）（孔学堂書局）　二八七～三〇九頁　二〇一五年九月
●「徳川義直・尾張藩徳川家と儒教葬祭儀礼」　東アジア文化交渉学会第七回国際シンポジウム予稿集『連携の「東アジア」への責任――文化交渉学的アプローチを軸に』（上）（査読有）　二一六～二二二頁　二〇一五年五月
●「水戸藩の儒教喪祭儀礼文献について」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　三一～五二頁　二〇一五年四月

（研究発表、講演等）
●「関於藤井懶斎的《二礼童覧》――〝孝〟与儒教葬祭礼儀」（中国語）（研究発表）　東亜朱子学国際学術研討会――日韓朱子学的伝承与創新　二〇一五年十二月二十七日　中国・復旦大学光華楼西主楼哲学学院
●「朱子学と東アジア――その普遍性」（講演）One Asia財団後援「東アジアと韓国学コンテンツ」講演　二〇一五年十月三十日　韓国・慶尚大学校
●「近代学制のなかの泊園書院」（研究発表）　ICIS国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」　二〇一五年七月二十八日　関西大学
●「徳川義直・尾張藩徳川家と儒教葬祭儀礼」（研究発表）　東アジア文化交渉学会第七回国際学術大会　二〇一五年五月九日　神奈川県開成町

（調査、資料収集など）
●北京外国語大学（中国）　二〇一六年三月十一日～十五日（文化交渉学研究拠点経費）
●復旦大学（中国）　二〇一五年十二月二十五日～二十八日（文化交渉学研究拠点経費）
●慶尚大学校（韓国）　二〇一五年十月二十九日～三十一日

（その他）
●「朱子学について」（雑文）　『木鐸』（足利学校・

全国論語研究会）第六号　二～一二頁　二〇一六年二月

●「堀池信夫編『知のユーラシア』」（書評）（単著）『東方宗教』（査読有）（日本道教学会）第一二五号　六四～七三頁　二〇一五年五月

●「発刊の辞――文化交渉学の発展に向けて」（雑文）『関西大学文化交渉学ニューズレター』（関西大学文化交渉学研究拠点）vol.1　一頁　二〇一五年九月

●「大学院ニュース「東アジア文化研究科の開設と発展」」（雑文）『博修士会会報』（関西大学博修士会）二〇一五年号　五頁　二〇一五年七月

二階堂善弘　研究員

（著書）

●Asian Folk Religion and Cultural Interaction, (Translated by Jenine Heaton), V&R Unipress and National Taiwan University Press, 2015.10, p.262

（翻訳書）

●『神話から神化へ――中国民間宗教における神仏観』（劉雄峰著、二階堂善弘・二ノ宮聡訳）（関西大学東西学術研究所訳注シリーズ十八）　二一八頁　二〇一五年十二月

（論文）

●「日本禅宗寺院之宋明伽藍神」　李奭學、胡曉真主編『圖書、知識建構與文化傳播』（漢學研究中心・漢学研究中心叢刊論著類第一四種）（査読有）　二五～四四頁　二〇一五年九月

●「明代江南における伽藍神」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　五九～六八頁　二〇一五年四月

（研究発表、講演等）

●「『水滸全傳』與華光大帝信仰」「道教與文學」國際學術研討會（「道教と文学」国際シンポジウム）二〇一五年十二月九日　香港浸會大學 Hong Kong Baptist University

●「日中寺院における伽藍神の探求」　ICIS国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」　二〇一五年七月十九日　関西大学

●「禹王と中国の水神信仰（Yuwang and Chinese Water Gods Worship）」　東アジア文化交渉学会第七回国際学術大会（SCIEA the 7th Annual Meeting 2015）　二〇一五年五月九日　神奈川県開成町

（調査、資料収集など）

●「重慶・大足寺廟石刻調査」　二〇一五年十二月二十六日～二〇一六年一月三日（科学研究費・基盤研究（B））

●「ベトナム寺廟調査」　二〇一五年九月十日～九月十七日（科学研究費・基盤研究（B））

●「中国山西省寺廟調査」　二〇一五年八月十一日～八月二十二日（文化交渉学研究拠点経費）

西本昌弘　研究員

（共著書）

●「嵯峨天皇――唐風を整え、幽境に遊ぶ――」　吉川真司編『古代の人物④　平安の新京』（清文堂出版）　一〇九～一三五頁　二〇一五年十月

●「嵯峨朝における重陽宴・内宴と『文鏡秘府論』」　北山円正ほか編『日本古代の「漢」と「和」（アジア遊学）』（勉誠出版）第一八八号　七〇～八五頁　二〇一五年九月

●「平城宮第一次大極殿と長安城太極殿・洛陽城乾元殿」　舘野和己編『日本古代のみやこを探る』（勉誠出版）　一三九～一五三頁　二〇一五年六月

（論文）

●「平城宮中宮再考」『古代史の研究』（査読無）第一九号　一～二〇頁　二〇一五年十二月

●「「唐風文化」から「国風文化」へ」『岩波講座日本歴史』（査読有）（岩波書店）第五巻　一三九～一八〇頁　二〇一五年六月

（研究発表、講演等）

●「コメント」（研究発表）　史学会第一一三回大会日本史部会シンポジウム「摂関期の国家と社会」　二〇一五年十一月十五日　東京大学

●「日本に来た吐火羅人・舎衛人と度羅楽（吐羅楽）」（研究発表）「歴史と文化：アジア史のなかの日本古代史」国際シンポジウム　二〇一五年九月十九日　中国北京・清華大学

●「日中交渉史のなかの杭州水心寺」（研究発表）ICIS国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」　二〇一五年七月十九日　関西大学

（調査、資料収集など）

●北京・房山区（中国）　二〇一五年九月二十一日

長谷洋一　研究員

（研究発表、講演等）

●「世尊寺・阿弥陀如来坐像考」（講演）　仏教美術講演会　二〇一五年十一月八日　世尊寺

●「南都の仏像と近代――近代文芸・批評を通して――」（講演）　飛鳥史学文学講座　二〇一五年五月十日　明日香村中央公民館

三浦國雄　委嘱研究員

（翻訳）

●姜生「地斗考」翻訳　『中国出土資料研究』第一九号　二〇一五年三月（実際の刊行は二〇一五年十二月）

（研究発表、講演等）

●「明代養生思想的発展」　第五届中国道教科学技術史国際学術研討会　二〇一五年十二月六日　四川省成都市科華賓館

●「漫談儒仏道　上下」　四川大学での講演　二〇一五年十一月十九日、二十六日　四川大学基礎教学楼

●「日本朱子学与『朱子語類』訓門人巻」　譙定学術討論会　二〇一五年十一月十三日　重慶市長寿県長寿湖山荘（論文参加）

●"Characteristics of Religion in China"　第二二届国際歴史科学大会（ＩＣＨＳ）　二〇一五年八月二十七日　山東省済南市山東大厦

●「道教の臓器観」鍼灸経絡治療夏期大学セミナー　二〇一五年八月九日　東京有明医療大学

●「『北斗本命延生経』徐道齢注の諸問題」　ＩＣＩＳ国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」　二〇一五年七月十九日　関西大学

（調査、資料収集など）

●「金籙慶成祈安護国七朝清醮」参加、調査　台湾嘉義県新港郷奉天宮　二〇一五年十二月二十六日～三十日

●「陽明後学文献整理与研究開題論証会」参加、浙江省杭州市蓮花賓館　二〇一五年十二月九日～十日

●大慈寺調査　成都市内　二〇一五年十一月二十二日

●宝墩新石器遺跡調査（成都近郊――新津県、郫県、都江堰市、崇州市）　二〇一五年一一月十四日～十六日

●「第四届巴蜀文化与湖湘文化高端論壇」参加　四川省成都市科華賓館　二〇一五年一〇月十七日

●昭覚寺、圜悟克勤墓調査　四川省成都市　二〇一五年五月三十日

●真武道観、営造学社跡等調査　四川省宜賓市、李荘鎮　二〇一五年四月三十日～五月二日

●「酆都鬼神文化研討会」参加　重慶市酆都県莱特賓館　二〇一五年四月十九日～二十一日

●「孔学堂院校入駐儀式暨三厳三実的中華文化根基研討会」参加　貴州省貴陽市貴州孔学堂　二〇一五年四月六日～八日

李　曉辰　非常勤研究員

（著書）

●『京城帝国大学の韓国儒教研究――「近代知」の形成と展開』（単著）　勉誠出版　二〇一六年三月

（調査、資料収集など）

●出版用の画像及び資料を収集（韓国）　二〇一五年十一月三十日～十二月三日

佐藤健太郎　非常勤研究員

（論文）

●「日本古代の馬の飼育・管理体制について」『古代学研究』（査読有）二〇八号　三～一一頁　二〇一六年二月

（調査、資料収集など）

●国立公文書館　二〇一五年七月十七日～十八日

（その他）

●「森幸安「摂州大坂旧地図」・「大坂分町地図」の利用について」『難波・飛鳥・京都の歴史遺産の発掘と活用研究報告書』　一～一二頁　二〇一六年三月

●「地名と歴史」　摂津市総務部市史編さん室『市史編纂だより』四号　一～二頁　二〇一五年一月

佐藤トゥイウェン　非常勤研究員

（論文）

●「ベトナムにおける「二十四孝別集」をめぐって」『東アジア文化交渉研究』（査読有）第九号　二六一頁～二八一頁　二〇一六年三月

●「越南儒教的研究状況――以〝孝〟的思想为中心」『全球化視野下的中国儒学研究』（査読有）（孔学堂書局）　四九六～五〇九頁　二〇一五年九月

（研究発表、講演等）

●「ベトナムにおける「家訓」文献」（研究発表）ＩＣＩＳ国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」　二〇一五年七月十九日　関西大学

●「ハノイ漢喃研究院蔵『五倫叙』をめぐって」（研究発表）　東アジア文化交渉学会第六回国際学術大会　二〇一五年五月八日～九日　神奈川県開成町

（調査、資料収集など）

●フランス極東学院（École Français d'Extrême-Orient）、フランス国立図書館（Bibliothèque Nationale de France）、ギメ東洋美術館図書館（Bibliothèque du Musée National des Arts Asiatiques Guimet）、フランス・パリの大学間

共同利用言語・文化図書館（Bibliothèque Universitaire des langues et civilisations）（フランス）二〇一五年九月四日～十四日
●ハノイ漢喃研究院、ベトナム国家図書館、ベトナム社会科学情報院、ホーチミン市総合科学図書館（ベトナム）二〇一五年八月十三日～二十四日

鈴木章伯　非常勤研究員

（研究発表、講演等）
●「藤原惺窩對宋明理學的接受及其意義」二〇一五年青年學者東亞儒學學術論壇　二〇一五年八月五日　台灣大學
●「梁漱溟における社会主義から仏教への転向」ICIS国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」二〇一五年七月十九日　関西大学

（調査、資料収集など）
●台湾大学（台湾）二〇一五年八月三日～六日

中田美絵　非常勤研究員

（研究発表、講演等）
●"A Sogdian from the sea: Maritime Transport in the 8th century as seen from The Pilgrimage Record of Vajrabodhi", Global History Workshop "Globalization from East Asian Perspectives", in Osaka, 二〇一六年三月十五日　大阪大学中之島センター
●「天竺から唐に来たソグド人――米准那の例を中心に――」中央アジア学フォーラム　二〇一五年十二月十二日　大阪大学

（調査、資料収集など）
●北京国家図書館・国家博物館・大同市博物館および関連遺跡での調査（中国 北京・河北・山西）二〇一五年八月九日～二十二日

（その他）
●「二〇一四年の歴史学界――回顧と展望――（中国――隋・唐）」『史学雑誌』第一二四編 第五号　二〇九～二一六頁　二〇一五年六月

二ノ宮聡　非常勤研究員

（論文）
●「北京の九娘娘信仰について」『関西大学中国文学会紀要』（査読無）三七号　四三～五八頁　二〇一六年三月

（研究発表、講演等）
●「民国时期东北地区的碧霞元君信仰」（中国語）第二十二届国際歴史科学大会泰安衛星会議（国際歴史学会）二〇一五年八月二十五日、二十六日　中国泰安
●「北京的九娘娘信仰」（中国語）東亜人文論壇――東方文明与医道国際学術検討会――（北京大学宗教文化研究院世界新宗教研究中心主催）二〇一五年八月二十二日、二十三日　北京大学
●「北京的碧霞元君信仰――以妙峰山庙会为中心――」（中国語）第一届国際道教及中国宗教研究青年学者論壇　二〇一五年八月二十日、二十一日　北京大学哲学系

（翻訳）
●「北宋東学廟祀の伝播：山西定襄東岳廟碑初探」（方玲著、二ノ宮聡訳）『道教の聖地と地方神』（土屋昌明、ヴァンサン・ゴーサール編著）二一三～二二四頁　東方書店　二〇一六年二月二十七日
●劉雄峰著、二階堂善弘監訳『神話から神化へ――中国民間宗教における神仏観』（第三章、第四章部分を担当）関西大学東西学術研究所訳注シリーズ十八　全二一八頁（九四～一九八頁）二〇一五年十二月

藤原崇人　非常勤研究員

（研究発表、講演等）
●「元代世祖期における崇仏の裏面――普度資戒会をてがかりに――」平成二十七年度九州史学会大会　二〇一五年十二月十三日　九州大学
●「周縁地域における仏教」（コメント報告）平成二十七年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会「アジアにおける平泉文化」二〇一五年十一月十五日　奥州市役所江刺総合支所多目的ホール

（その他）
●「新刊紹介：廣瀬憲雄著『古代日本外交史 東部ユーラシアの視点から読み直す』」『内陸アジア史研究』（内陸アジア史学会）第三〇号　八八～八九頁　二〇一五年三月三十一日
●「新刊紹介：佐藤文子・原田正俊・堀裕編『仏教がつなぐアジア 王権・信仰・美術』」『仏教史学研究』（仏教史学会）第五七巻二号　一四五～一五一頁　二〇一五年三月（刊行は九月）

前原あやの　非常勤研究員

（論文）
●「張衡「思玄賦」の世界観」『関西大学中国文学会紀要』（査読有）第三七号　五九頁～七九頁　二〇一六年三月

（研究発表、講演等）
●「中国天文学における五星、五帝と五行思想」東アジア恠異学会第九八回定例研究会　二〇一五年四月十九日　園田学園女子大学

（書評）

●「辛賢編『宇宙を駆ける知　天文・易・道教』（知のユーラシア四）」『東方宗教』（査読有）第一二五号　二〇一五年五月

山田明広　非常勤研究員

（論文）

●「台湾鹿港地域の道教式功徳儀礼について」『関西大学中国文学会紀要』（査読有）第三七号　二九七～三一七頁　二〇一六年三月

●「台湾道教の異常死者救済儀礼」『アジア遊学』（勉誠出版）（査読無）第一八七号「怪異を媒介するもの」二四九～二五八頁　二〇一五年八月

（研究発表、講演等）

●「台湾の道教の現状と道教儀礼について」（講演）暮らしの知恵・道教に親しむ会第三回集い　二〇一五年九月　大阪中国語学院

（翻訳）

●「現代上海道教の宮観および道士についての簡単な紹介」（姚樹良著）『東方宗教』（査読有）第一二五号　一一七～一三二頁　二〇一五年五月

（調査、資料収集など）

●屏東県東津紫竹林慈性仏堂（台湾）　二〇一六年一月二十二日～二十五日

●嘉義県新港奉天宮（台湾）　二〇一五年十二月二十六日～二〇一六年一月五日

●埼玉県坂戸市聖天宮　二〇一五年十一月十五日

●台南市関帝庁、台南市開台天后宮、台中市保安宮、彰化県奠安宮、彰化県萬善堂、高雄市武廟、高雄市八徳宮（台湾）　二〇一五年八月二十一日～九月四日

横山俊一郎　非常勤研究員

（論文）

●「男爵本多政以の思想と事業――泊園学と禅宗――」『東アジア文化交渉研究』（査読有）第九号　三〇五頁～三一七頁　二〇一六年三月

●「安達清風の学術交流と開拓事業――泊園塾・昌平黌出身者の実践的軌跡――」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　二一三～二二八頁　二〇一五年四月

（研究発表、講演等）

●「泊園書院出身の企業家たち」（講演）　第五五回泊園記念講座　二〇一五年十月　関西大学

●「泊園書院の教育と明治・大正期の実業家」　ICIS国際シンポジウム　二〇一五年七月十八日　関西大学

樫木　亨　準研究員

（論文）

●「『律呂新書』における二つの候気術」『関西大学中国文学会紀要』（査読有）第三七号　八一頁～九七頁　二〇一六年三月

●「朝鮮王朝前期における『律呂新書』研究――『朝鮮王朝実録』を中心として――」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　五三～七六頁　二〇一五年四月

（研究発表、講演等）

●「中国与日本之十二平均律比較考察――朱載堉与中根元圭――」（研究発表）『第十回東亜細亜楽律学国際学術会議』　二〇一五年十一月二十一日　中国・浙江師範大学

●「日本近世期における『律呂新書』研究――中村惕斎と鈴木蘭園の比較を中心として――」（研究発表）『日本中国学会第六七回大会』日本漢文部会　二〇一五年十月十日　國學院大學

●「熊沢蕃山『雅楽解』に見られる日本雅楽観と後世への影響――朱子学者の「雅楽」観との比較を中心として――」（研究発表）『中日韓意研究生論壇二〇一五「全球化时代東亜知識的遷移」』二〇一五年三月十四日　中国・北京外国語大学

橘　悠太　準研究員

（その他・地図解説）

●「常光寺の創建と室町幕府」『大坂夏の陣四〇〇年記念特別展　八尾地蔵常光寺』（図録）　四六～四九頁　二〇一五年四月

姚　晶晶　準研究員

（論文）

●「唐代の史官柳芳について――史書『唐暦』と関連して――」『史泉』（査読有）第一二三号　一～一六頁　二〇一六年一月

●「『唐暦』の成立と日本伝来について――『明文抄』所引の逸文を中心に――」『古代史の研究』（査読無）　第一九号　五五～七〇頁　二〇一五年十二月

●「日本伝統文化と中国禅宗文化」『千里山文学論集』（査読無）第九四号　三九～五五頁　二〇一五年九月

（研究発表、講演等）

●「唐代の柳芳『唐暦』に関する研究の現状と展望」（研究発表、日本語）　中日韓大学院生フォーラム「東アジア文明の交流と学び合い」　二〇一六年三月十二日　北京外国語大学

●「日本伝存の『唐暦』逸文考――『明文抄』を中心に――」（研究発表、日本語）　関西大学史学・

地理学会大会　二〇一五年十二月五日　関西大学

●「Japanese Traditional Culture: Zen Buddhism in Europe」（ポスター発表、英語）　関西大学日本・EU研究センターの国際シンポジウム・ワークショップ「第五回Japan Week」　二〇一五年十一月六日　ベルギー・ルーヴェン大学

●「中国杭州寺院と日本禅宗文化の絆」（講演、日本語）　第一八回在住外国人による日本語スピーチフォーラム　二〇一五年十月十八日　川西市みつなかホール

●「柳芳『唐暦』と「日本」国号との関係――東アジアにおける歴史書を中心に――」（研究発表、日本語）　関西大学「EU-日本学」第八回KUワークショップ　二〇一五年九月二十二日　関西大学

（調査、資料収集など）

●中国国家図書館（中国・北京）　二〇一六年三月十三日～十五日

●東京大学史料編纂所、宮内庁書陵部、国立公文書館など（東京）　二〇一五年八月十八日～二十日

非典籍出土資料研究班

篠原啓方　研究員

（著書）

●『구야국과 고대동아시아（狗邪国と古代東アジア）』（共著）　周留城出版社（韓国）全三三四頁　一三一～一四九頁　二〇一五年十二月

（論文）

●「朝鮮文祖胎室の基礎的考察」『東アジア文化交渉研究』（査読有）第九号　三四七～四五六頁　二〇一六年三月

●「統一新羅の禅僧碑と王権」『唐代史研究』（査読無）第一八号　四一～六六頁　二〇一五年八月

（研究発表、講演等）

●「高句麗と古代日本～五世紀の倭と高句麗を中心に～」　第三五七回帝塚山大学考古学研究所・附属博物館（共催）市民大学講座　二〇一五年十二月二十六日　帝塚山大学

●「구야한국 관련 문헌사료의 연구사적 검토（狗邪韓国関連文献史料の研究史的検討）」　第二一回加耶史国際学術会議　二〇一五年五月　国立金海博物館（韓国）

（調査、資料収集など）

●韓国（ソウル、京畿道南部中心）、古代～近世にかけての金石文（碑石）調査　二〇一六年二月二十二日～三月一日

●韓国（ソウル、京畿道北部中心）、古代～近世にかけての金石文（碑石）調査　二〇一五年十二月二十八日～二〇一六年一月五日

（その他）

●「六世紀の新羅の教と法――律令肯定論と関連して――」（研究ノート）『関西大学アジア文化研究センターディスカッションペーパー』Vol. 13　三一～四〇頁　二〇一六年二月二十九日

●上野祥史「낙랑군과 왜, 한（楽浪郡と倭、韓）」（論文翻訳：日本文を韓国文に）　『구야국과 고대동아시아（狗邪国と古代東アジア）』（周留城出版社［韓国］）　七五～九九頁　二〇一五年十二月

玄　幸子　研究員

（論文）

●「変文資料を中心とする中国口語史研究再検討」『敦煌寫本研究年報』（査読有）第一〇號　一二五頁～一三四頁　二〇一六年三月三十一日

●「變文資料再整理――「舜子變」」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　六九頁～八八頁　二〇一五年四月

（研究発表、講演等）

●「新羅僧慧超《往五天竺國傳》上出現的語言數則」　紀念蔣礼鴻先生誕辰一〇〇周年暨第九届中古汉语国际学术研讨会　二〇一六年三月二十六日　浙江大学

●「研討校訂變文資料的方法與幾個問題――以《廬山遠公話》為例」　東国大学校中語中文学科二〇周年記念学術研討会　二〇一五年十一月六日　韓国東国大学校

●「《參天台五臺山記》顯現出的宋代渡華日僧語言活動實況」　第九屆漢文佛典語言學國際學術研討會暨第三屆佛經音義國際學術研討會　二〇一五年八月二十六日　北海道大学

●「内藤湖南調査ノート「ペリオ教授邸閲覧書目」について」　中國中世寫本研究二〇一五　夏期大會　二〇一五年八月八日　京都大學人文科學研究所

（調査、資料収集など）

●秋学期在外研究（韓国、インド、上海、杭州、台湾）（調査）　二〇一五年九月二十四日～二〇一六年三月三十一日

●科研による調査　宮内庁書陵部漢籍調査　二〇一五年十一月十七日～二十日

（その他）

●「第九屆漢文佛典語言學國際學術研討會暨第三屆佛經音義國際學術研討會參加報告」『日本中国学会便り』二〇一五年第二号　二〇一五年十二月二十日

森部　豊　研究員

（論文）

●「唐前半期の営州における契丹と羈縻州」『内陸アジア言語の研究』三〇（査読有）　一三一～一五七頁　二〇一五年七月

（研究発表、講演等）

●「唐朝の羈縻政策と府兵制に関する一考察――新出契丹人墓誌の分析を通じて――」（研究発表）東洋史学研究会（第五八回）　二〇一六年三月十三日　福岡大学

●「唐代奚・契丹史研究と石刻史料」（研究発表）『新中国出土墓誌』刊行二〇周年紀念日中合同中国石刻国際シンポジウム（研討会）　二〇一五年十二月十二日　明治大学

●「中国におけるソグド人墓の発見とソクド石棺牀の復元」（研究発表）　CSAC第二回国際シンポジウム「東アジア文献資料アーカイブス現状と国際ネットワーク」　二〇一五年十月二十五日　関西大学

（調査、資料収集など）

●遼寧省における契丹関係史料・遺跡調査（中国）北鎮市文物保管所、朝陽市博物館など　二〇一五年九月十二日～九月二十一日

●青海省・甘粛省調査　青海省博物館、瓜州博物館、鎖陽城遺址、敦煌市博物館（中国）　二〇一五年八月二十九日～九月七日

（その他）

●「イランにおけるフレグ＝ウルス遺跡調査報告」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）四八輯　三六五～三八七頁　二〇一五年四月

高田時雄　委嘱研究員

（著書）

●『尾崎雄二郎 中國語音韻史の研究・拾遺』（編、映日叢書第二種）（京都：臨川書店）　二〇一五年九月三十日

（論文）

●「《大唐西域記》在日傳承問題」《長江學術》（査読無）二〇一五年第二期（總第四六期）　五～八頁　二〇一五年六月

●「上野本『三國志』殘卷拜觀記――白堅のこと」『中國典籍日本古寫本の研究Newsletter』（査読無）Ⅱ　二～四頁　二〇一五年七月

●「『玉篇』雜記」『未名』（神戸大學中文研究會）（査読無）第三三號　一〇九～一二二頁　二〇一五年三月

●「日藏敦煌遺書の來源と眞僞問題」『敦煌寫本研究年報』第九號　一～一七頁　二〇一五年三月

（研究発表、講演等）

●「猿投神社所藏漢籍」（講演）　復旦大學中古中國研究前沿講座之三十六　二〇一五年十二月三十日　復旦大學

●「恰克圖貿易語言」（講演）　首都師範大學歷史學院　二〇一五年十二月二十三日　首都師範大學

●「恰克圖貿易語言」（講演）　復旦大學歷史學系史學論壇　二〇一五年十一月二十六日　復旦大學

●「五色紙寫本在日本的流傳簡述」（發表）「絲路文明傳承與發展國際學術研討會」　二〇一五年十月八日　浙江大學

●「佚存書與日藏漢籍」（講演）　復旦大學中古中國研究前沿講座　二〇一五年六月二十四日　復旦大學

●「〝避諱改音〟説的再檢討」（基調講演）　復旦大學歷史系主催「博物學與寫本文化：知識――信仰傳統的生成與構造學術研討會」　二〇一五年六月二十日　復旦大學

●"Sound Changeto avoid using taboo chracters"（發表）　WORKSHOP "SERINDICA: NEW TEXTS, NEW APPROACHES", Institute of Oriental Manuscripts, RAS, St. Petersburg　二〇一五年五月二十二日　ロシア科學アカデミー東洋寫本研究所

●「佚存書與日藏漢籍」（講演）「文獻、文本與文創」工作坊　二〇一五年五月二日　台中市・逢甲大學

岩尾一史　非常勤研究員

（著書）

●"Secular Law and Order in the Highland Tibet"（D. Schuh[ed.]：共著）International Institute for Tibetan and Buddhist Studies, Andiast　二〇一六年三月出版（Preliminary Study of the Legal Court Proceedings in the Old Tibetan Empire担当）

（論文）

●「九世紀の歸義軍政權と伊州――Pelliot tibétain 1109を中心に」『敦煌写本研究年報』（査読有）一〇　三四一頁～三五六頁　二〇一六年三月

（研究発表、講演等）

●“On the Study of Old Tibetan Contracts”（研究発表）絲綢之路出土民族契約研究国際学術論壇　二〇一五年十月二十九日　吐魯番博物館

●「チベット仏教文化と敦煌周辺――チベット帝国期から十二世紀まで――」（研究発表）「出土文字資料と現地調査による河西回廊オアシス地域の歴史的構造」　二〇一五年九月二十六日　大阪大学

●「古代チベット帝国の文書と行政」（研究発表）二〇一五年七月四日　ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）

●“New trends in Tibetan Studies in Japan: Towards building an interdisciplinary research team”（講演）『伝法の未来を考える』二〇一五年四月五日　ロイヤルパークホテル

（調査、資料収集など）

●ロシア科学アカデミー東方写本研究所（ロシア）二〇一六年二月二十八日～三月四日

●フランス国立博物館（フランス）二〇一六年二月十四日～二月二十二日

●敦煌莫高窟・瓜州榆林窟（中国）二〇一五年十二月二十四日～十二月三十一日

●ロシア科学アカデミー東方写本研究所（ロシア）二〇一五年八月三十日～九月八日

（その他）

●「古チベット語史料を読む：古代の失われた記憶を求めて」『FIELDPLUS（フィールドプラス）』一四　二四～二七頁

新見まどか　非常勤研究員

（論文）

●「平盧節度使と泰山信仰――『太平広記』所収「李納」伝を中心に」『史泉』（査読有）第一二三号　一七～三三頁　二〇一六年一月

●「唐武宗期における劉稹の乱と藩鎮体制の変容」『史学雑誌』（査読有）第一二四編第六号　一～三七頁　二〇一五年六月

比較信仰文化研究班

新谷英治　研究員

（論文）

●「地中海国家オスマン朝とピーリー・ライース作品」『近世イスラーム国家史研究の現在』（近藤信彰編）（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）（査読無）一二一～一四二頁　二〇一五年六月

●「『キターブ・バフリエ』に見えるシリア海岸」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　八九～一〇七頁　二〇一五年四月

蜷川順子　研究員

（著書）

●『〈スラヴ叙事詩〉通鑑』（監修、翻訳）（関西大学出版部）一五四頁（図版、奥付含む）二〇一五年十二月

●『油彩への衝動』（編著）中央公論美術出版　監修三三〇頁、著述一五頁、翻訳三五頁　二〇一五年九月

（論文）

●“The Child Jesus Standing Alone: Super-natural or Yuru-chara?”, Performing Cultures, ed. by Jakub Petri, ICA2013 Proceedings vol.3, Krakow: Libron,（査読有）2015, pp. 31-40.（平成二十六年度の報告書にOn-line版を掲載したが、紙本出版は本年なので再掲載）

（研究発表、講演等）

●「ロヒール・ファン・デル・ウェイデン作〈コルンバ三連画〉の制作事情――ケルン商人のネットワークを手がかりに――」第六八回美術史学会全国大会　二〇一五年五月二十四日　岡山大学

（調査、資料収集など）

●資料収集、ドイツ、イギリス（科研再申請奨励費）二〇一六年三月二十三日～三月三十日

●資料収集、長崎市、五島列島（長崎県）（科研再申請奨励費）二〇一六年二月二十五日～三月三日

●資料収集、妻有、佐渡島（新潟県）二〇一五年九月三日～九月六日

●資料収集、鶴島（岡山県）二〇一五年五月二十二日

（その他）

●平成二十七年度兵庫県生活文化大学『西洋美術講座』（年間一〇回）公益財団法人兵庫県芸術文化協会主催

野間晴雄　研究員

（論文）

●「ドイモイ三十年と日越研究交流」『月刊地理』（査読無）第六一巻一〇号　五四～六二頁　二〇一六年二月

●「モノと文化の交流からみた東アジア沿海」『月刊地理』（査読無）第六〇巻一〇号　一六～二三頁　二〇一五年十月

●「低地の歴史生態システム：低地居住史と農地開発」『建築雑誌』（査読有）一六七一号　一四～

一五頁　二〇一五年五月

（研究発表、講演等）

●「フランスとイギリス・シンガポールの熱帯地理学――その系譜・特色・研究者養成を中心に――」「現代アジア・オセアニア地域研究のための「南洋地理学」の批判的検討」（代表　岡本耕平：二〇一四～二〇一六年度　科学研究費（基盤研究B）研究集会）　二〇一六年二月十一日　学士会館名古屋大学連絡所（東京都千代田区）

●「都市近郊園芸農業における「広域地産地消圏」の成立――京都市と大阪府の都市＝農村関係史を踏まえて――」近畿都市学会二〇一五年度秋季大会　二〇一五年十一月二十八日　立命館大学大阪いばらきキャンパス（発表要旨は、「近畿都市学会報」第一九二号　三～四頁　二〇一五年十一月　所収）

●「キューバにおけるプランテーションの歴史地理――遅れたサトウキビ特化の遺産――」　二〇一五年度人文地理学会大会　二〇一五年十一月十五日　大阪大学豊中キャンパス（発表要旨は『発表要旨集』　五八～五九頁　二〇一五年十一月　所収）

●「カリブ海域のコロニアル／ポストコロニアル空間の特性と島嶼経済」　二〇一五年度　日本地理教育学会第六九回大会（奈良地理学会共催）　二〇一五年七月十九日　奈良教育大学

（調査、資料収集など）

●ベトナム（フエ、ハノイ）フエ文書に関する打ち合わせ　二〇一五年十一月十八日～二十三日

●インド（アグラ、シムラ、バラナシ、ガヤ、コルカタ）聖地・ヒルステーションの調査視察　二〇一五年八月十七日～二十三日

（その他）

●「シムラはヒルステーションの典型か例外か」『北インドの風土と歴史遺産――デリー・アグラ・シムラ――』（野外歴史地理学研究会編）　四一～四四頁　二〇一五年十二月

●「書評：佐々木高明著『日本農耕文化の源流』海青社　二〇一三年」『人文地理』第六七巻四号　五八～五九頁　二〇一五年八月

●歴史地理学会二〇一五年度シンポジウム「地域資源の歴史地理」（オーガナイザーおよびコメンテーター）　二〇一五年六月二十八日　山形県立米沢短期大学。（その内容は、①野間晴雄「須山聡・湯澤規子報告に寄せて」、②「総括：地域資源の歴史地理の成果と課題」『歴史地理学』第五八巻一号　①七三～七四頁、②一三〇～一三二頁　二〇一六年一月三十日刊に掲載）

森　隆男　研究員

（著書）

●「日本の住まいと食文化」（共著）『月刊地理』（査読無）通巻七二三号　二四～三一頁　二〇一五年十月

●『新課程　博物館学ハンドブック』三冊　一、二、三（共著）　関西大学出版部　一〇〇～一一一頁他　二〇一五年三月

（論文）

●「町並み保存からまちの再生へ――重伝建の町・豊岡市出石のまちづくりにむけて――」『民俗建築』第一四七号（査読無）　六五～七三頁　二〇一五年五月

（研究発表・講演等）

●「対馬の住まい」　日本民家集落博物館講座　二〇一五年五月　日本民家集落博物館

（調査、資料収集など）

●住まい調査、沖縄県那覇市他　二〇一六年三月十二日～十七日

●住まい調査、沖縄県八重山地方　二〇一五年十二月十九日～二十五日

●住まい調査、島根県　二〇一五年八月二十二日～二十四日

●民俗芸能調査、兵庫県香美町　二〇一五年八月十四日～十五日

●津島天王祭調査、津島市　二〇一五年七月二十五日～二十六日

●住まい調査、長野県　二〇一五年五月十九日～二十一日

（その他）

●「ハレの日の出入り口・ガンギ」『昔風と當世風』第一〇〇号　一〇九頁～一一五頁　二〇一五年十二月

●「シンポジウム奇想の画家はもう飽きた――浪花の町絵師菅楯彦の世界――」『大阪商業大学商業史博物館紀要』第一六号　一二頁～三一頁　二〇一五年十月

●「祭場に転換される住まい――宮崎県椎葉村の神楽――」『阡陵』（関西大学博物館）第七一号　六頁～九頁　二〇一五年九月

松井幸一　研究員

（著書）

●「都城――首里とフエにおける変形」（共著）『月刊地理』（査読無）通巻七二四号　古今書院　七八～八五頁　二〇一五年十一月

（論文）

●『今泊集落の景観的特徴と街路構成』（今帰仁グスクを学ぶ会十周年記念誌）（査読無）　五〇～

五九頁　二〇一五年七月

（調査、資料収集など）

●沖縄県那覇市　二〇一六年三月十日～十六日

茶谷まりえ　非常勤研究員

（調査報告書）

●「夏に見た雪国のすがた」『昔風と當世風』（古々路の会）第一〇〇号　六九～七二頁　二〇一五年十二月一日

（調査、資料収集など）

●新潟県柏崎市・長岡市等でのフィールドワーク（越後の鯨食文化、および沿海地域の冬のくらしに関する実地調査）　二〇一六年一月二十四日～二十六日

●静岡県西伊豆町安良里地区でのフィールドワーク（安良里でのクジラ食・イルカ食に関する調査）　二〇一五年九月十五日～十六日

●島根県邑智郡邑南町でのフィールドワーク（中国地方の山間部における保存食と魚介類の消費に関する聞き取り調査）　二〇一五年八月二十二日～二十四日

（その他）

●「鯨食から考える日本人の心」『食物と健康』冬号　一六二号（神戸女子大学・神戸女子短期大学）　二一～二三頁　二〇一五年十二月一日

吉田雄介　非常勤研究員

（論文）

●「小さな寄進物――ワクフ基金から寄贈されたワクフとしてのズィールー（綿製絨毯）――」『イラン研究』（査読有）第一二号　一一九～一三九頁　二〇一六年三月

●「マスジェドにおける現在のズィールー（綿製敷物）の使用状況　イラン・ヤズド州メイボドおよび近郊の事例から」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　二二九～二四七頁　二〇一五年四月

（研究発表、講演等）

●「聖なる空間と敷物　イランの聖なる場所を中心に」　白鶴美術館ミュージアムレクチャー　二〇一五年五月三十一日　白鶴美術館

●「聖なる場所とは？　イランの聖なる場所を中心に」　白鶴美術館ミュージアムレクチャー　二〇一五年四月二十六日　白鶴美術館

（調査、資料収集など）

●イランでの手工業の現状調査（科研、基盤研究（C）「途上国の手工業研究の総合に向けた地理学的試み――既存研究の批判的整理と実地調査から」）　二〇一五年八月十九日～九月十八日

齋藤鮎子　準研究員

（研究発表、講演等）

●「土佐市における防災・産業の地理学的考察――地理学・地域環境学実習調査中間報告一――」（ポスター発表）　関西大学史学・地理学大会　二〇一五年十二月五日　関西大学

●「土佐市における巡礼・観光・市街地の地理学的考察――地理学・地域環境学実習調査中間報告二――」（ポスター発表）　関西大学史学・地理学大会　二〇一五年十二月五日　関西大学

●「焼津の水産・加工業についての予察」（研究発表）　黒潮の道――その地域学的比較研究科研第二回研究集会　二〇一五年四月二十五日　千葉県

（調査、資料収集など）

●土佐市役所　二〇一五年十月五日～九日

●西伊豆町役場安良里出張所および伊豆漁協安良里支所　二〇一五年九月十五日～十六日

●富士山本宮浅間大社　二〇一五年八月十七日～十八日

日本文学研究班

長谷部剛　研究員

（著書）

●『『隋書』音楽志訳注』（共著、六朝楽府の会編著）　和泉書院　二六～三八頁、四三二～四四〇頁、五二一～五三〇頁を執筆　二〇一六年二月二十六日

●『中国詩跡事典――漢詩の歌枕――』（共著、植木久行編）　研文出版　一三一～一九九頁「陝西省」を執筆　二〇一五年三月十日

（論文）

●「唐代長短句詞『漁歌』の伝来――嵯峨朝文学と中唐の詩詞――」　アジア遊学一八八『日本古代の「漢」と「和」――嵯峨朝の文学から考える――』（査読無）（勉誠出版）　三七～四七頁　二〇一五年九月十八日

●「藤澤南岳と明治大阪詩壇（一）――妻鹿友樵の漢詩への添削について」『泊園』（査読無）（泊園記念会）第五四号　一三三～一五五頁　二〇一五年六月三十日

●「ドイツ語のなかの杜甫――堀辰雄の『杜甫訳詩』とのかかわりを中心に――」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　一〇九～一二五頁　二〇一五年四月

●「日本詩歌集錦『和漢朗詠集』與初唐詩流傳情況」『中文學術前沿』（査読有）（浙江大学出版

社）第九輯　五六～六二頁　二〇一四年十二月（実際は二〇一五年に刊行）

（研究発表、講演等）

●「近代日本琴道與林謙三、高羅佩」（研究発表）中國昆劇古琴研究會・北京大學中文系・台灣大學藝術中心「傳統與現代：古琴藝術學術研討會」二〇一五年十二月五日　河北省廊坊市

●「敦煌歌辞と日本を結ぶもの」（研究発表）　和漢比較文学会第三四回大会公開シンポジウム「敦煌歌辞と日本を結ぶもの」二〇一五年九月十二日　関西大学

●「李白・杜甫・王維――唐詩人の詩と生涯――」（講演）　関西吟詩文化協会東明未来塾　二〇一五年八月二十八日　関西吟詩会館

●「森槐南重刻《王文簡古詩平仄論》簡介」　上海大学「〝清代詩學文獻整理與研究〟國際學術研討會」二〇一五年七月四日　上海大学

●「十九世紀日本大阪舊體文學的繼承與實踐――以藤澤南岳為中心――」（研究発表）　香港中文大学中文系「風雅傳承：民初以來舊體文學國際學術研討會」二〇一五年六月五日

●「杜甫『春望』を読む」（講演）　関西吟詩文化協会吟道大学講座　二〇一五年二月八日　パナソニック・リゾート

大島　薫　研究員

（研究発表、講演等）

●「儀礼における神仏習合」　Cluster "Asia and Europe in a Global Context" HEIDELBERG MC3.1/MC07 AND JŌBODAI'IN KAKEN GROUP Joint Workshop in English and Japanese　二〇一五年五月二十九日　Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg

（調査、資料収集など）

●資料調査　寂照山円乗寺成菩提院　二〇一五年八月二十九日～九月四日

（資料紹介）

●「成菩提院所蔵「題未詳聖教」紹介――伝存聖教から柏原談義所を復元する」『関西大学国文学』一〇〇号　一三七～一四四頁　二〇一六年三月

関　肇　研究員

（論文）

●「竹久夢二と新聞小説挿絵――加藤武雄「審判」を中心として――」『関西大学文学論集』（査読無）第六五巻第二号　二七～五八頁　二〇一五年十月

増田周子　研究員

（論文）

●「火野葦平の戦後の平和活動――「アジア諸国会議」から中国へ――」『あしへい』（査読有）第一八号　七六～七九頁　二〇一五年十二月

●「一九五五年火野葦平「アジア諸国会議」参加後――インドから香港、広東へ――」『文学論集』（査読無）（関西大学）第六五巻　五九～一〇九頁　二〇一五年十月

（研究発表、講演等）

●「火野葦平の平和活動――「アジア諸国会議」から中国へ――」（講演）　関西大学国文学会　二〇一五年十二月十九日　関西大学

●「一九二〇年代～三〇年代の大阪文化・文学研究――『大阪時事新報〈文芸欄〉』を視座として――」　日本近代文学会関西支部　二〇一五年十一月七日　大阪大学

●「徳島と庄野英二・潤三兄弟」（招待講演）　帝塚山派文学学会　二〇一五年十一月一日　帝塚山学院大学

●「佐藤愛子『スニヨンの一生』論――戦争の残した傷跡――」　天理台湾学会　二〇一五年六月二十八日　天理大学

●「The View after the War: Hino Ashihei, s 1955 Korean Tour」　アジア学会（AAS）　二〇一五年六月二十四日　台湾中央研究院

（資料紹介・翻刻）

●「火野葦平　広東作戦「従軍手帖」翻刻――陸軍報道班員の記した日中戦争――」『戦争と文学スペシャル』（集英社）　二一四～二五一頁　二〇一五年七月

（解説・事典項目・書評・紹介）

●「火野葦平　広東作戦「従軍手帖」「解説」」『戦争と文学スペシャル』（集英社）　二五二～二五四頁　二〇一五年七月

●「戦争を描くリアリズム：石川達三・丹羽文雄・田村泰次郎を中心に」『日本近代文学』第九三号　二六八頁

（その他）

●「文芸時評三月」『毎日新聞』夕刊　六面　二〇一六年三月三十日

●「文芸時評二月」『毎日新聞』夕刊　六面　二〇一六年二月二十四日

●「文芸時評一月」『毎日新聞』夕刊　四面　二〇一六年一月二十七日

●「文芸時評十二月」『毎日新聞』夕刊　四面　二〇一五年十二月二十一日

●「文芸時評十一月」『毎日新聞』夕刊　四面　二〇一五年十一月三十日

●「文芸時評十月」『毎日新聞』夕刊　四面　二

○一五年十月二十八日
●「文芸時評九月」『毎日新聞』夕刊　四面　二○一五年九月三十日
●「文芸時評八月」『毎日新聞』夕刊　六面　二○一五年八月二十六日
●「文芸時評七月」『毎日新聞』夕刊　六面　二○一五年七月二十九日
●「文芸時評六月」『毎日新聞』夕刊　六面　二○一五年六月二十五日
●「文芸時評五月」『毎日新聞』夕刊　五面　二○一五年五月二十七日
●「文芸時評四月」『毎日新聞』夕刊　五面　二○一五年四月二十二日

（社会人講演・講座）

●「関西歴史・文学散歩　長谷川時雨「モルガンお雪」」二○一六年三月七日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　一休と建仁寺」二○一六年二月二十九日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　水上勉「一休」」二○一六年二月一日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　庄野英二とモラエス」二○一六年一月十八日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　庄野潤三・英二兄弟と徳島」二○一五年十二月二十一日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　織田作之助と上町台地」二○一五年十二月七日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　織田作之助」二○一五年十一月三十日　サンケイリビング社
●「田辺聖子の文学万華鏡」大阪樟蔭女子大学第二七回公開講演会　二○一五年十二月五日　大阪樟蔭女子大学
●「火野葦平の平和活動――一九五五年「アジア諸国会議」とその周辺――」関西大学公開フェスタ　二○一五年十一月九日　大阪府新別館南館八階　大研修室
●「関西歴史・文学散歩　「源氏物語」と宇治」二○一五年十一月十六日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　「源氏物語」と日本近代文学」二○一五年十一月二日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　志賀直哉旧居と奈良」二○一五年十月十九日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　「今昔物語」と堀辰雄「曠野」」二○一五年十月五日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　宝塚文化とモダニズム」二○一五年九月七日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　手塚治虫の生涯とトキワ荘」二○一五年七月六日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　堺と利休」二○一五年六月二十九日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　与謝野晶子と堺」二○一五年六月十五日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　大阪城の歴史と文学」二○一五年六月一日　サンケイリビング社
●「関西歴史・文学散歩　開高健「日本三文オペラ」」二○一五年五月十八日　サンケイリビング社

山本登朗　研究員

（著書）

●『日本古代の「漢」と「和」』（共編著）勉誠出版　四～五頁および一五七～一六七頁　二○一五年九月

（論文）

●「「名」にちなむ詩歌――『文華秀麗集』「燕」詩群の背景――」関西大学『国文学』（査読有）第一○○号　三一～四○頁　二○一六年三月

（研究発表、講演等）

●「伊勢物語と万葉歌」（研究発表）中古文学会秋季大会　二○一五年十月二十五日　県立広島大学
●「嵯峨朝の文学について」（招待講演）和漢比較文学会第八回特別例会　二○一五年八月二十九日　中国・西安　西北大学

溝井裕一　研究員

（著書）

●『欧米社会の集団妄想とカルト症候群――少年十字軍、千年王国、魔女狩り、KKK、人種主義の生成と連鎖』（共著）明石書店　二七七～三○五頁　二○一五年九月
●『カラー図説　グリムへの扉』（共著）勉誠出版　一八一～二○八頁　二○一五年五月

（論文）

●「『魚を横から、下から見ること』の文化史――ローマ式養魚池から博物誌、ヴンダーカンマー、金魚鉢、水族館まで」『関西大学文学論集』（査読無）第六五巻第三・四合併号　七七～一一三頁　二○一六年三月

（研究発表、講演等）

●「歴史紀行　ヨーロッパの動物園――人と動物の知られざる物語」（講演）横浜市緑の協会講演会「深化する公園と動物園」二○一五年十一月七日　横浜市開港記念会館

（調査、資料収集など）

●帝国党大会資料館、オリンピック・スタジアム、ゲルマニア計画跡（ドイツ）　二〇一六年一月二十五日～三十日

●シェッド水族館、ウッズホール科学水族館、ワシントン水族館跡、ニューイングランド水族館、ボルティモア国立水族館、ジョージア水族館（アメリカ）　二〇一五年九月一日～十日

（その他）

●「〈ジュラシック・パーク〉と動物園文化」『みんぱく』（国立民族学博物館）八月号　六頁　二〇一五年八月

大橋毅彦　委嘱研究員

（論文）

●「昭和文学の上海体験」（博士学位論文、早稲田大学）　五三六頁　二〇一六年二月

●「初期「大陸往来」の一瞥――戦時下上海における現地文学の種々相」『日本文藝研究』（関西学院大学）（査読無）第六七巻第一号　一～二六頁　二〇一五年十月

●「沸きたつライシャム――多言語メディア空間の中で」　アジア遊学一八三『上海租界の劇場文化――混淆・雑居する多言語空間』（査読無）　二四～三五頁　二〇一五年四月

●「蘭心大戯院研究的可行性」『上海学』（上海社会科学院）（査読無）第二輯　九三～一〇二頁　二〇一五年四月

（研究発表、講演等）

●「《窓》と《繁星》――文学者・室伏クララのために――」（研究発表）　日本上海史研究会・中日文化協会研究会共催「国際シンポジウム　戦時上海におけるメディア」　二〇一五年十月五日

奈良大学

惠阪友紀子　非常勤研究員

（研究発表、講演等）

●「『和漢朗詠集』の享受――詩歌の増補と大江匡房――」　和漢比較文学会第八回海外特別例会　二〇一五年八月三十日　臨潼陝西省療養院（中国・西安市）

（調査、資料収集など）

●今治市立河野美術館　二〇一六年三月八日～九日

●宮内庁書陵部　二〇一六年二月二十二日～二十三日

●陽明文庫　二〇一六年三月十六日、二月十六日、一月十九日、二〇一五年十二月十五日、十一月十七日、十月二十日、八月十七日、七月三十日、六月四日、五月十四日、四月六日

●国文学研究資料館　二〇一六年一月十五日、二〇一五年七月二十七日、五月二十一日

●西安大学・臨潼陝西省療養院（中国）　二〇一五年八月二十八日～九月二日

●京都国立博物館　二〇一五年八月十日～十一日

●尊経閣文庫　二〇一五年四月三十日～五月一日

（その他）

●「関西大学図書館蔵生田本『和漢朗詠集』上巻の本文」（資料紹介）『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　一〇一～一二二頁　二〇一五年四月

立石大樹　非常勤研究員

（論文）

●「小松切『拾遺抄』の性格」『國文学』（査読有）（関西大学）第一〇〇号　八三頁～九四頁　二〇一六年三月

中葉芳子　非常勤研究員

（論文）

●「伝冷泉為秀筆物語切の書写内容――付・中世『源氏物語』梗概本古筆切集成　補訂版――」（単著）『国文学（関西大学）』（査読有）第一〇〇号　一一三頁～一二四頁　二〇一六年三月三十一日

●「甲南女子大学蔵『源氏小鏡』解題と翻刻（上）」（共著）『甲南女子大学研究紀要　文学・文化編』（査読無）第五二号　一～一七頁　二〇一六年三月十八日

（その他）

●千里山コミュニティセンター「源氏物語講演会」講師　二〇一五年十一月十四日

●北千里公民館「文学講座　源氏物語」講師　二〇一五年五月～十月

福留瑞美　非常勤研究員

（論文）

●「伊勢神宮奉納百首の諸相」　関西大学国文学会『国文学』（査読有）第一〇〇号　一二五頁～一三六頁　二〇一六年三月三十一日

西洋文学における異文化交流研究班

和田葉子　研究員

（論文）

●「十四世紀のアイルランドで書かれたLondon, British Library, MS Harley 913に見られる「愚者の祭り」の諸相」*Neo Anglica*（査読無）六、二七～三八頁　二〇一五年七月二日

●「ロンドン大英図書館所蔵Harley 913写本に収録された中英語詩 *Lollai*とそのラテン語版の関係についての一考察」『関西大学東西学術研究所紀要』（査読有）第四八輯　一二七～一三八頁　二〇一五年四月

（調査、資料収集など）

●小泉八雲資料館　二〇一六年三月十二日～十三日

●ノースカロライナ大学チャペルヒル校図書館（アメリカ合衆国）（科研費）二〇一五年九月三日～十四日

●アイルランド国立図書館およびウォーターフォード市立図書館（アイルランド共和国）（科研費）二〇一五年八月八日～十七日

近藤昌夫　研究員

（著書）

●『散策探訪コロムナ　ペテルブルク文学の源流』二四八頁　未知谷　二〇一五年十二月

（論文）

●“Образ храма в рассказе Чехова «Студент»”『スラヴィアーナ』（日本スラヴ人文学会）（査読有）第七号（通算二九号）三～七頁　二〇一五年十一月

鼓　宗　研究員

（著書）

●『スペイン語大辞典』（共著：tracista からtwistまでの項目の一部）白水社　二〇一五年九月

平田　渡　研究員

（著書）

●『スペイン語大辞典』（共著）白水社　二〇一五年九月

（翻訳）

●ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ著『えも言われぬ美しさの、きらびやかにして、永遠なるサーカス』（単著）（関西大学東西学術研究所訳注シリーズ 十九）関西大学出版部　二〇一六年三月

パトリック・オニール　在外委嘱研究員

（著書）

● *Old English Psalms*, edited and translated by Patrick P. O'Neill, Dumbarton Oaks Medieval library vol. 42 (Harvard University Press, Cambridge, March 2016)

（論文）

●“Strategies of Translation in the Old English Versions (Prose and Metrical) of the Psalms in the Paris Psalter (Paris, Bibliothèque nationale de France, Fonds latin, 8824),” *Bulletin of the Institute of Oriental and Occidental Studies, Kansai University*, 48 (2015), 137-171.

●“Anglo-Irish Interactions in a Liturgical Calendar from Cambridge, Corpus Christi College Library, 405,” in P. Moran and I. Warntjes (eds.), *Early Medieval Ireland and Europe: Chronology, Contacts, Scholarship: A Festschrift for Dáibhí Ó Cróinín* (Turnhout, 2015), pp. 265-98.

（研究発表、講演等）

●“Excommunication and Reconciliation in *Buile Suibhne*,” 35th meeting of the Japan Society for Celtic Studies, at Keio University, Oct 17th, 2015

（調査、資料収集など）

● Lafcadio Hearn Collection in Matsue Municipal Library, Shimane, Japan March 12-13, 2016

● The National Library of Ireland, Dublin, Ireland August 8-14, 2015

● Waterford City Library, Waterford, Ireland August 4-7 and 15-17, 2015

● Dublin Institute for Advanced Studies, Dublin, Ireland May 7-12, 2015

川神傅弘　客員研究員

（日本フランス語フランス文学会関係活動）

●学会研究発表会「ミシェル・フーコーにおける言語と自由の問題」の司会・審査担当　二〇一五年十一月五日　大手前大学

◇　◇

三　ICIS国際シンポジウム

総合テーマ：文化交渉学のパースペクティブ

開催場所：関西大学千里山キャンパス　以文館四階　セミナースペース

開催日：平成二十七年七月十八日（土）

講演者及び題目

近世近代日中文化交渉（日中移動伝播）研究班

テーマ：東アジア圏における伝統と近代化

王　青（中国社会科学院哲学研究所研究員・中華日本哲学会副会長）「近代日本と近代中国におけるイプセン主義の受容」

髙橋文博（就実大学教授）「主従道徳と近代日本」

中谷伸生（研究員・文学部教授）「木村蒹葭堂の文人趣味と文化交渉」

藤田髙夫（研究員・文学部教授）「林泰輔の中国上代研究――伝統漢学から近代中国学への展開」

髙橋沙希（非常勤研究員）「明治洋画界における青木繁」

司会：井上克人（主幹・文学部教授）

コメンテータ：陶　徳民（研究員・文学部教授）

東アジア宗教儀礼研究班（一部）

テーマ：泊園書院研究

吾妻重二（研究員・文学部教授）「近代学制のなかの泊園書院」

横山俊一郎（非常勤研究員）「泊園書院の教育と明治・大正期の実業家」

司会：二階堂善弘（研究員・文学部教授）

コメンテータ：中谷伸生（研究員・文学部教授）

開催日：平成二十七年七月十九日（日）

講演者及び題目

言語接触研究班

テーマ：文化交渉学と言語接触研究

鄒　振環（復旦大学歴史学系教授）「マテオリッチの世界地図の刊行と伝播」

内田慶市（主幹・外国語学部教授）「周縁資料による中国言語学研究の過去・現在・未来――文化交渉学の視点から」

沈　国威（研究員・外国語学部教授）「近代訳語はどう創られたのか」

乾　善彦（研究員・文学部教授）「漢文訓読という言語接触」

司会：奥村佳代子（研究員・外国語学部教授）

コメンテータ：陳　力衛（委嘱研究員・成城大学経済学部教授）

東アジア宗教儀礼研究班（二部）

テーマ：文化交渉と東アジアの宗教・思想

三浦國雄（委嘱研究員・四川大学教授）「『北斗本命延生経』徐道齢注の諸問題」

二階堂善弘（研究員・文学部教授）「日中寺院における伽藍神の探求」

西本昌弘（研究員・文学部教授）「日中交渉史のなかの杭州水心寺」

鈴木章伯（非常勤研究員）「梁漱溟における社会主義から仏教への転向」

佐藤トゥイ ウェン（非常勤研究員）「ベトナムにおける「家訓」文献」

司会：原田正俊（主幹・文学部教授）

コメンテータ：吾妻重二（研究員・文学部教授）

◇　◇

四　特別講演会

開　催　日：平成二十八年一月十五日（金）

開催場所：関西大学千里山キャンパス　児島惟謙館一階第一会議室

テーマ：楊守敬・日下部鳴鶴・山本竟山――近代日本の碑学の源流を探る――

講演者及び題目

菅野智明（筑波大学教授）「楊守敬における碑学の一側面――兼ねて日下部鳴鶴への伝播に及ぶ――」

大橋成行（泰山書道院院長・京都女子大学講師）「現代北碑派内部から見た碑派の書法と書美術品」

山本宗生「雑感・身内から見た竟山」

コメント

杉村邦彦（書論研究会会長　京都教育大学・四国大学名誉教授）「楊守敬と山本竟山の交遊について」

◇　◇

五　三研究所合同シンポジウム（東西学術研究所、経済・政治研究所、法学研究所）

総合テーマ：一国主義を越える学術研究　学問の海外交流

開　催　日：平成二十七年五月二十二日（金）

開　催　場　所：関西大学千里山キャンパス　尚文館1階マルチメディアAV大教室

講演者及び題目

基調講演

熊倉功夫（公立大学法人　静岡文化芸術大学学長、一般社団法人　和食文化国民会議　会長）「日本食文化の海外交流」

講演

祁　小春（中国・広州美術学院教授）「日中の学術的背景における書学研究――王羲之研究を

中心として」
メンクハウス・ハインリッヒ（明治大学法学部・大学院法学研究科教授）「法学の観点から見た日独交流」
サウワラク・キティプラパス（タイ・ランシット大学・経済学部 研究センター所長）「幸福と生活の質：仏教の視点から」
総合討論

◇　◇

六　第二回東亞青年海洋文化国際論壇（東アジア青年海洋文化国際シンポジウム〝海・山・川・人〟）

主　催：東西学術研究所・国立台湾海洋大學海洋文化研究所・人文社会教学研究センター
開　催　日：平成二十八年三月二十八日（月）
開催場所：関西大学児島惟謙館一階第一会議室

講演者及び題目
基調講演
黄麗生（国立台湾海洋大學・人文社会教学研究センター長）「明代後期的島嶼議題：以《明實録》為中心」
松浦章（関西大学東西学術研究所研究員・アジア文化研究センター長）「東洋汽船会社と臺灣烏龍茶のアメリカ輸出」
卞鳳奎（国立台湾海洋大學・海洋文化研究所長）「戦前明治大學的台湾留学生――以在台湾從事政治活動為中心探討」
研究発表
安嘉芳（国立台湾海洋大學・海洋文化研究所）「日據時期基隆地區日人生活意象之探討」
顔智英（国立台湾海洋大學・海洋文化研究所）「略論明代中期以前的海戰詩」
吳智雄（国立台湾海洋大學・海洋文化研究所）「試探《皇明經世文編》中的海洋朝貢議論」
楊正顯（国立台湾海洋大學・海洋文化研究所）「明代的海警與倭警」
王俊昌（国立台湾海洋大學・海洋文化研究所）「日治時期臺灣水産關聯産業――製冰冷藏業的發展」
中島小巻（関西大学大学院）「日台の洋画にみる南画（文人画）表現」
裵洙浄（関西大学大学院）「リーチポタリーにおける朝鮮的なもの」
蔡懷德（国立台湾海洋大學大學院）「日本殖民時期觀光「意象」之探討――以基隆地區為中心」
蔡雅如（国立台湾海洋大學大學院）「金鑛與移民――日據時代金瓜石人口之研究」
何娟娟（関西大学大学院）「清末中国における日本紙幣の導入」
陳怡君（国立台湾海洋大學大學院）「置入與迎拒――日治時期臺灣島内展覽會之研究」
鄧氏菏（関西大学大学院）「十七世紀後半ベトナム・トンキンの中国・日本貿易」
邢繼萱（国立台湾海洋大學大學院）「海洋文化的數位呈現――以臺灣海洋科技博物館海洋文化廳為例」
曹　悦（関西大学大学院）「清代中国篆書書法的日本影響」

◇　◇

七　第五十五回泊園記念講座（大阪府共催）

テ　ー　マ：泊園書院とその周辺4
開　催　日：平成二十七年十月二十三日（金）
開催場所：関西大学千里山キャンパス　以文館四階セミナースペース

講演者及び題目
橋本昭彦（国立教育政策研究所　総括研究官）「官学・昌平坂学問所の稽古人の勉学活動」
横山俊一郎（東西学術研究所　非常勤研究員）「泊園書院出身の企業家たち」
吾妻重二（関西大学文学部教授・泊園記念会会長）「WEB泊園書院コンテンツの充実」

◇　◇

八　発令

発　令　日：二〇一六年四月一日
研究期間：二〇一六年四月一日～二〇一七年三月三十一日

（一）客員研究員
言語接触研究班　伊伏　啓子（新規）
閻　立（新規）
塩山　正純（新規）
朱　鳳（新規）
松田　清（継続）
近世近代日中文化交渉（日中移動伝播）研究班　竹内　洋（新規）
西洋文学における信仰とフィクション研究班　川神　傅弘（新規）

（二）非常勤研究員

言語接触研究班
稲垣　智恵（継続）
田中巳榮子（継続）
氷野　歩（継続）
氷野　善寛（新規）
紅粉　芳恵（新規）

近世近代日中文化交渉（日中移動伝播）研究班
桑野　梓（新規）
施　燕（新規）
髙橋　沙希（継続）
中村　朋美（新規）
日並　彩乃（継続）
李　曉辰（継続）
榧木　亨（新規）
佐藤健太郎（継続）
佐藤トウイウエン（継続）
孫　知慧（新規）
中田　美絵（継続）
二ノ宮　聡（継続）
藤原　崇人（継続）
前原あやの（継続）
宮嶋　純子（新規）
山田　明広（継続）
横山俊一郎（継続）
会田　大輔（新規）
岩尾　一史（継続）
新見まどか（継続）
毛利　英介（新規）
恵崎　麻美（継続）
茶谷まりえ（継続）
吉田　雄介（継続）
橘　千早（新規）
中葉　芳子（継続）

東アジア宗教儀礼研究班

非典籍出土資料研究班

比較信仰文化研究班

日本文学研究班

山寺美紀子（新規）

西洋文学における信仰とフィクション研究班
入子　文子（新規）

（三）準研究員

近世近代日中文化交渉（日中移動伝播）研究班
王　君強（新規）
辜　承堯（継続）
左　春梅（新規）

東アジア宗教儀礼研究班
橘　悠太（継続）
姚　晶晶（継続）
齋藤　鮎子（継続）

比較信仰文化研究班
岡村　心平（新規）

身体論研究班